

柏原市

大県郡条里遺跡

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013年10月

公益財団法人 大阪府文化財センター

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第241集

柏原市

大県郡条里遺跡

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

公益財団法人 大阪府文化財センター

序 文

本書は、当センターが柏原市法善寺4丁目にて平成23～24年度に実施した寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

大県郡条里遺跡の所在する柏原市は、大和川と石川が合流するところにあり、古来より交通の要所です。遺跡の東側、生駒山西麓から扇状地にかけては、多くの遺跡が立地しており、縄文時代早期より集落が営まれていました。古墳時代後期には平尾山古墳群が築かれ、府内屈指の鉄器生産遺跡であります大泉遺跡、大泉南遺跡で集落が営まれています。古代には、東高野街道に沿うように「河内六寺」と称される寺院が建立されて、その景観は華やかなものだったことでしょう。

調査地は、このような多くの遺跡が立地する扇状地と旧大和川水系である玉櫛川の自然堤防に挟まれた低地部に位置します。低地部は各時代の厚い堆積層で覆われており、これまであまり実態が分かっていないところといえます。今回の調査では縄文時代の河川、およびその左岸が見つかり、当時の環境を考える上でも重要な成果となりました。

また、大県郡条里遺跡はその名にあるように、条里型地割が現地表に良好に残る地域でもあります。調査では条里型地割にもとづく水田が平安時代に遡る可能性が指摘できました。現在も隣接地で調査を継続しており、今後の成果に期待されるところです。

最後になりましたが、調査にあたっては、地元の皆様をはじめ、八尾土木事務所、大阪府教育委員会、柏原市教育委員会など関係諸機関、ご指導、ご助言を賜りました多くの方々に感謝申し上げますとともに、今後とも当センターの調査事業に、より一層のご理解、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成25年10月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 田邊 征夫

例 言

1. 本書は、大阪府柏原市法善寺4丁目地内に所在する大県部条里遺跡11-1調査区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴い、大阪府八尾土木事務所から委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 発掘調査、整理作業の受託契約、受託期間、および調査体制については以下のとおりである。

[発掘調査]

受託契約名

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県部条里遺跡発掘調査（その1）

受託契約期間 平成23年6月1日～平成25年2月28日

現地調査期間 平成23年6月1日～平成24年11月30日

調査体制 平成23年度 調査課長 江浦 洋 調整グループ長 岡本茂史
調査グループ長 岡戸哲紀 主査（南部総括）西村 歩 副主査 島崎久恵
平成24年度 調査部長 江浦 洋 調整課長 岡本茂史
調査課長 岡戸哲紀 主査（南部総括）西村 歩 主査 駒井正明

[整理作業]

受託契約名

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県部条里遺跡発掘調査（その2）

受託契約期間 平成24年12月3日～平成26年10月31日

整理期間 平成24年12月3日～平成25年10月31日

調査体制 平成24年度 調査部長 江浦 洋 調整課長 岡本茂史
調査課長 岡戸哲紀 主査（南部総括）西村 歩 主査 駒井正明
平成25年度 事務局次長兼総務企画課長 江浦 洋 調整課長 岡本茂史
調査課長 岡戸哲紀 調査第二課長補佐 市本芳三 副主査 島崎久恵

4. 本書で用いた現場写真は調査担当者が撮影し、遺物写真については、久禮孝志が担当した。
なお、河川の土壌サンプル採取に際して当センター調査課 主査 井上智博の協力を得るとともに、堆積状況に関して教示を得た。また、出土した縄文土器の整理にあたっては、当センター調査課 技師 河本純一の教示を得た。
5. 調査に際しては、大阪府教育委員会、大阪府八尾土木事務所のご指導、ご協力を得た。
6. 調査にあたっては、以下の委託分析を実施した。その結果は第4章に掲載した。
大型植物遺体同定分析 パリノ・サーヴェイ株式会社
放射性炭素年代測定（AMS法）株式会社 パレオ・ラボ
7. 本書の作成は調査担当者で進め、最終的な執筆、編集は島崎が行った。
8. 本調査に関わる図面・遺物・写真などの資料は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 標高は東京湾平均海面（T.P.）を用いた。
2. 座標は世界測地系を使用し、平面直角座標系第Ⅵ座標系に準拠する。座標単位は全てmであるが、図中では単位を省略している。
3. 本書で用いた北は座標北である。座標北に対して、磁北は $6^{\circ}47'18''$ 西へ、真北は $0^{\circ}12'42''$ 東へそれぞれ偏移する。
4. 現地調査ならびに遺物整理は、当センターの定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土色標記は小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』平成19（2007）年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。
6. 遺構番号は、調査区ごとに、遺構面・種類に関係なく、検出順にアラビア数字の通し番号を付与し、その後に遺構の種類を標記した。本書では1区は1ー遺構番号、2区は2ー遺構番号と遺構番号の前に調査区を付して区別している。
7. 各遺構図・遺物実測図の縮尺は、それぞれの図に縮尺を明記したスケールを付している。原則として全体図を500分の1とし、個別平面図を20分の1、40分の1とし、必要に応じて他の縮尺を用いた。また遺物実測図の縮尺は4分の1を基本とし、縄文土器・鉄製品・石製品は3分の1、打製石器は3分の2とした。ただし、大型の縄文土器は4分の1としている。
また須恵器は断面を黒く塗りつぶし、瓦器はアミカケとして、黒色土器はA類は内面を、B類は内外面をアミカケとして土師器その他の土器と区別した。また打製石器の欠損部は、黒く塗りつぶした。その他、漆付着範囲や被熱範囲をアミカケして示している。
8. 土器の実測に関しては、残存口縁が6分の1以下の破片の場合、口縁のラインを二重線で切って表現している。
9. 遺物実測図中の各遺物に付与した番号は、写真図版とも一致する。

目 次

序文
例言
凡例
目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査・整理の方法	2
第2章 位置と環境	4
第3章 調査成果	7
第1節 層序	7
第2節 検出遺構	17
第1項 古代末～中世の調査	17
第2項 古代～縄文時代晩期の調査	31
第3項 縄文時代の調査	55
第4章 自然科学分析	77
第1節 大型植物遺体同定分析（バリノ・サーヴェイ株式会社）	78
第2節 放射性炭素年代測定（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ）	88
第5章 まとめ	92

挿 図 目 次

図1	大泉郡条里遺跡調査位置図	1	図29	第12b面 2区 土坑 断面図	44
図2	調査区配置図、地区割り図	3	図30	第12b面 1区 ビット 断面図	45
図3	周辺の遺跡分布図	5	図31	第12b面 1区 ビット 断面図	46
図4	調査区東西断面図 (1-1・2区)	11、12	図32	第12b面 2区 ビット 断面図	47
図5	調査区南北断面図 (2-1・2区)	13、14	図33	第10a層関連 出土遺物	49
図6	調査区南北断面図(1-2区)	15	図34	第10a層・第11a層関連 出土遺物	50
図7	第2-1a面・第2-4a面 復元図	16	図35	第11a層～第12b層関連 出土遺物	52
図8	第3-1a面 遺構平面図	18	図36	第10a層・第11a層関連 出土鉄製品・石製品	52
図9	第3-3a面・第3-3b面 遺構平面図、2-2区南壁断面図	19	図37	第10a層～第12b層関連 出土石器	53
図10	第4a面 遺構平面図、 2-13水口 平・断面図	21	図38	第13a面 遺構平面図	56
図11	1-2区北壁断面図	22	図39	第13a層 出土遺物	56
図12	第5a面・第6a面・第7a面 遺構平面図	23	図40	第13a面 ビット・土坑 断面図	57
図13	第3-1a層～第6a層関連 出土遺物	24	図41	第14a面 1-1区東半 遺構平面図、1-179土坑 平・断面図	57
図14	第8a面・第9-1a面 遺構平面図、遺物出土状況図	26	図42	第14b面・第15a面・第15b面 遺構平面図	59
図15	第7a層・第8a層関連 出土遺物	28	図43	第14b層中 遺物出土状況図 (a・b・c)	61
図16	第3-1a層～第8a層関連 出土鉄製品・石製品	28	図44	第14b層 出土遺物(1)	63
図17	第9a層関連 出土遺物	30	図45	第14b層 出土遺物(2)	64
図18	第10-1a面・第11a面 遺構平面図	32	図46	第14b層 出土遺物(3)	65
図19	第12a面 遺構平面図	34	図47	第14b層 出土遺物(4)	68
図20	第12a面 1区 溝 断面図	35	図48	第14b層 出土遺物(5)	69
図21	第12a面 2区 溝 断面図	35	図49	第14b層 出土遺物(6)	70
図22	第12a面 1区 土坑 平・断面図	36	図50	第14b層 出土遺物(7)	71
図23	第12a面 1区 ビット 断面図	37	図51	第14b層 出土遺物(8)	73
図24	第12b面 遺構平面図、 1-58・96溝 断面図、 1-162溝 平・断面図	39、40	図52	第14b層 出土遺物(9)	74
図25	第12b面 1区 溝 断面図	42	図53	第14b層 出土遺物(10)	75
図26	第12b面 2区 溝 断面図	42	図54	第14b面・第14b層 出土石器・ 石製品	76
図27	第12b面 1区 土坑 断面図	42	図55	大型植物遺体群集	81
図28	第12b面 1区 土坑 平・断面図	43	図56	暦年較正結果の分布	89
			図57	暦年較正結果	89
			図58	炭素・窒素安定同位体比	91
			図59	炭素安定同位体比とC/N比の関係	91
			図60	出土遺物種別グラフ	96

挿 表 目 次

表1	大型植物遺体同定結果(1)	79	表5	土器付着炭化物の炭素・窒素 安定同位体比と炭素窒素比	91
表2	大型植物遺体同定結果(2)	80	表6	出土遺物集計表	96
表3	測定試料および処理	88			
表4	放射性炭素年代測定および 暦年較正の結果	89			

挿入写真目次

写真1	大型植物遺体	87
-----	--------	----

写真図版目次

図版1 調査区遠景・調査区断面

- 1 調査区遠景 (北から)
- 2 1-1区西半 東西断面 (北東から)
- 3 1-1区 鳥島断面 (北から)
- 4 2-2区 鳥島検出状況 (東から)
- 5 第1b層上面 2-1区 土坑検出状況 (北から)

図版2 調査区断面

- 1 1-1区 南壁断面 鳥島の拉張 (北東から)
- 2 1-2区 南壁断面 第2-4a層~第6a層 (北から)
- 3 2-2区 西壁断面 第4a層~第9a層 (東から)
- 4 1-2区 南壁断面 第7a層~第12b層 (北西から)
- 5 2-2区 南壁断面 (北から)
- 6 1-2区 南壁断面 第12b層~第13a層 (北西から)
- 7 2-2区 西壁断面 第13a層~第15a層 (東から)
- 8 2-2区 西壁断面 第14b層~第18a層 (東から)

図版3 第3-1a面

- 1 第3-1a面 1-2区 全景 (東から)
- 2 第3-1a面 1-1区 全景 (北西から)

図版4 第3-1a面~第3-3a面

- 1 第3-1a面 2-1区 全景 (東から)
- 2 第3-1a面 2-1区 鳥島検出状況 (北から)
- 3 第3-1a面 2-2区 全景 (南から)
- 4 第3-3a面 2-1区 検出状況 (南東から)
- 5 第3-3a面 2-2区 全景 (東から)

図版5 第4a面

- 1 第4a面 1-2区 全景 (北西から)
- 2 第4a面 2-2区 全景 (南西から)

図版6 第4a面

- 1 第4a面 2-1区 全景 (東から)
- 2 第4a面 1-1区西半 全景 (東から)
- 3 第4a面 2-1区 2-13水口完掘状況 (北から)
- 4 第4a面 2-1区 2-10畦畔検出状況 (南から)
- 5 第4a面 2-2区 2-8畦畔と南壁断面の相関 (北から)

図版7 第8a面~第10-1a面

- 1 第8a面 1-2区 全景 (東から)
- 2 第8a面 1-2区 瓦器検出状況 (南から)
- 3 第9-1a面 2-2区 全景 (東から)
- 4 第9-1a面 2-1区 全景 (東から)
- 5 第10-1a面 1-2区 全景 (東から)
- 6 第10-1a面 1-2区 鉄鎌出土状況 (東から)
- 7 第10-1a面 2-2区 全景 (東から)

8 第10-1a面 2-1区 全景 (東から)

図版8 第12a面~第12b面

- 1 第12a面 2-1区 全景 (東から)
- 2 第12a面 1-2区 全景 (北東から)
- 3 第12a面 1-1区東半 全景 (東から)
- 4 第12a面 1-1区西半 全景 (北から)
- 5 第12a面 2-1区 2-60溝断面 (東から)
- 6 第12a面 1-2区 1-66土坑断面 (南から)
- 7 第12b面 1-1区 1-133溝断面 (南から)
- 8 第12a面 1-2区 1-64ピット断面 (東から)

図版9 第12b面

- 1 第12b面 1-2区 全景 (東から)
- 2 第12b面 1-1区西半 全景 (北東から)

図版10 第12b面~第14a面

- 1 第12b面 2-2区 全景 (東から)
- 2 第12b面 2-1区 全景 (東から)
- 3 第12b面 1-2区 1-83溝検出状況 (北西から)
- 4 第12b面 1-2区 1-109ピット断面 (南から)
- 5 第12b面 1-2区 噴砂検出状況 (南東から)
- 6 1-2区 噴砂断面 (東から)
- 7 第13a面 1-2区 縄文土器出土状況 (西から)
- 8 第14a面 1-1区 1-179土坑 (北から)

図版11 第15a面

- 1 第15a面 2-2区 2-142河川左岸全景 (東から)
- 2 第14b層中 1-2区 焼土・炭化物 検出状況 (北東から)
- 3 第14b層中 1-2区 縄文土器 出土状況 (西から)
- 4 第14b層中 1-2区 縄文土器 出土状況 (北から)
- 5 第14b面 1-1区 縄文土器出土状況 (南西から)

図版12 中世出土遺物

図版13 中世~古代出土遺物

図版14 古代出土遺物

図版15 古代~古墳時代出土遺物

図版16 出土瓦・鉄製品・石製品

図版17 縄文時代出土遺物

図版18 縄文時代出土遺物

図版19 縄文時代出土遺物

図版20 縄文時代出土遺物

図版21 縄文時代出土遺物

図版22 出土石器

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

本調査は恩智川（法善寺）多目的遊水地の建設に伴うものである。恩智川（法善寺）多目的遊水地は、寝屋川流域総合治水対策事業の一つとして計画され、豪雨時に恩智川の水を計画的に貯留し、河川下流域の水量を調整するものであり、平常時には公園などとして有効活用されるものである。

予定地は柏原市の北端、恩智川の東側に位置している。約114,000㎡と広範に及ぶもので、本調査地を含む大県部条里遺跡、山ノ井遺跡にまたがっている。そこで、平成14年度・15年度の2カ年にわたって、大阪府教育委員会による予定地内の確認調査が行われた（註1）。確認調査では古墳時代～中世の遺構、遺物が確認されたことに加え、中世の包含層より、縄文時代や弥生時代前期の遺物が出土することから、下層にさらに古い遺構、遺物が存在することが予想された。この成果をうけ、大阪府八尾土木事務所から「寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県部条里遺跡発掘調査（その1）」として、公益財団法人大阪府文化財センターが委託をうけ、大阪府教育委員会の指導のもと発掘調査を行うこととなった。

現地調査は平成23年6月1日から平成24年11月30日まで行った。

現地調査終了後、平成24年12月3日、「寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県部条里遺跡発掘調査（その2）」として委託を受け、遺物整理を実施し、平成25年10月31日、本書の刊行をもって一連の調査は終了した。

（註1）大阪府教育委員会 2005『大県部条里遺跡確認調査概要 - 恩智川（法善寺）多目的遊水地予定地の調査』

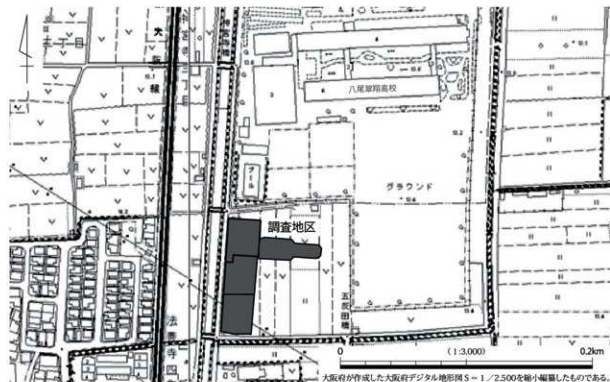


図1 大県部条里遺跡調査位置図

第2節 調査・整理の方法

本調査地の大泉郡条里遺跡11-1は柏原市法善寺4丁目地内に所在し、遺跡範囲の北端に位置する。当センターでは従来、大阪府下の全調査域を統一した基準で区画できるよう、世界測地系に基づく平面直角座標系第Ⅵ系を基準とした第Ⅰ～Ⅵ区画までの6段階の地区割りを設定している。今回の調査区はG6-3-2・3H、3Ⅰ（第Ⅰ～Ⅲ区画）の範囲に位置しており、遺物の取り上げは第Ⅳ区画までを用いた。

主要遺構面は写真測量を実施し、その他の遺構面は平板測量により平面図を作成した。写真測量による遺構全体図の作成は、大阪府教育委員会による確認調査の実績をもとに当初2面を設定したが、調査途中に1面を追加したため合計3面を、50分の1縮尺（100分の1縮小編集図）で図化した。また個別の遺構や遺物出土状況図などの作成は、10分の1縮尺で手実測を行った。

4級基準点は調査地際に3点設置し、それらをもとに調査地内に基準杭を設定した。写真測量や手実測による図面作成は、それら基準杭を使用して行った。出土遺物は層ごとに、前述の基準杭で示される10メートル四方を単位とした地区ごとに取り上げ、日付を付して登録番号を付与した（図2）。また調査期間中現場詰所にて、遺物洗浄・注記作業等の基礎的な整理作業を平行して実施した。

調査は盛土・表土及び近世相当層を重機で除去した後、調査区北側を1区、南側を2区とし、それぞれ1-1・1-2区、2-1・2-2区と細分して人力による掘削作業を開始した。土層断面図は、最終的に1・2区西壁、1-1・1-2区南壁を掘削限界まで作成した。

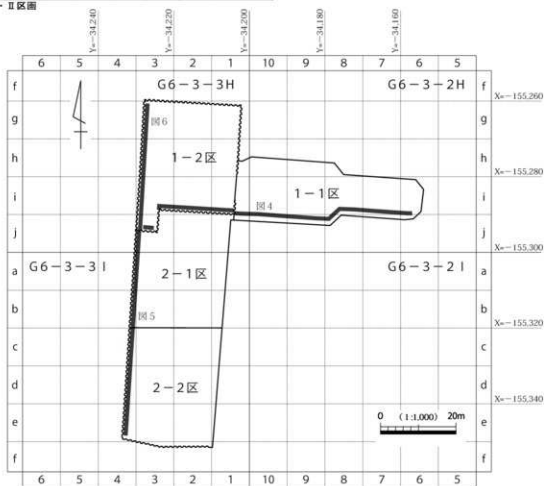
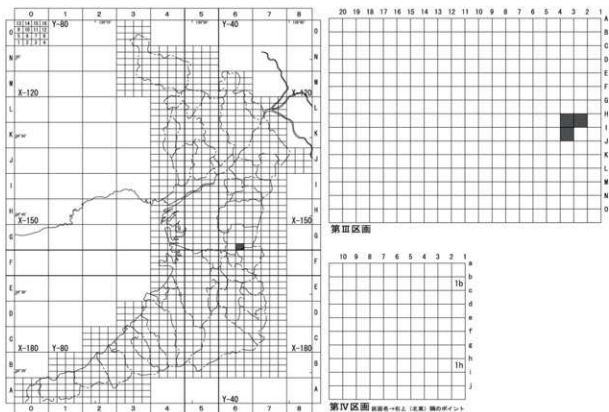
調査は工事の掘削深度により、1-1区東半はT.P.+10.7m、他はT.P.+8.0mまでが対象となった。

水準測量の際に用いた標高はT.P.値（東京湾平均海面）で、北は全て座標北を示す。土層断面や遺構等の写真は、35mmカメラ（白黒・カラーリバーサル）及びデジタルカメラを用いて、調査担当者が撮影した。調査区の全景写真や、特に重要な遺構写真は中形カメラ（6×7、白黒・カラーリバーサル）にて撮影し、その一部を本報告書の写真図版に使用した。全景写真は調査区の北・東側に設置した5段の写真用足場から撮影した。

遺構名の記載方法は、調査区毎に通し番号を付与しており、「調査区-遺構番号（アラビア数字）-遺構種類」とした。例えば2区で検出した遺構番号が100番の遺構が土坑だとすると、遺構名称は2-100土坑となる。

調査は平成24（2012）年11月30日に完了した。最終調査面積は1980㎡である。発掘調査期間中ならびに発掘調査終了後は、適宜大阪府教育委員会の立会を受けた。

図面台帳、遺物登録台帳、写真台帳は、『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して作成した。遺物は洗浄・注記後、接合・石膏復元を行い、重要もしくは図化可能なものを選別し、実測図を作成した。本稿で掲載した遺物のトレース図版は、その実測図をもとに作成したものである。実測対象遺物のうちの一部は、写真担当の職員が撮影し、本報告書に掲載した。最終的に遺物は、報告書掲載遺物とそれ以外とに分類して収納した。なお掲載遺物は、基本的に報告書記載の遺物番号順に収納している。



第2章 位置と環境

大県郡条里遺跡は柏原市の北端、八尾市との市境から南側の柏原市法善寺2・4丁目、平野1丁目に所在する遺跡で、大和川と石川の合流地点から約2.5キロ北に位置している。現在の和川は1704年に付け替えられたものであるが、それ以前は現在の長瀬川から二俣に分かれて玉籾川に沿って流れており、旧大和川は自然堤防としてその痕跡をみることができる。遺跡の東側には生駒山地西麓からの扇状地が広がっており、旧大和川が形成した自然堤防との間の低地部分に大県郡条里遺跡は位置している。

大和川と石川が合流する地点は、まさに河内平野の扇の要であり、古来より水運の要衝であると同時に、生駒山地に沿ってのびる東高野街道（旧国道170号）は奈良街道・長尾街道と交差しており、大和の各遺跡とつなぐ交通の拠点ともいえる。

調査区の西側には恩智川が北流しており、恩智川周辺から旧国道170号にかけて方形の区画がみられ、古来の耕地区画である条里型地割の名残を良く留めている。

遺跡周辺ではこのような環境のなか、多くの遺跡が立地している。

縄文時代には、当遺跡の南東に位置する柏原市大県遺跡で土器の出土がみられる。まず、縄文時代早期には、調査地から800m東の扇状地上台地で押型文土器や石器が出土、縄文時代後期の石圃いも検出され集落が営まれる。集落はその後、扇状地に拡大しており、旧国道170号に近接した調査では、縄文時代後期末～晩期前半の土坑や溝が検出され、土器や石器が多く出土している。当遺跡の北東に位置する八尾市恩智遺跡でも恩智川改修に伴う調査で、再堆積層からではあるが、縄文時代前期～後期の遺物が出土している。また、恩智神社の御旅所である「天王ノ杜」周辺では晩期の土器がまとめて出土しており、周辺の扇状地上に集落が営まれていることが分かる。

弥生時代に入ると恩智遺跡がこの地域の拠点的な集落として位置づけられる。大県遺跡でも、中期の竪穴建物やサヌカイトの集積土坑、後期の竪穴建物が検出されている。当遺跡の東側に広がる扇状地に位置する八尾市神宮寺遺跡では弥生時代中期の土器棺墓、弥生時代後期の集落を検出しており、柏原市山ノ井遺跡・平野遺跡でも遺物の出土がみられるなど、山麓沿いに集落の分布が広がっている。また、弥生時代後期には高尾山山頂遺跡で高地性集落が現れる。なお、高尾山の標高約200mの地点では多紐細紋鏡がみつまっている。

古墳時代には神宮寺遺跡で古墳時代初頭の河川が検出され、当遺跡の東に隣接する山ノ井遺跡でも遺物の出土がみられる。古墳時代中期～後期にかけては、大県遺跡が最盛期を迎える。隣接する柏原市大県南遺跡を含めて、鍛冶工房や鍛冶関連遺物が多く出土しており、鉄器生産に関わる集落であることが知られている。同時に韓式系土器が多く出土することからも渡来人との関わりが指摘されており、鍛冶技術者集団の集落と考えられている。なお、大県南遺跡ではガラス玉の鋳型も出土しており、鉄器以外の生産も行っていたことが分かる。遺跡背後の生駒山地西麓では巨大な群集墳である平尾山古墳群が築かれている。平野・大県支群ではかんざしやミニチュア炊飯具といった渡来系氏族との関わりが深い副葬品に加え、鉄滓など鍛冶関連遺物が出土しており、大県遺跡との関連が指摘されている。

先述のように、大和川と石川の合流地点は古くから交通の要衝の地であり、飛鳥・奈良時代には生駒山地西麓に沿って、多くの寺院が建立された。『続日本紀』天平勝宝八年の条には、孝謙天皇が「河内六寺」に行幸された記載がある。「河内六寺」とは南から鳥坂寺、家原寺、智識寺、山下寺、大里寺、三宅寺

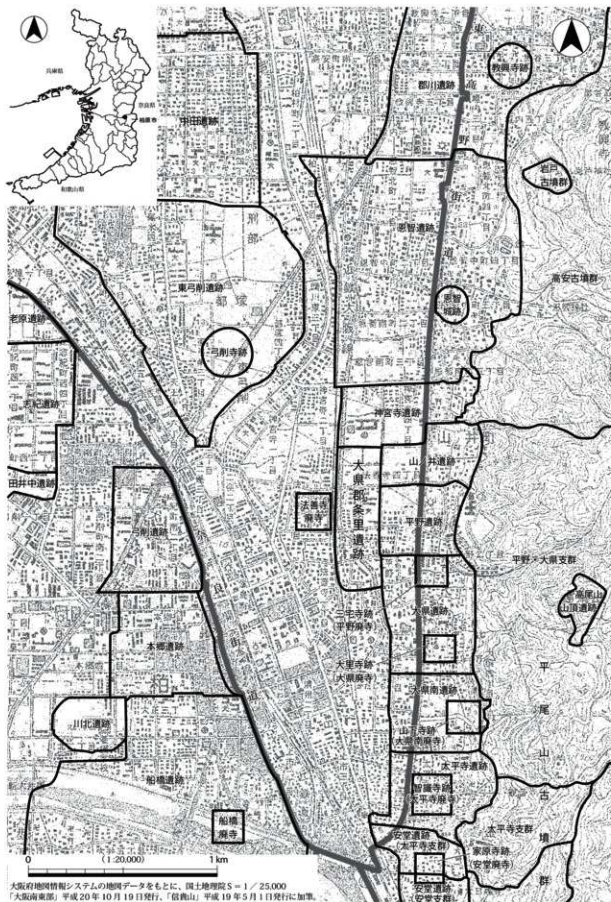


図3 周辺の遺跡分布図

である。当遺跡は古代の行政区画では大県郡大里郷に属するが、大里郷域では大県南遺跡で「山下春川」の墨書がある土師器杯が出土し、大県遺跡では「大里寺」と書かれた墨書土器が井戸から出土するなど、山下寺（大県南廃寺）、大里寺（大県廃寺）の所在が明らかになりつつある。また、近接した調査では同時期の遺構、遺物が多くみられ、寺院の造営に関連した集落があるものと考えられる。三宅寺（平野廃寺）は、詳細は不明であるが平野に所在するとされる。

また、先述のように調査地周辺は条里型地割を現地表に良く留める地域であるが、大県郡の条里坪付けの詳細などは明らかではない。

八尾市神宮寺に所在する常世岐姫（とこよきひめ）神社は渡来系氏族常世連を奉斎する社とされる。その官寺である神宮寺は平安時代初頭に建立されたと伝えられているが詳細は明らかではない。

中世には、大県南遺跡で土坑墓が検出されており、山下寺跡寺院の調査では14世紀の掘立柱建物や土坑等が検出されており、寺院の廃絶後に集落が営まれていることが分かる。神宮寺遺跡でも鎌倉時代の生産域が確認された他、室町時代の井戸やピットが、山ノ井遺跡では整地層の可能性のある土層が確認されるなど、集落の一端が分かりつつある。低地部の様子はよく分からないが、当調査区を含めた法善寺多目的遊水地の確認調査では対象地のほぼ全域で中世の遺物が確認されており、中世における集落及び生産域が広がる可能性が十分に考えられる。

現在の大和川が付け替えられたことは先述のとおりだが、17世紀中～後半ごろには土砂の流入で河床の上昇が深刻化していた。河床は周囲の水田より高くなり、増水時の被害は甚大となり、更に天井川化するという悪循環であったようである。当時の状況を良く示すものとして、中家文書である「堤切所之覚・同付箋図（仮称）」がある（文献37）。洪水被害の惨状を述べ、改善工事の実施を要望する訴状で、添付された絵図には延宝二年の寅年洪水（1674年）以降の堤切れ所や改善策が付箋等で表示されている。これによれば、延宝二年の洪水で玉櫛川の河口にあった法善寺二重堤が流出し、その結果、玉櫛川の河口が広がり毎年のように多くの切れ所が発生していることが分かる。二重堤の流出後、本支流が逆転して、玉櫛川に濁流が流れ込み、玉櫛川とその下流域に洪水が多発、広域化したことが窺われる。洪水の被害は当調査区周辺にも及んだものと考えられる。今回の調査では、第2-4 b層で厚い砂層を確認したが、こういった洪水の頻発を示すものであろう。

近世には河内平野一帯は島畠を利用した棉花の栽培が盛んになり、良質な河内木綿が知られる。

第3章 調査成果

第1節 層序 (図4～6、図版1・2)

第1章第2節で略述したように、今回の調査では盛土及び近世相当層までを重機による掘削の対象とした。盛土以下の土層堆積状況は1区南端のアゼで主に観察し、他は人力掘削対象となる第3層以下を土層観察の対象とした。

当遺跡は複数の氾濫堆積物の供給によって埋没しており、氾濫堆積物をはじめとする水成層とその上部の土壌化層をセットとして層序を捉えるよう努めた。各層は水成層上部の作土層や古土壌化層といった土壌化層をa層とし、母材である水成層をb層と表すことを基本としている。なお、遺構面の呼称については、X層の上面を第X面とした。

第0層 現代の耕作土層である。

第1層 作土層及びその母材である氾濫堆積層からなる。第1a層は細礫を多く含む砂質の強い土層で耕作土と考えられる。2層以上に細分できる。第1b層は灰白～淡黄色(2.5Y8/1～8/4)細砂を主体とした氾濫堆積層である。ラミナを明瞭にみることができる。第1b層が厚く確認できたのは第2-1a層の低い部分、つまり第2-1a面で水田となっていた部分であり、層厚0.3mを測る。

第2層 作土層及びその母材である氾濫堆積層からなる。第3-1a面を覆う氾濫堆積層(第2-4b層)を境に上層を第2層とした。第2-1a層～2-4a層の4層に細分することができる。先述のとおり、遺構面としての調査は第3-1a面から行っているが、断面観察及び機械掘削終了時の状況から、第2面の土地利用の状況を復元し図7に示した。図4と合わせて参照されたい。

第2層に関連する各面では水田及び鳥島として利用されていたことが分かる。第2-1a層は黄灰色(2.5Y5/1)細砂混じり粘質シルトでマンガンの沈着が著しい。水田の作土層である。第2-2a層はにぶい黄色(2.5Y6/3)細～中砂を主体とする。砂層であるがラミナはみられず、a層と考えたが、作土というより盛土の可能性も考えられる。第2-2b層は鳥島の肩部に局部的に残る細砂でラミナがみられる。第2-3a層は場所によって若干土層の雰囲気は異なるが、灰色のシルト混じり細～中砂、褐灰色の細砂混じりシルトで水田の作土層である。第2-4a層が砂ブロックを多く含んでいるのに対して、ややシルト質である。第2-4a層は橙色(7.5YR6/6)シルト混じり細砂と第2-4b層の砂層がブロック状に混じっている。水田の作土層である。第2-4b層は灰白色(7.5Y8/1)粗砂を主体とする。なお、いずれの層も鳥島上部の作土層は削平によりほとんど遺存していない。

次に関連する各面の状況について簡単に触れておきたい。調査区東西断面(図4)で明らかのように、第2-4b層(土層15)は台形状の高まりとして遺存している。この高まりが鳥島である。第3-1a面が第2-4b層で埋没した後、第2-4b層を芯にして鳥島が構築されている。鳥島はその後の擾乱によって不明な部分もあるが、幅約5～10mの南北方向に長い5基の高まりとして把握することができる。最も西に位置する鳥島は鍵状に屈曲している。第2-3a面は、これをほぼ踏襲するものと考え

えられる。第2-1a面では第1b層(図4土層5・5')で覆われている低い部分が水田部分と判断でき、幅約3~7mの南北に長い水田が2筆、それ以外は鳥島であったと復元できる。第2-1a面では第2-3・4a面に比して鳥島が拡大している状況が窺われる。なお、第2-2a面では第2-3a面の鳥島と比高差があまりなく、図4土層9は作土層というよりは、第2-1a面の鳥島に関連した盛土と考えるほうが妥当かもしれない。

また、第1b層堆積後、図版1-5のような溝状の土坑が平行して密に掘削されている。東西方向に長いものと南北方向に長いものがある。基本的に第1b層に類似した砂とシルト質土のブロック混合土であり(図4土層4)、下部に水成層が見られるものもある。土坑の底部、側面には鉄分の沈着が著しい。土坑の性格は不明であるが、少なくとも人為的に埋め戻されていることが分かる。類似する遺構は同時期の藤井寺市・柏原市船橋遺跡や東大阪市・八尾市池島・福万寺遺跡でみられ、災害復旧との関連が指摘されている。また、第2-3a層上面でも細砂ブロックの入った溝状の土坑が確認できた。

第1層~第2層には陶磁器類が含まれており、近世(中世末頃)~近代の耕作土と考えられる。

第3層 第2-4b層を掘削して確認した中世作土層で、第3-1a層・第3-2a層・第3-3a層に細部した。第3-1a層は層厚0.1~0.2mを測り、調査地内ではほぼ水平に堆積する灰色(5Y4/1)細砂混じりシルト層である。上部には白色シルトを筋状に含んでいる。第3-2a層は層厚0.1m未満で、やはり調査地内をほぼ水平堆積するオリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト混じり細砂層である。第3-1a層に比べ、砂質が強い。第3-3a層はオリーブ黒色(5Y3/1)シルト混じり細砂である。第3-2・3a層は調査区の北側に向かうほど、上層の攪乱を受け遺存状況が悪い。第3-3b層は、調査地内の大半で確認した層厚0.1~0.2mの細砂を主体とする氾濫堆積層である。調査区の東側に向かって薄くなっている。また、第3-3b層の上部は溝状に粘質シルトブロックを含んでおり(図4土層19・図5・6土層11)、第3-3b層と第3-3a層の間に本来は更に作土層があったことが想定される。

第4a層~第7a層はb層を介せず、類似した作土層の連続である。ほぼ水平に堆積しているが、東側がやや高く、西に向かって緩やかに下降している。南北方向をみると、どちらかに傾斜するという傾向はみられず、0.1m以下の凹凸がみられる程度である。

第4a層 第3-3b層を掘削して確認した中世作土層で、ほぼ水平に堆積する。層厚0.1~0.2mを測る灰色(7.5Y4/1)細砂混じりシルト層である。第3-2a層に比べて細砂の混じりが少なく細粒で、炭化物を含む。

第5a層 第4a層を掘削して検出した中世の作土層である。層厚0.1m未満の暗青灰色(5PB4/1)細砂混じりシルト層である。第4層に比べ砂質が強い。第5a層の下部にわずかに砂層が点在する部分があり、第6a面でこの砂で埋まった足跡がわずかに確認できた。なお、1-1区東側では第4a層と第5a層の細分ができなかった。

第6a層 第5a層を掘削して検出した中世の作土層である。層厚は0.1m前後を測る。青灰色(5B5/1)細砂混じりシルト層である。上部付近には特に炭酸カルシウム結核の沈着が著しい。また、第5a層と第6a層の層境は火災状に混じりあっており、地震による地層の変形の可能性が指摘できる。

第7a層 第6a層を掘削して検出した中世の作土層である。層厚は0.1m前後を測る。暗青灰色(5PB4/1)細砂混じりシルトで、炭化物をわずかに含み、第8a層に比べ砂質が強い。第7b層は青灰

色(5PB6/1)の細砂で層厚0.1m未満である。調査区南側、2-1区南半から2-2区では確認できるものの、1区では第8層との境に砂層が点在するのみである。

第8a層～第10a層は上層までと比して、粘性が高い作土層である。明瞭なb層を介さない。ほぼ、水平に堆積するが、調査区東側から西側に向かって緩やかに下降している。

第8a層 第7層を掘削し検出した中世の作土層である。層厚は0.1m前後を測る。青灰色(10BG5/1)細砂混じり粘質シルト層である。

第9a層 第8a層を掘削して検出した古代末～中世の作土層である。暗灰黄色(2.5Y4/2)・灰オリーブ色(7.5Y4/2)細砂混じり粘質シルト層で、砂質の強弱から9-1a層、9-2a層に細分した。第9-2a層は第9-1a層に比して砂質が強い。層厚はともに0.1m前後を測る。第9a層は植物遺体を多く含んでおり、他の土層に比して変色が著しい点が特徴的である。2-2区では第9-2a層の下部にわずかに砂が点在するのが確認できる。

第10a層 第9-2a層を掘削して検出した古代の作土層である。層厚は0.2m前後を測る。上下層に比して、粗粒の砂を含む。2層に細分した。第10-1a層は青灰色(5PB5/1)細砂混じり粘質シルト層、第10-2a層は暗青灰色(5PB4/1)細砂混じり粘質シルト層で、オリーブ黒色(5Y3/1)細砂混じりシルトが混じる。

第11a層、第12a層は上層までと比して暗色の強い土壌化層で、黒色の帯として認識できる土層である。第11a層からは細片ではあるが、比較的多くの遺物が出土した。

第11a層 第10a層を掘削して検出した古代の土層である。層厚は0.1m前後を測る。第11a層は暗青灰色(5PB3/1)・暗紫灰色(5P4/1)細砂混じり粘質シルトである。遺物を比較的多く含んでいる。第11a層は、ほぼ水平であるが、調査区東側から西側に向かって、緩やかに下降する。また、2-2区南側は第12a面で低地となっており、下層から暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)細～中砂混じり粘質シルト、暗青灰色(5PB4/1)細砂混じり粘質シルト、青黒色(5B2/1)細砂混じり粘質シルトが堆積している。第11a面でもこの低地の影響を受け、わずかに南側が低くなっている。

第12a層 第11a層を掘削して検出したオリーブ黒色(7.5Y3/1)粘質シルト層である。遺存状況は全体に悪く、上層に削平され遺存しない部分もみられる。層厚は0.1m前後を測る。第11a面までがほぼ水平であったのに対し、第12a層はわずかながらに起伏があったと考えられ、本来、高かった部分が上層に削平された結果と考えられる。第12a層からは遺物の出土は少なかったが、縄文時代晩期の突帯文式土器が含まれており、その他、須恵器片・土師器片がわずかに出土している。第11a層を古代の土層と位置づけており、第10a・11a層からは古墳時代後期の遺物が一定量含まれていることから、これを下層の混入品と理解し、第12a層は縄文時代晩期末以降、古墳時代後期頃までの土層と考えておきたい。

第12a層の母材である第12b層はオリーブ灰色(5GY6/1)・灰色(N5/0)細砂混じりシルトで砂質が強い土層である。細砂を薄く挟み、細分できる部分もある。生痕が著しい。1区では層厚0.2m前後でほぼ水平に堆積するが、2区では、中央付近の第14b層に伴う高まり以外は、南端に向かって下降している。

第12 a層以下は調査区南端（2-2区南端）で確認できる第15 a層に至るまで暗色帯を示す明瞭な土壌化層はない。第15 a層で調査区南端を除いて全体が河川堆積物で埋没しており、これを第14 b層とした。第13 a・第14 a層は第14 b層より上層のシルト～細砂を主体とする細粒の堆積物である。いずれも鉄分の沈着による土色の変化が著しい。

第13層 第12 b層を掘削して検出した土層で、縄文時代晩期の土器が1点出土した。第13 a層は2層に細分が可能であり、第13-1 a層は暗オリーブ灰色(2.5GY5/1)砂質の強いシルト、第13-2 a層は暗緑灰色(7.5GY4/1)砂質の強いシルトである。層厚は0.1～0.2mを測る。第13 b層は1-2区南端のみで検出した水成堆積層である。最大層厚0.2mを測る。

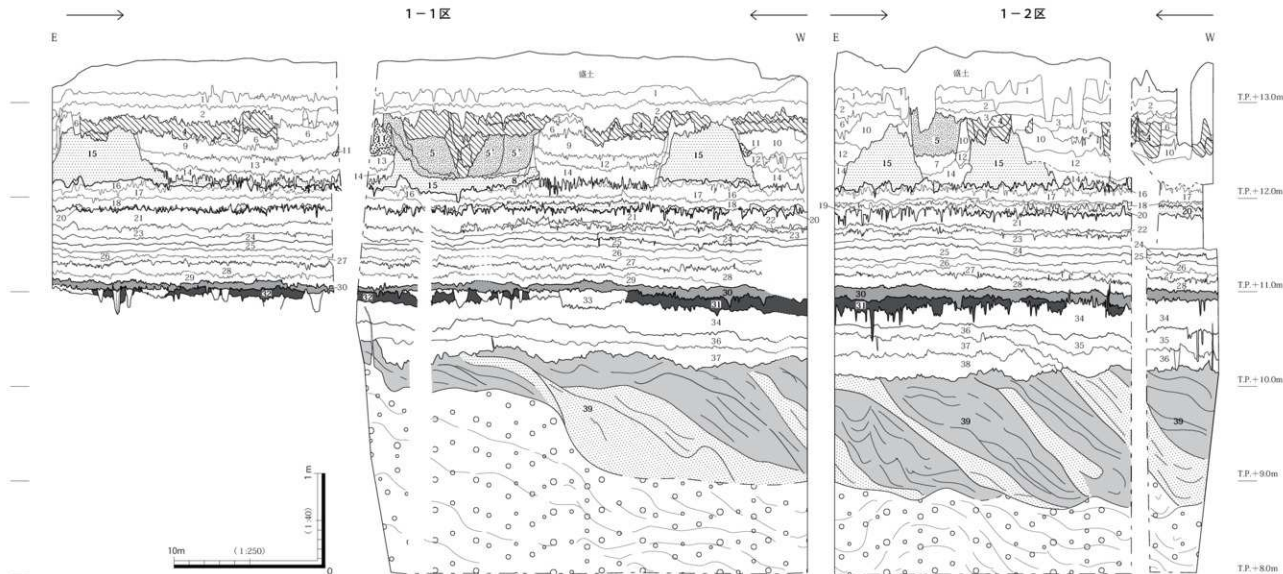
第14層 1-1区・1-2区で検出した縄文時代の土層で、灰オリーブ色(7.5Y4/2)、オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質の強いシルトで、第13 a層と類似している。層厚は0.1～0.2mを測る。調査区全域にはみられず、1区を中心に堆積している。

第14 b層は第15 a層で検出した自然河川(2-142河川)の堆積層で、縄文時代後期後葉～晩期中葉の土器片が多数出土した。調査終了面のT.P.+8.0m以下に続いており、層厚は2mを越える。第14 b層は3層に分けることができる。図4～6では模式的に示しているが、下層は掃流堆積物である粗砂～礫層を主体とするものである。T.P.+8.0mで掘削を終えており、河川の底部は不明である。中層は斜め方向のラミナが顕著な細粒のシルト～細砂とやや粗い粗～中砂の層である。上層は2-2区南端で堆積している有機質を多量に含んだ褐灰色(10YR4/1)細砂混じりシルト、灰色(5Y4/1)中砂混じりシルトで、第14 b層の最終堆積層と考えられる。なお、河川については次節で詳しく触れることとする。

また、調査区では第14 b層が噴出した噴砂を多く検出した。噴砂は第14 b層でもっとも顕著であったが、1.5m近く噴きあがって、第11 a層に達するものもある。このことから、第11 a層堆積後の地震によるものと考えられる。この地震による地層の変形は噴砂のみならず、第11 a層～12 b層が火災状に乱れる部分もみられた。調査地は河川埋没後、第13層、第14層の状況からは、地下水位が高く、排水の不良な軟弱な地盤であったと考えられ、液状化の影響が著しかったものと考えられる。

第15層 第14-2 b層を掘削し、2-2区南西端で検出した土層で、2-142流路左岸を構成する。2-2区南端でのみ確認できる。第15 a層は2層に細分可能で、上層は灰オリーブ色(5Y4/2)微砂混じりシルト、下層は灰色(N4/)微砂である。層厚はそれぞれ約0.2mを測るが、2-142河川に挟まれ、上層は遺存状況が悪い。層からは遺物の出土はない。第15 b層は暗緑灰色(5G4/1)細砂混じり微砂及び暗緑灰色(5G4/1)シルトである。

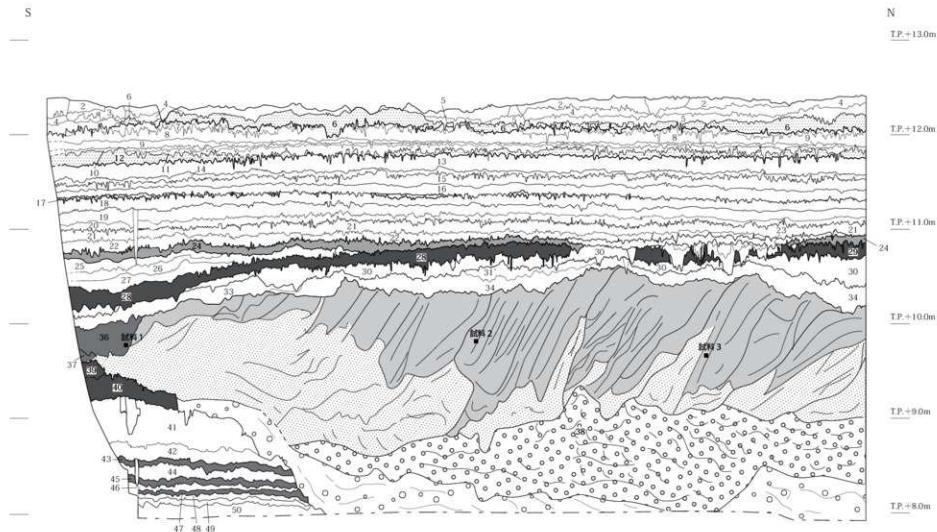
第16層～第23層 第15 a層と同様、2-2区南端のみで確認した。掘削限界のT.P.+8.0mまでの間、炭化物を多量に含む第16層・第18層・第20層と含まない第17層・第19層・第21層が互層に堆積する。層厚はいずれも0.05～0.1mと薄い。これらは当地一帯が徐々に水深を浅くする過程で、水位の深淺を繰り返した際に形成されたものと思われる。なお、遺物の出土はない。



1. 灰 5Y4/1 粗砂質中砂 細砂含む 田原粘土
2. 黄灰 2.5Y6/3 細砂質中-粗砂 マンガン鉄多量 炭分沈着 第1a層 粗作土
3. 土赤い黄 2.5Y6/3 細砂質中-粗砂 第1a層 粗作土
4. 暗黄灰 2.5Y7/6 地 層-中砂ブロック状となるブロック質粘土 シルトブロック状の 土塊質土
5. 灰白-灰 2.5Y7/1-8/4 細砂土 少量鉄分 炭分沈着 下部細砂とシルト互層部あり 第1b層
6. 黄灰 2.5Y7/1 細砂粘質シルト マンガン鉄質多い 第2-1a層 堆積
7. 灰 5Y5/1 粘質粘土質中-粗砂 第2-1a層 水田
8. 黄灰 2.5Y4/1 中砂粘質シルト 第2-1a層 水田
9. 土赤い黄 2.5Y6/3 細-中砂 少量鉄分あり 第2-2a層 礫土
10. 灰白-灰 2.5Y7/2-4/1 細-粗砂 粘質シルトブロック状 第2-2a層 礫土
11. 土赤い黄 2.5Y6/3 中砂-シルト 少量鉄分 下部シルト 局所的に炭分 第2-2b層
12. 灰 2.5Y4/1 シルト質細砂-粗砂 第2-3a層
13. 灰 10YR4/1 細砂シルト 第2-3a層
14. 暗黄灰 10YR5/6 シルト質細砂 5-10cm程度の2-4b層粗砂ブロック状含む 第2-4a層
15. 灰白 7.5Y7/1 粗砂土 5-10cm程度の2-4b層粗砂とシルト互層部あり 第2-4b層
16. 灰 5Y4/1 細砂シルト 灰色シルトと灰色に含む 第3-1a層
17. 灰 2Y4/1 細砂粘質シルト 粘質多い 第3-1a層
18. オリーブ黒 7.5Y3/1 シルト質細砂 第3-1a層より砂質多い 第3-2a層
19. 灰白-灰 7.5Y7/1-5/1 細砂土 第3-3b層シルトブロック含む
20. 灰白-灰 7.5Y7/1-5/1 細砂土 第3-3b層

21. 灰 7.5Y4/1 細砂シルト 粘性あり 炭分含む 第4a層
22. 暗黄灰 5P4/1 細砂シルト 非常に粘性あり 植物体腐敗含む 第5a層
23. 青灰 5B5/1 細砂シルト 粘性あり 細砂多量含む 炭質カルシウム 上部に多く含む 第6a層
24. 暗黄灰 5P4/1 細砂シルト 炭化物小含む 第6a-8a層に比べて砂質高い 下部との間に砂の剥離(第7b層)存在する部分あり 第7a層
25. 青灰 10YR5/1 粗砂粘質シルト 炭分多量含む 第8a層
26. 灰白-灰 7.5Y4/2 細砂粘質シルト 粘性高い 灰色質多い 第9-1a層
27. 灰白-灰 7.5Y4/2 細砂粘質シルト 粘性高い 灰色質多い 第9-2a層
28. 黄灰 5P5/1 細砂粘質シルト 非常に粘性が高い 粘る 第10-1a層
29. 暗黄灰 5P4/1 粘質シルト 非常に粘性が高い 粘る 礫質灰 5P5/1粘固シルトブロック含む 第10-2a層
30. 暗黄灰 5P4/1 粘質粘質シルト 粘性高い 第11a層
31. オリーブ黒 7.5Y3/1 粘質シルト 第11a層より上部より粘性少ない 第12a層
32. 暗黄灰 5P5/1 粘質シルト 炭分含む 第12a層
33. 暗黄灰 5P4/1 中砂粘質シルト 第12a層-第12b層ブロック含む 遺構埋土
34. オリーブ黒 5Y3/1+NS 粘質シルト 下部細砂-中砂を含む細砂状 砂質高い 生面質多い 第12b層
35. オリーブ黒 2.5Y3/1 粘質シルト 砂質高い 砂質塊状の砂質粘土質 第13a層
36. 暗黄灰 7.5Y4/1+NS 粘質シルト 暗黄灰の砂質粘土質 第13a層
37. 灰 7.5Y5/1 粗砂土 第13層
38. 灰白-灰 7.5Y4/2 細砂シルト 砂質高い 第14a層
39. 灰 7.5Y4/1 上部シルト-細砂土 下部中砂-細砂土 少量埋藏 植物体腐敗状を含む 炭灰含む 第14b層

図4 調査区東西断面図(1-1・2区)



- | | |
|---|---|
| <p>1. 灰白 7.5V8/I 細砂 ラマ不明層</p> <p>2. 灰 7.5V4/I 細-中砂 第2-2a層</p> <p>3. 黄褐色 SV87/I 細砂 第2-3a層ブロック含む 第2-2b層</p> <p>4. 褐色 7.5V84/I シルト凝結砂 灰質泥炭質を含む 第2-3a層</p> <p>5. 緑 7.5V86/G シルト凝結砂 灰色シルト-細砂ブロックを含む 第2-4a層</p> <p>6. 灰白 7.5V81/I 細砂主 2-3cm程度の塊を含む、わずかな塊、下部凝結シルト互層部分あり 第2-4b層</p> <p>7. 灰 5V4/I 細砂シルト 灰色を帯びた塊を含む 第3-1a層</p> <p>8. 灰 5V4/I 細砂粘質シルト 粘性あり 第3-1a層</p> <p>9. オリーブ黒 7.5V2/I シルト凝結砂 第3-1b層より砂質高い 第3-2a層</p> <p>10. オリーブ黒 5V3/I シルト凝結砂 第3-3a層</p> <p>11. 灰白-灰 7.5V71/I-5/I 細砂主 第3-3b層にシルトブロック含む</p> <p>12. 灰白-灰 7.5V71/I-5/I 細砂主 第3-3b層</p> <p>13. 灰 7.5V4/I 細砂シルト 粘性あり、炭化物を含む 第4a層</p> <p>14. 黄褐色 5V84/I 細砂粘質シルト 下部炭質あり、植物遺体を含む 第5a層</p> <p>15. 黄灰 SB3/I 細砂シルト 粘性あり 細砂多く含む、炭質カルシウム上面に多く含む 第6a層</p> <p>16. 黄褐色 5P84/I 細砂粘質シルト 炭化物を含む、第6a-第8a層に比して砂質高い 第7a層</p> <p>17. 黄灰 5P86/I 細砂主 粘性を帯びた砂質シルトブロックを含む、炭質カルシウム 第7b層</p> <p>18. 黄灰 SB5/I 細砂粘質シルト 植物遺体を含む 第8a層</p> <p>19. 黄褐色 2.5V4/2 細砂粘質シルト 変色強い 第9-1a層</p> <p>20. 黄灰 2.5V4/2 細砂粘質シルト 変色強い 第9-1a層より砂質高い 第9-2a層</p> <p>21. 黄灰 5P85/I 細-中砂粘質シルト 細中-細砂を含む 第10-1a層</p> <p>22. 黄褐色 5V84/I 細砂粘質シルト 細中-細砂を含む
[オリーブ黒 5V3/I] 細砂シルトのモザイクあり 第10-2a層</p> <p>23. 灰 7.5V4/I シルト凝結砂 凝結砂主</p> <p>24. 黄褐色 5P83/I 細砂粘質シルト 第11a層</p> <p>25. 黄黒 SB2/I 細砂粘質シルト 炭化物粘土に多く含む 凝結砂主</p> | <p>26. 黄褐色 5P84/I 細砂粘質シルト 凝結砂主</p> <p>27. 黄オリーブ灰 2.5V3/I 細-中砂粘質シルト 凝結砂主</p> <p>28. 灰 N4/ 細砂シルト 炭化物を含む 第12a層</p> <p>29. オリーブ黒 7.5V3/I シルト 第11a層より砂質高い(粘性少ない) 第12a層</p> <p>30. オリーブ灰/灰 5V3/I/N5/ 細砂シルト 砂質高い、下部凝結-中砂多く含む、細砂分 生痕あり、 第12b層</p> <p>31. オリーブ灰 2.5V3/I 細砂粘質シルト 砂質高い、中より粘性強い、 第13a層</p> <p>31. 灰 N5/ シルト凝結砂</p> <p>32. 緑灰 10G2/I 細-中砂 ラマ不明層</p> <p>33. 灰 N2/ 粘土</p> <p>34. 黄緑灰/灰 7.5V4/I-N5/ 細砂シルト 黄オリーブ 5V4/S凝結砂に混入 第13a層</p> <p>35. オリーブ黒 2.5V4/2 細砂 第14a層</p> <p>36. 灰 10V3/I 細砂シルト 植物遺体を多量に含む 第14b 凝結砂主</p> <p>37. 灰 5V4/I 中砂粘質 植物遺体を含む 第14b 凝結砂主</p> <p>38. 灰 7.5V4/I 1.5cm程度の塊主、下部凝結-凝結砂 ラマ不明層、植物遺体層に含む、炭水を含む 第14b層</p> <p>39. 灰オリーブ 5V3/2 微砂シルト 第15a層</p> <p>40. 灰 N4/ 細砂 第15a層</p> <p>41. 黄緑灰 SC4/I 細砂粘質 b層ブロックを含む、 第15b層</p> <p>42. 黄緑灰 SC4/I シルト 第15b層</p> <p>43. 灰 N4/ 粘土 炭化物を含む 第16層</p> <p>44. オリーブ灰 5V3/I/ 粘土 第17層</p> <p>45. 灰 N4/ 粘土 炭化物が凝結砂主シルトブロックを含む 第18層</p> <p>46. 緑灰 10G2/I 粘土 若干の炭化物を含む 第19層</p> <p>47. 黄褐色 SB64/I 粘土 炭化物を含む 第20層</p> <p>48. 黄灰 10G5/I/ 粘土 第21層</p> <p>49. 灰 N5/ 粘土 若干の炭化物を含む 第22層</p> <p>50. 灰 N4/ 粘土 若干の炭化物を含む 第23層</p> |
|---|---|

図5 調査区南北断面図 (2-1-2区)

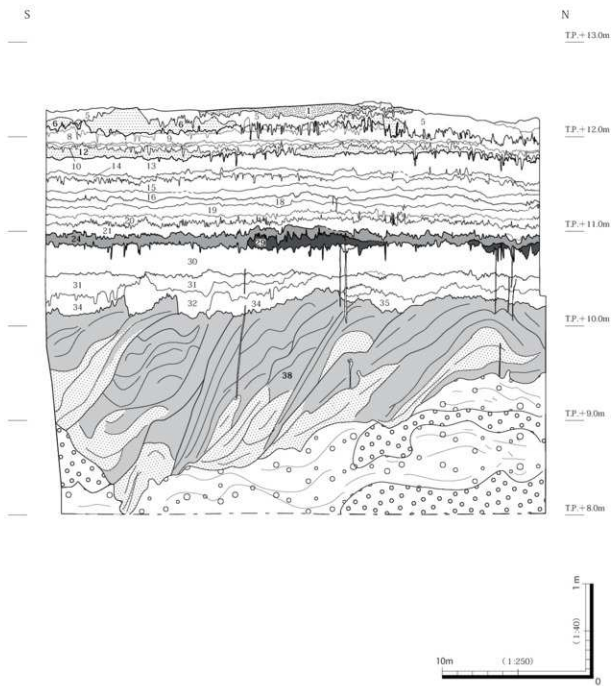


図6 調査区南北断面図 (1-2区)

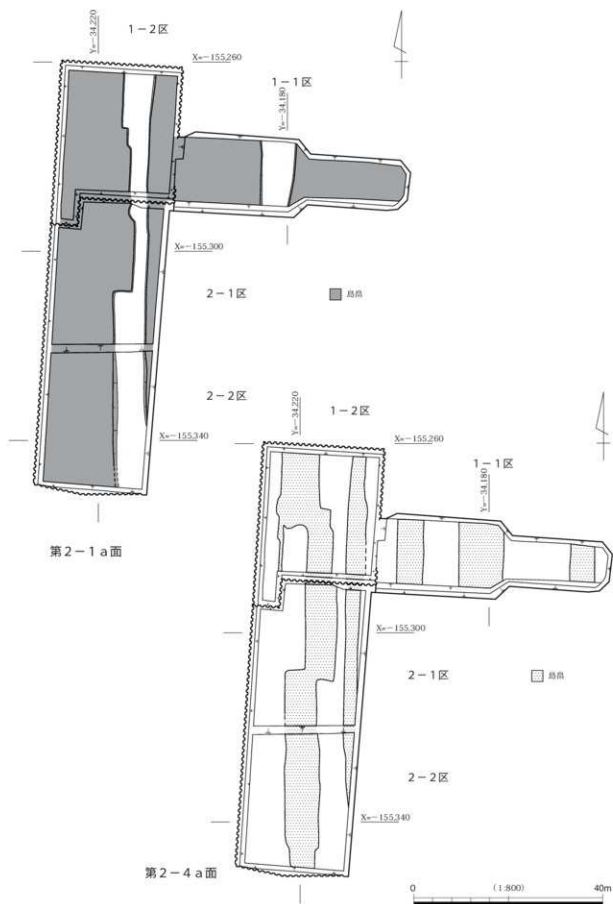


图7 第2-1a面·第2-4a面 復元图

第2節 検出遺構

本節では今回の調査で確認した各遺構面の様子を中心に、出土遺物の概略について記述する。なお、遺構面の呼称は第X層上面を第X面とした。また、b層が遺存しない場合、上層（第Y層）中から掘り込まれた遺構も第X面で検出されることになる。上層に関連すると判断できる遺構に関しては第Y層下面遺構という表現をしている。

第1項 古代末～中世の調査（第3-1a面～第9-1a面）

調査地周辺は条里型地割が現地表に遺存している地域である。2層の状況からは現地表と同様、南北方向に長い地割りであることが分かった。第3層から第9層は古代末～中世の耕作土である。中世期にかけて、同様に南北に長い地割りを復元することができた。また、調査区は最大幅で南北に約90m、東西に約75mを測るが、坪境にあたる畦畔や溝などは確認できなかった。

なお、出土した遺物は耕作土中であることから、細片のものが多く、出土数も少ない。また、各層は0.1m前後と薄い耕作土の連続であることから、下層の巻上げは当然ながら、上層からの踏み込みなどもあって掘り分けることは困難であり、上層の遺物が混入している可能性は否定できない。そこで、巻末に各層毎に出土破片数を示した表を添付した。遺物実測図とともに参照されたい。

・第3-1a面（図8、写真図版3・4-1～3）

第2-4b層を除去して検出した遺構面である。b層で覆われた遺構面であるため、良好に畝の畝及び畦畔を検出した。ただし、特に2区では、上面が水田であったために第2-4b層が攪拌されており、遺構の遺存状況が悪い。また、1-1区中央付近は、第2-4b層が粗粒砂であったため、第3-1a層が削られており、畦畔・畝の遺存状況は悪かった。

遺構面の標高は1区で概ねT.P. + 12.08m 前後、2区で概ねT.P. + 12.08m 前後と、ほぼ水平である。検出した耕作面は、南北方向の畦畔と畝、東西方向の畦畔からなる。

南北方向の畦畔は4条検出したが、先述のとおり、1-1区中央付近は遺存状況が悪く、畦畔と畝はほとんど高さの差がないことから、畦畔を断定することができなかった。南北方向の畦畔は調査区内を直線的にのびており、畝の畝もこれに平行していることから、南北に長い地割りであったことが分かる。

1-2（2-1）畦畔と1-3（2-2）畦畔間、1-7畦畔と1-8畦畔間の距離は約10mを測り、それぞれの畦畔で囲まれた区画では8条の畝を設けている。畝の高さは7cm前後と低い。1-3畦畔の東側の畝は、他のものに比して幅が広く、1.3mを測るが、他は概ね0.5m前後である。一方、東西方向の畦畔は6条検出した。南北に長い畝を東西の畦畔で区切っており、その幅は1-4畦畔と1-5畦畔間が約16m、2-3畦畔と2-5畦畔間が約30m、1-6畦畔と2-4畦畔間が約20mと一定していない。東西の畦畔と畝の間は1-6畦畔のように畝溝がめぐるものもあるが、2-3、2-5畦畔では南北どちらか一方で畦畔と畝が連続するなど、細部に違いがみられた。

なお、畝で栽培された作物を探るため、土壌洗浄を行い大型植物遺体の同定を行った。土壌採集位置は図8に示したとおりである。詳細は第4章第1節を参照されたい。栽培作物としてはイネ・オオムギ、コムギなどの穀類、ソバ、ダイコン属が確認できた。

・第3-3a面・第3-3b面（図9、図版4-4・5）

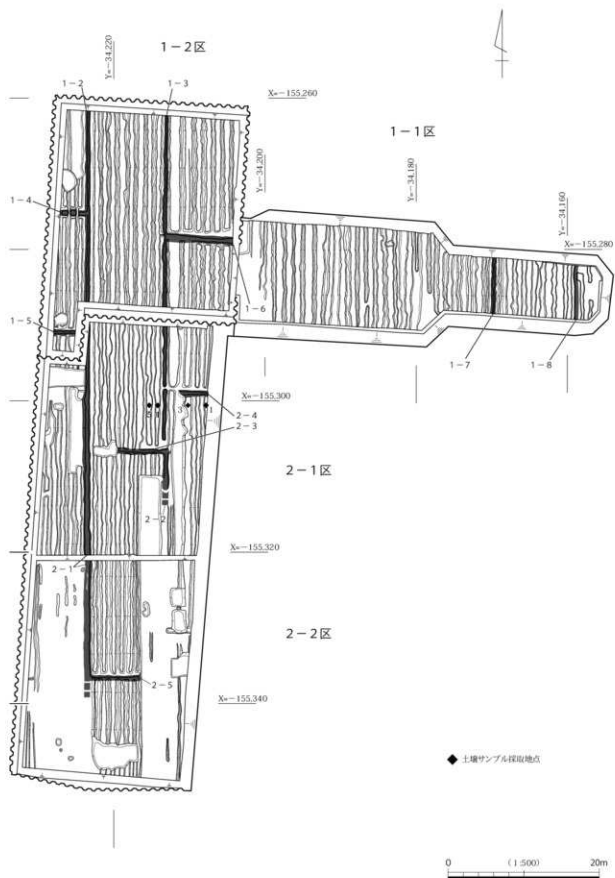
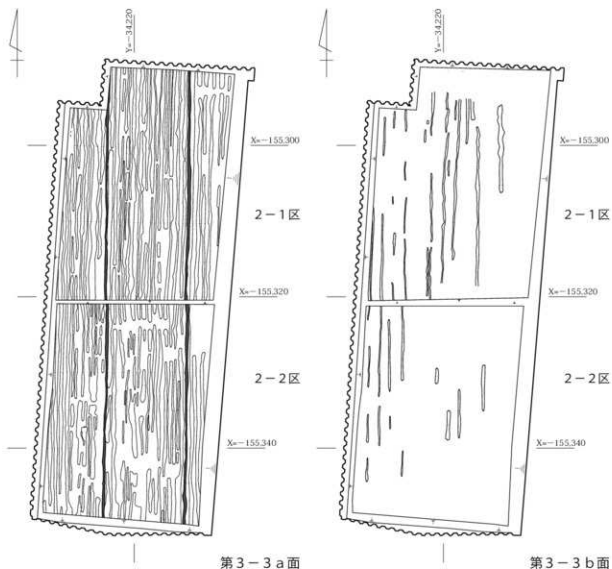


図8 第3-1 a面 遺構平面図

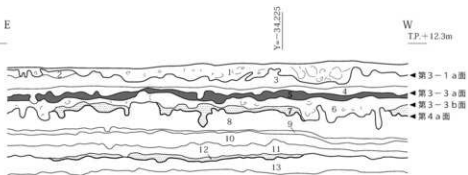


第3-3 a面

第3-3 b面



E



W

TP+12.3m

- | | |
|---|---|
| <p>1. 砂 7.5YR6/6 細砂に灰色シルトブロック含む 第2-4 a層</p> <p>2. 灰 5Y4/1 細砂混シルト 灰色シルトスジ状に含む 第3-1 a層</p> <p>3. 灰 5Y4/1 細砂混粘質シルト 粘性あり 第3-1 a層</p> <p>4. オリーブ黒 7.5Y3/1 シルト混細砂 第3-1 a層より砂質高い 3-2 a層</p> <p>5. オリーブ黒 5Y3/2 シルト混細砂 第3-3 a層</p> <p>6. 灰白~灰 7.5Y7/1~5/1 細砂主 第3-3 b層にシルトブロック含む</p> <p>7. 灰白~灰 7.5Y7/1~5/1 細砂主 第3-3 b層</p> <p>8. 灰 7.5Y4/1 細砂混シルト 粘性あり、炭化物含む 第4 a層</p> | <p>9. 暗青灰 5PB4/1 細砂混シルト 下面乱れる、植物遺体含む 第5 a層</p> <p>10. 青灰 5B5/1 細砂混シルト 粘性あり 細砂多く含む、炭酸カルシウム上部に多く含む 第6 a層</p> <p>11. 暗青灰 5PB4/1 細砂混シルト 炭化物小含む、第6-8層に比して砂質高い 第7 a層</p> <p>12. 青灰 5PB6/1 細砂主 b層だが部分的にシルトブロック含む炭質炭灰 第7 b層</p> <p>13. 青灰 5B5/1 細砂混粘質シルト 植物遺体点在 第8 a層</p> |
|---|---|



図9 第3-3 a面・第3-3 b面 遺構平面図、2-2区南壁断面図

基本層序で述べたように、第3層は3層の土壌化層に細分できたが、第3-2 a面では遺構検出を行っていない。2区では第3-3 a層の遺存状況が比較的良好であったことから、新たに第3-3 a面として遺構検出を行った。図9・図版6-5で2-2区南壁、第4 a面2-8畦畔付近の状況を示したが、オリブ黒色の第3-3 a層が比較的良好に残っており、2-8畦畔と同様の部分で盛り上がっていることが分かる。平面で検出した際には、下層の第3-3 b層が帯状に露出しており、これを畦畔と判断した。遺構面では南北方向の2条の畦畔、及びこれに平行する多数の溝を検出した。溝の埋土は第3-2 a層に類似しており、ここで検出した畦畔、溝は第3-2 a層の下面遺構と判断できる。またこれらの溝はすき溝と考えられる。

第3-3 b面でも南北方向の溝を検出した。この溝は第3-3 a面で検出した溝群とは異なり、1.5m前後の一定の間隔を持って直線的に並んでいる。1区でも同様の溝を第4 a面の攪乱として確認している(図10)。これらの溝は畝の畝間溝の可能性が高い。溝の埋土は図9の土層6で、第3-3 b層と第4 a層に類似したシルトブロックが混じった土層である。このようなことから第3-3 a層下面遺構というよりはむしろ、土層6を作土層と捉える方が妥当であろう。

第3層からは遺物の出土は非常に少なかったが、第2-4 b層あるいは第3層から出土した遺物には、瓦器片や須恵器片・土師器片などとともに瓦質土器が含まれており、第3-1 a面～第3-3 a面は16世紀を中心とする時期を与えられる。

・第4 a面(図10、図版5・6)

第3-3 b層を掘削して検出した遺構面である。b層で覆われた遺構面であることから、水田及び畝を良好に検出した。ただし、1-1区東半は第3-3 b層がほとんどなく、その結果、遺構の遺存状況が悪い。また、先に第3-3 b面で示した溝が特に畝部分では第4 a面に及んでいた。図11に1-2区北壁、1-10畦畔付近を示したが、先述した第3-3 b面の溝埋土は土層5となる。第3-3 b層(土層6)を埋土とする第4 a面の畝溝と同じように窪んでいる。土層5は一見すると第3-3 b層に類似していることもあり、いずれの溝か判断が難しい部分もあった。

遺構面の標高は1-1区東端付近でT.P.+11.90m、1-2区西端付近でT.P.+11.80mを測る。また2-1区中央付近がT.P.+11.80mを測るのに対し、2-2区南端はT.P.+11.70mと低い。つまり東から西へ向かって緩やかに、さらに南に向かって緩やかに下がる。

南北方向の畦畔7条(うち、1-18畦畔としたのは耕地段差)、東西方向の畦畔4条を検出した。南北畦畔は調査区を通して直線的にのびているのに対し、東西畦畔は南北畦畔と交わる部分で若干のずれがあることから、第3層の各耕作面と同様、南北畦畔を幹線とした区画を復元することができる。南北方向の畦畔の間隔は、1-9(2-8)畦畔と1-10(2-9)畦畔間が11m、1-10畦畔と1-14畦畔間が9.3m、1-14畦畔と1-15畦畔間が12m、1-15畦畔と16畦畔間が10.5m、1-16畦畔と1-17畦畔間が11m、1-17畦畔と1-18畦畔間10.7mとばらつきはあるものの、概ね11m前後を指向する。南北で区画された範囲は西から水田2区画、畝2区画、水田4区画となっている。ただし、1-1区1-17畦畔・1-18畦畔間は帯状に砂層が点在しており、畝の可能性が残る。いずれにしても、第4 a面は第3-3 b層によって埋没しており、埋没直前の景観として水田と畝が並存していることは興味深い。

西側2区画の水田は東西の畦畔で更に区画されている。2-10畦畔で2-13水口を検出した。水口は幅55cmを測り、2-8畦畔との交点付近に設けられている。また、水口の北・南側は皿状に窪んでいた。

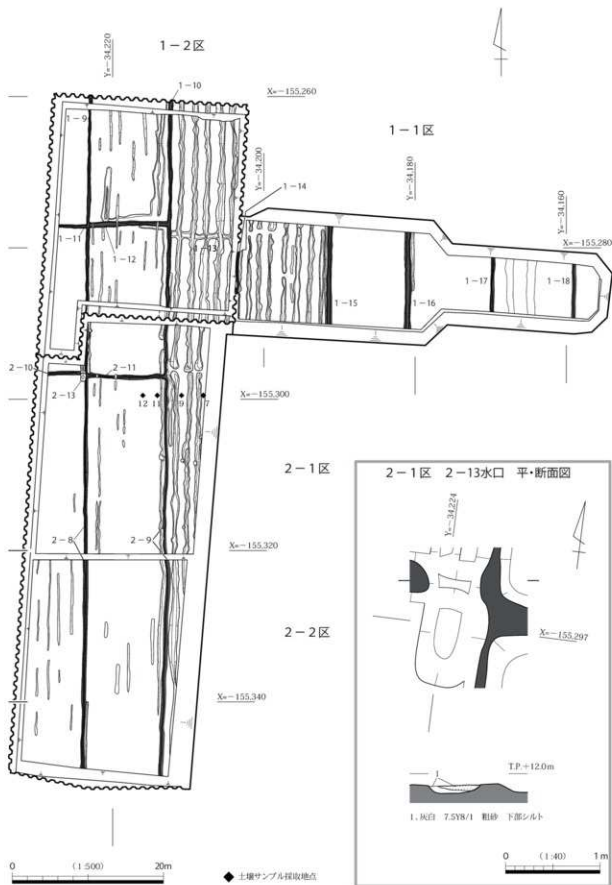


図10 第4 a面 遺構平面図、2-13水口 平・断面図

2-10畦畔で区画された南側、北側の水田面の高さは畦畔付近ではほとんど変わりなく、若干、北側の水田面が低い。しかし、全体として南側の水田面のほうが低く、北から南への導水が考えられる。

中央の2区画は畝として利用されているが、水田部分の東西畦畔の延長上で畝溝が途切れる部分や逆に畝が溝状に途切れる部分（1-13溝）がみられた。東西畦畔同様、南北に長い区画内を区切るものであろう。畝は6条ないしは7条設けられており、第3-1a面のそれより少ない。畝間溝の幅は約0.5mとほとんど変わっておらず、畝の幅が0.8～1.0m前後とやや広いことに起因する。畝の高さは5cm以下と低い。

第3-1a層と同様、土壌洗浄を行い大型植物遺体の同定を行った。土壌採集位置は図10に示したとおりである。詳細は第4章第1節によるが、栽培作物としてイネ、オオムギ、コムギの穀類、ナス、マメ科（アズキ類）が確認された。

第4a面の時期は、第4a層の出土遺物より14世紀～15世紀を中心とする時期が与えられる。

第3-1a面及び、第4a面はb層に覆われていたために遺存状況がよく、上面遺構として捉えることができた。しかし、第5a層～第7a層はb層を介さず、類似したa層の連続であった。検出した遺構はいずれも畦畔状の凸遺構、または耕地段差であり、これらの遺構は基本的に上層に帰属する下面遺構と捉えることができる。

・第5a面（図12）

第4a層を除去して検出した遺構面である。ただし1-1区東半では、第4a層と第5a層との峻別が十分でできなかった。遺構面の標高は、1-1区西半でT.P.+11.75m、1-2区西半でT.P.+11.63m前後、東から西へ向かって緩やかに傾斜する点は第4a面と同様である。2-2区南端付近でT.P.+11.60m前後、2-1区中央でT.P.+11.70m前後と、緩やかに高まる。

検出した遺構は、南北方向の畦畔状の高まりである。第5a層が帯状にわずかではあるが高くなっており、その位置は2-2区では若干ずれがみられるものの、概ね第4a面を踏襲している。このことから第4a面の擬似畦畔と考えられる。それ以外に、直線的に土色の違いがみとめられた。これは概ね、第4a面の東西畦畔、あるいは、畝が東西方向に区画された部分に一致しており、同様に第4a面の擬似遺構と考えられる。ここで注目できるのは、2-2区北側で検出した幅0.6mほどの東西方向に直線的にのびる変色範囲である。第4a面ではこの部分では畦畔を検出していない。このことから、これは第5a面に関連した畦畔痕跡の可能性が考えられる。

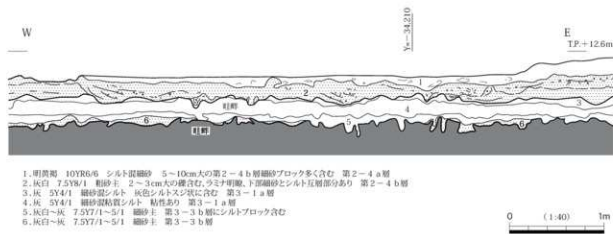


図11 1-2区北壁断面図

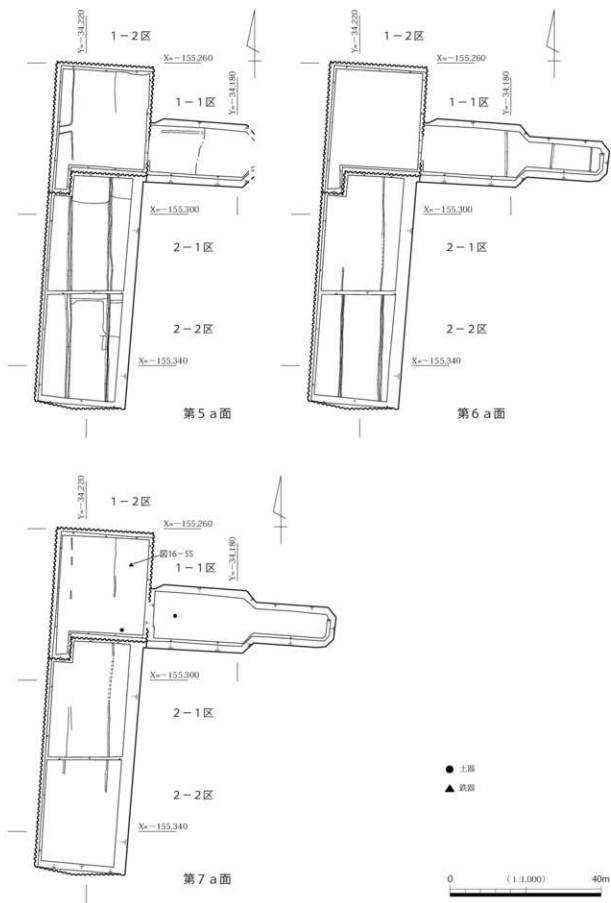


图12 第5 a面·第6 a面·第7 a面 遺構平面图

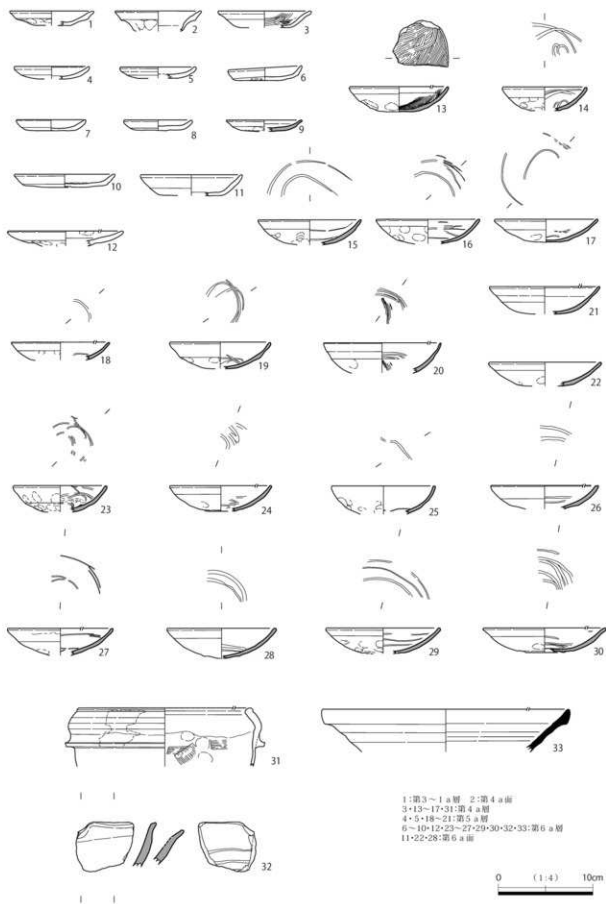


図13 第3-1 a層～第6 a層関連 出土遺物

第5 a 面で検出した遺構は上層の擬似畦畔であることから、第4 a 面と同様の時期が与えられる。

・第6 a 面 (図12)

第5 a 層を除去して検出した遺構面である。遺構面の標高は、1-1区T.P.+11.7m余、1-2区西端でT.P.+11.5m前後、また2-1区中央部でT.P.+11.6mと高く、2-2区南端付近でT.P.+11.5m余と低くなる。

検出した遺構は、2区の南北方向の畦畔状の高まり2条、1-1区の区画に伴う耕地段差である。この2条の畦畔はわずかに数cmの高まりとして検出したもので、両者の間隔は約10mを測り、第5 a 層の擬似畦畔と考えられる。第4 a 面の畦畔と比して、若干位置にずれが認められる。正方位に対して東にふれが大きくなっている。

第6 a 面で検出した遺構は上層の擬似畦畔であることから、第5 a 層の出土遺物より、14世紀を中心とした時期を与えることができる。

・第3-1 a 層～第6 a 層関連 出土遺物 (図13、図版12)

図13は第3-1 a 層～第6 a 層関連出土遺物である。第3層からは土器の出土が極めて少なく、図示したのは第3-1 a 層から出土した1の土師器皿のみである。底部は小さく、口縁部が大きく開き、口縁部は強いヨコナデを施す。体部下半は指オサエ痕が明瞭に残る。

2は第4 a 面検出時に、3・13～17・31は第4 a 層から出土した。2・3は土師器皿である。2は口縁部が大きく開くもので、口縁部は強いヨコナデ、体部には指オサエ痕が明瞭である。3は内面にハケメを施す。13～17は瓦器椀である。13・14は口径が小さく、10cm前後を測る。13は内面にハケメを施す。14は内面に連結輪状の暗紋を施す。15～17は口径が11cm前後と前者より大きい、器高は2.5cm前後と低い。内面には渦巻き状の暗紋を施す。体部外面は指オサエ痕が明瞭、口縁部外面はヨコナデを施す。13・17は平らな底部で、他も高台は有さない。31は土師器羽釜である。大和型。

4・5・18～21は第5 a 層から出土した。

4・5は土師器皿である。口縁部はヨコナデを施す。18～21は瓦器椀である。18・20は内面には渦巻き状の暗紋を施す。19は連結輪状の暗紋を施す。19、21は高台を有さない。体部外面は指オサエ痕が明瞭、口縁部外面はヨコナデを施す。

11・22・28は第6 a 面検出時に、6～10・12・23～27・29・30・32・33は第6 a 層から出土した。

6～8・10～12は土師器皿である。6～8・10は底部から口縁部が短く直線的に立ち上がるもので、6～8は口径が7.5cm前後と小さく、10は10.6cmとやや大きい。11は10に比して器高が高い。9は瓦器皿である。口縁部は強いヨコナデ、体部外面は指オサエ痕が顕著に残る。22～30は瓦器椀である。内面には渦巻き状に暗紋を施し、体部外面は指オサエ痕が明瞭、口縁部外面はヨコナデを施す。26は口縁端部に段を有する。大和型。底部が分かるものでは、24・29・30は高台を有するもので、24・29は高台が剥離した痕跡のみが残る。30は断面半円形を呈した高台を張り付ける。22は底部が平らで、高台を有さない。32は瓦質土器片口、内面に暗紋状のヘラミガキを施す。33は須恵器鉢である。

第4 a 層～第6 a 層から出土した瓦器椀はいずれも、器高が低平化、法量の縮小化が進んだ段階のものである。第4 a 層は13・14など瓦器椀の縮小化が最も進んだ段階のものと考えられ、土師器皿からも14世紀～15世紀の時期を与えたい。第3 a 層は遺物の出土が少ないが、第4 a 層の年代より16世紀を中心とするものと考えられる。また図化していないが、第3 a 層・第4 a 層は瓦質土器を含むことから、中世後期と考えられる。第6 a 層出土のものは高台を有する個体があるが、他は高台が消失、

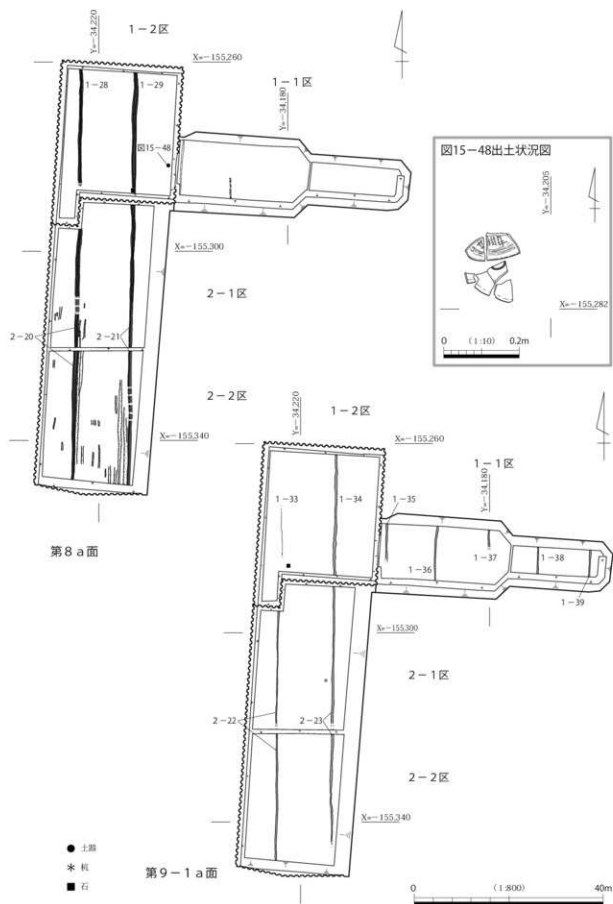


图14 第8 a面・第9-1 a面 遺構平面図、遺物出土状況図

平らな底部となる。色調は暗灰色を呈するものはほとんどなく、褐灰色や、灰白色を呈するものが目立つ。第5 a層は14世紀、第6 a層は13世紀後半～14世紀の時期を与えたい。なお、三足釜の脚部、32の片口など第6 a層にも瓦質土器が含まれる。

・第7 a面 (図12)

第6 a層を掘削して検出した遺構面である。遺構面の標高は1-1区中央部がT.P. + 11.6m余とも高く、最低点T.P. + 11.4mを測る1-2区北西端に向かって緩やかに下がる。これに対し2区はT.P. + 11.4m余の2-2区南端以外はT.P. + 11.5m弱と1-2区中央付近の高さと大差ない。

検出した遺構は、耕地段差、及び1-2区の下層が露出した帯である。この帯は、西端では第7 b層が点在する範囲として、東側は第8 a層が露出する範囲として確認できたもので、第7 a面の畦畔基部として捉えることができる。よって、第7 a面の畦畔であると判断した。耕地段差として捉えたものは第6 a層の下面遺構の可能性が高い。

第7 a面で検出した遺構は、第6 a層の下面遺構も含まれるが、1-2区で検出した遺構は第7 a面上面遺構と考え、第7 a層の出土遺物より、13世紀を中心とする時期を与えられる。

・第8 a面 (図14、図版7-1・2)

第7 a層と第8 a層の間には薄層ながらb層がみられた。このb層は調査区の南側、2-2区では比較的安定してみられたものの、1区では薄層というよりも、点在といった状況であった。

第8 a面の標高は、1-1区がT.P. + 11.5m余とやや高めだが、その他は1-2区北西部を除き概ねT.P. + 11.4m前後と平坦である。逆に1-2区北西部はT.P. + 11.3m余とやや低めである。

検出した遺構は南北方向の畦畔2条と1-1区と1-2区の境目付近の耕地段差である。1-28(2-20)畦畔と1-29(2-21)畦畔の間は約11.5mを測る。畦畔、耕地段差ともに高低差はわずかである。2条の畦畔は2区では第7 b層のすりつく部分に留意し検出した。ただし、最も第7 b層の遺存状況がよい2-2区でも、全体的に砂層が広がるわけではなく、帯状に広がるといった状況であった。2-21畦畔は耕地段差として検出した部分もある。1-2区では第7 a面で第7 b層、第8 a層が露出する畦畔基部を検出しており、これを残して、第6 a層を掘削した。第7 b層は点在するものの、層としては認識できない。1-1区を含めて、第7 b層の入った足跡を多く検出している。1-2区の状況では第7 a面の疑似畦畔と考えられるものの、2区の状況からは第8 a面の畦畔と捉えることができ、第8 a面においても、ほとんど畦畔の位置が変わらなかったものと考えたい。

また、第7 b層の遺存状況がもっともよかった2-2区では、畦畔の周囲以外でも南北方向に帯状に砂層を確認することができた。これらは幅0.2～0.5m程度、深さ2cm程度の浅い溝状を呈しており、畝の畝間溝の可能性が考えられる。1-2区で瓦器碗を検出した(図14、図15-48)。

第8 a面は、第8 a層の出土遺物より、12世紀後半～13世紀の時期を与えられる。

・第7 a層・第8 a層関連 出土遺物 (図15、図版12・13)

図15は第7 a層・第8 a層関連出土遺物である。

34・35は第7 a面検出時に、36～38、42～47は第7 a層から出土した。

34～38・42は土師器皿である。34～37は口径7～8cm前後の小皿で、口縁部はヨコナデ、端部を更にヨコナデする。38は口縁部が外反する。42は大型の皿で、口縁部はナデ、体部外面は指オサエ痕が明瞭に残る。43・44は瓦器皿、45～47は瓦器碗である。43は体部内面を圓線状にヘラミガキ、見込みに格子状の暗紋を施す。外面は口縁部をヨコナデ、体部は指オサエ痕が残る。44は内面に圓線

状にヘラミガキを粗に施す。45・47は内面にはやや密にヘラミガキを施す。見込みには格子、あるいは平行線状の暗紋を施すが、欠損しており詳細は不明である。調整は口縁部外面がヨコナデ、体部外面は指オサエ痕が明瞭で、わずかにヘラミガキがみられる。46は、口縁部外面に2段のヨコナデを施すため、段が生じる。

39～41は第8 a層から、48は第8 a面直上で出土した。

39～41は土師器皿である。39は口縁部ヨコナデ、端部を更にヨコナデする。40は切り込み円板技法の痕跡が残る。41は口径10.0cmと大きい。48は図14に示したように、1-2区第8 a面から出土した。内面は圏線状に密にヘラミガキ、見込みには格子状の暗紋を施す。外面は指オサエ痕が明瞭で、ミガキを疎に施す。断面三角形の高台を有する。12世紀末～13世紀初頭に位置づけられるものである。

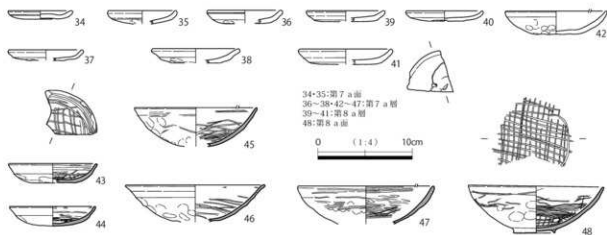


図15 第7 a層・第8 a層関連 出土遺物

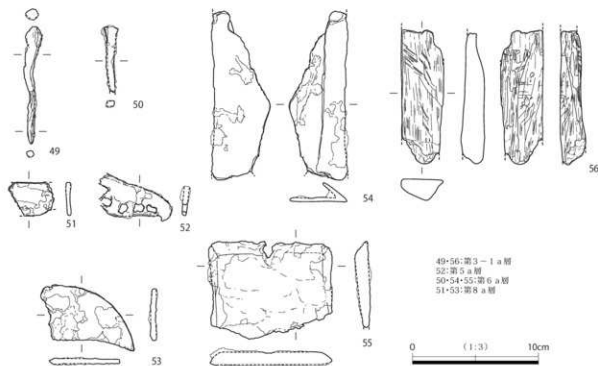


図16 第3-1 a層～第8 a層関連 出土鉄製品・石製品

第7 a層、第8 a層から出土した土師器は金雲母を多混する灰黄色の色調を呈するものが目立つ。瓦器碗は第6 a層出土のものに比して器高が高く、外面にも疎ではあるが、ミガキが残る。高台は断面三角形を呈している。12世紀後半～13世紀頃の時期が与えられる。第7 a層からは図化した以外にも13世紀の瓦器碗が主体となっており、第8 a層は12世紀後半～13世紀の時期が与えられる。

・第3-1 a層～第8 a層関連 出土鉄製品・石製品 (図16、図版16)

49～55は鉄製品である。49・50は釘である。断面四角形を呈する。54は鎌先である。刃先は欠損しており、ソケット部のみ遺存する。51は鎌か。52・53・55は不明鉄製品である。52は先端が鎌状になっている。3箇所に並んで平面方形の孔を配置する。やや間隔をあけ、屈曲する部分にも同様の孔が配置される。53は0.4cmと均一な厚みをもつことから、刃部ではないと考えられる。55は平面形が方形を呈すると考えられ、3辺が遺存する。断面形は平らなかまぼこ状を呈する。厚みは図の上から下に向かって減じている。図12に出土地点を示した。いずれも耕作地からの出土であり、農耕具の一部であろう。

56は石製品で砥石である。上下端が欠損しているが、残存長10.4cm、最大幅3.3cmを測る。断面は隅に丸みのある三角形を呈する。3面ともに擦痕が残り、砥面として使用されていたことが分かる。

・第9-1 a面 (図14、図版7-3・4)

第8 a層を掘削して検出した遺構面である。遺構面の標高は、1-1区がT.P.+11.4～11.5mと高く、1-2区中央～2-2区中央にかけてT.P.+11.3m余と高めだが、1-2区西端～2-2区西端にかけてはT.P.+11.3m未満に、さらに2-2区南端付近ではT.P.+11.2m未満と低くなる。

検出した遺構はないが、南北方向の土色の異なる幅0.5m前後の帯を7条確認した。断ち割りを行ったが、この帯の土質自体は第9-1 a層と同じであり、土色が異なっているものと判断した。第9 a層は変色が著しく、この帯状の部分は変色があまり進まないといった風で、掘削から時間経過に従ってより鮮明となるものであった。帯間の距離は1-33(2-22)と1-34(2-23)間の距離は約11.5m、1-34と1-35間は約11m、1-35と1-36間は約10.5m、1-36と1-37間は約11m、1-37と1-38間は約10m、1-38と1-39間は約11mと10～11m前後を測る。この痕跡は畦畔の痕跡と考えられるが、直上層を含めた上層の畦畔の転写である可能性が考えられ、帰属面の断定は困難である。少なくとも、第4 a面で検出した1-9(2-8)畦畔は第8 a面の2-22畦畔と南端で2m、北端で1m東にずれており、第4 a面の畦畔痕跡ではない。1-2区及び2区の畦畔(疑似畦畔)は第6 a面～第8 a面で若干のずれはあるものの、ほぼ同じ位置で検出しており、第9-1 a面痕跡もほぼこれに合致する。このことから、第9-1 a面も含めて、長期間にわたって同じような位置に畦畔が作られた結果、とするのが妥当ではないだろうか。

・第9 a層関連 出土遺物 (図17、図版13)

図17は第9 a層関連遺物である。第9層は第9-1 a層、第9-2 a層に分けられるが、1区では土層の掘り分けを行っておらず、第9 a層として一括して掘削している。

57～66は土師器皿である。57～62はいずれも口縁部がての字状を呈する土師器皿である。口径は9～10cm前後を測る。61・62は57～60に比して口縁部が横にはりだし、器壁が薄い。63～65は口径14～16cmと大型の皿で、口縁部はヨコナデ、65は強いヨコナデが二段施され、口縁部が大きく外反する。67～69は土師器碗。口縁部はヨコナデ、体部下半は指オサエ痕が明瞭に残る。69は胎土が特徴的で、粗粒の長石、石英を含み、焼成は堅緻である。

70・71は瓦器皿である。内外面を隙間なく密にミガキを施す。70は外面には分割ヘラミガキが施

される。底部外面は未調整。71は底部外面にもヘラミガキを施す。見込みは格子状に密に暗紋を施す。72～75は瓦器碗である。体部内面は密にヘラミガキを施す。外面は、72・73はやや疎に、74は密にヘラミガキがみられる。73は見込みに沈線状の平行線がみられる。

76・77は黒色土器碗A類である。76は口縁部内面に沈線状の平行線がめぐる。

以上の遺物より第9 a層は黒色土器A類を下層からの巻き上げと考え、11世紀～12世紀前半の時期が与えられる。第9 a層は図化した以外にも12世紀の瓦器碗が出土するものの、図60のグラフをみると瓦器碗の出土が減少していることが分かる。

小結

調査区では、中世期を通じて耕作地として利用されていることが分かった。耕作地は南北方向の条里畦畔によって、幅10mを前後する間隔で区画されており、この間、坪内を東西に10等分する「長地型」が踏襲されていたことが分かる。なお、各面の遺構平面図に■で自然礫の出土地を示した。自然礫は拳大のものであるが、周辺の土層に自然に含まれるものではないことから、人為的に持ち込まれたものと考えられる。恩智川下流域、八尾市、東大阪市にまたがる池島・福万寺遺跡は条里遺跡として著名であるが、条里水田面から出土する自然礫についての検討がなされている。自然礫は坪境周辺に集中する傾向があり（文献27）、畦畔の盛土中、あるいは下面から出土するものがあることから、改修時の区画の目安との指摘もなされている（文献5）。第8 a面、第9 a面では畦畔に近接して自然礫が出土しているが、下層の第11 a面では拳大より小さい自然礫も出土しており、傾向がつかめない状況であった。今後の資料の蓄積が重要と考えられる。

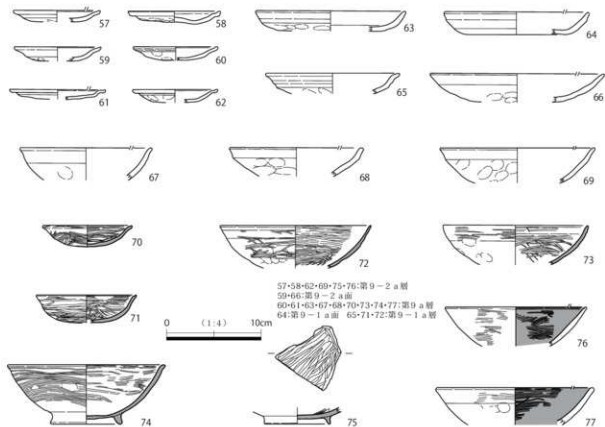


図17 第9 a層関連 出土遺物

第2項 古代～縄文時代晩期の調査（第10-1 a面～第12 b面）

第10-1 a面、第11 a面、第12 a面、第12 b面の調査を行った。

第11 a層、第12 a層は上層までと異なり、暗色の強い土壌化層である。第12 a層の上面、及び下面では、これより上面で普遍的にみられた正方位を指向する畦畔はなく、溝、不定形な土坑やピットなどを検出した。第11 a層を境に、大きく景観が変わったことが分かる。

・第10-1 a面（図18、図版7-5～8）

第9-2 a層を掘削して検出した遺構面である。なお、第9-2 a層と第10-1 a層の間にはわずかに砂の点在が認められた。この砂は第9-2 b層であるが、層序としての認識はできず、わずかに点状にする、といった状況であった。

遺構面の標高は1-1区がT.P.+11.2～11.3mと高く、その他は概ねT.P.+11.0～11.1m前後を測る。

検出した遺構は、東西・南北方向の畦畔、及びそれに沿う溝状の窪みである。

まず、1区では第9 a層の細分を行わず、第9 a層として一括して掘削を行った。畦畔は第9 a層が若干残った状態で第10-1 a層が帯状に露出することで確認したもので、幅は下端で約1.0mと太い。1-1区では第10-1 a層の上部に砂層が点在する部分もあった。1-2区ではこの高まりに沿って幅1.5m程度の溝状の窪みを検出した。深さは水田面から2cm前後と浅く、埋土は第9 a層に類似する。1-40・1-41畦畔間には東西方向に同様の溝状の窪みを検出しており、本来は東西方向の畦畔に伴うものであった可能性が考えられる。畦畔の検出状況からは第9 a層の擬似畦畔と考えられたが、第9-1 a面で検出した畦畔痕跡と大きくずれが認められた。特に1-40（2-24）畦畔は、第9-1 a面の1-33（2-22）畦畔痕跡より、2.5m程度東にふっている。そこで、2区では第9-1 a層、第9-2 a層に分けて掘削を行った。第9-2 a層の上面では、わずかに砂が点在する部分が認められ、結果、第10-1 a面の畦畔に一致する。この砂層が第10-1 a層の高まりにすりつくかいないか、遺存状況は極めて悪く判断できなかった。検出状況としては第9-2 a層の畦畔下部に薄く第9-2 b層が残った、つまり第9-2 a層の擬似畦畔と考えるのが妥当であろう。しかし、水田面に足跡が点在している状況からは、第10-1 a面も水田であった可能性は高いと考えられる。

南北畦畔間の距離は1-40（2-24）畦畔と1-41（2-25）畦畔間は約9m、1-41畦畔と1-48畦畔間は約14m、1-48畦畔と1-49畦畔間は約7m、1-49畦畔と1-50畦畔間は約12m、1-50畦畔と1-51畦畔間は17mを測る。畦畔間の距離は7m～17mとばらつきが認められた。

1-2区、西側では鉄製鎌が出土した（図36-141）。

検出した遺構は上層の擬似畦畔と考第9 a層の出土遺物より11世紀～12世紀前半の時期が与えられる。

・第11 a面（図18）

第10 a層を掘削して検出した遺構面である。遺構面の標高は、T.P.+11.1m余の1-1区東側から、T.P.+10.9m余の西側に向けて緩やかに下がる。また2-1区中央部へ向けてわずかに上りT.P.+11.1m前後となり、T.P.+10.8m余の2-2区南西端に向けて緩やかに下る。

検出した遺構は、東西・南北方向の畦畔状の高まり及び南北方向の溝、2-1区で検出した北西-南東方向の溝である。1-2区で検出した南北の高まり付近は地震によって上下層の乱れが著しかった。検出状況が不良であることから、断定はできないが、1-2区で検出した高まりは第10-1 a面の擬

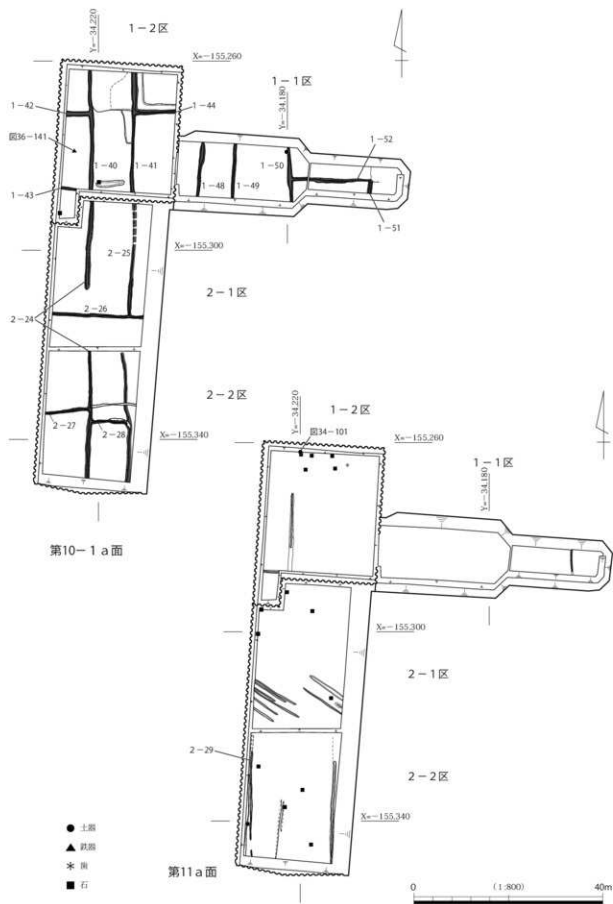


図18 第10-1 a面・第11 a面 遺構平面図

似畦畔の可能性を指摘しておきたい。また、2-2区の西端で南北方向にのびる**2-29溝**を検出した。溝は幅0.3m前後、深さは5cmに満たない。溝の埋土は灰色シルト混じり中～細砂である。なお、2-1区ではちょうど側溝にあたり、検出できなかった。この溝は今回検出した遺構のうち正方位を指向するものとして、最も古い遺構と考えられる。

なお、2-1区南半では北西-南東方向の平行する溝を9条検出している。この溝は第12 a面の2-2区北側で検出した溝と規模、方向とも類似している。隣接地での調査で再度検討を要するところではあるが、第12 a面に伴うものと考えておきたい。

第11 a層からは比較的多くの遺物が出土しており、8世紀を中心にするが、検出した高まりは第10 a層の下面遺構と判断できることから、第10 a層の出土遺物より10世紀を中心にする時期が与えられる。また、2-29溝は第11 a面の上面遺構と考えられ、10世紀より遡る可能性が考えられる。

・第12 a面 (図19、図版8-1~6・8)

第11 a層を掘削して検出した遺構面である。同層の遺存状態は必ずしも良好ではなく、1-1区北半では第12 a層との差異が不明瞭となり、2-1区では下層の影響で同層が残存しない箇所がある。遺構面の標高は、概ねT.P.+10.9m前後を測るが、2-2区は南西端が低地となって下降する。最も低い南西端でT.P.+10.3m、低地部の上端付近はT.P.+10.7mを測り、比高差は0.4mとなる。低地部は第14 b面でも低地となっており、これを踏襲するものである。低地部の埋土は暗色の強い粘質シルトで3層に細分できる。上層から、炭を多く含む青黒色細砂混じり粘質シルト、暗青灰色細砂混じり粘質シルト、暗オリーブ灰色細～中砂混じり粘質シルトである。なお、低地部は第11 a面では概ね埋没している。

1区では北側もしくは北西・北東方向へ概ね直線的に流れる溝、不定形な土坑・ピットを検出し、2区では北西方向へ流れる複数の溝を検出した。遺構からの遺物の出土は概して少ない。

(1) 溝

1-56・57溝 (図20) 1-2区西端付近で検出した。今回検出した遺構の大半が北西方向を指向するのに対し、58溝とともに北東方向へ流れる。溝幅は一定せず、深さも0.1m未満と浅い。埋土は灰色細砂混じり粘質シルトである。埋土中から土師器細片が出土した。

1-78・79・80溝 (図20) 1-1区西端で検出した。3条がほぼ平行して緩やかに湾曲しながら北西方向を指向する。いずれも深さ0.1m未満の浅い溝である。79・80溝はいずれも幅約0.6mを測り、埋土は暗青灰色細砂混じり粘質シルトである。78溝は幅約0.3mと狭く、埋土は青黒色細砂混じり粘質シルトで、前者に比して暗色の強い埋土であった。79溝から土師器・縄文土器片が、80溝から縄文土器片が出土した。

1-75~77溝 (図20) 1-1区東半で検出した。いずれも北流する深さ0.1m未満の溝である。埋土は暗青灰色細砂混じり粘質シルトである。77溝から土師器片が出土した。

1-71溝 (図20) 1-1区東端で検出した。幅約0.6m、深さ約0.2mと、比較的、規模の大きな溝である。埋土は暗青灰色細砂混じり粘質シルトで炭化物粒を多く含む。

なお、1区の1-58・133溝を検出した範囲では第12 b層が露出していた。第12 b面で検出した遺構群と類似点もあるので、第12 b面で記述することとする。

2-56~61溝 (図21、図版8-5) 2-1区で南東-北西方向にのびる溝を検出した。2-56・57・58溝は本来は一条の溝として繋がっていたものと考えられる。埋土は暗オリーブ灰色微砂混じ

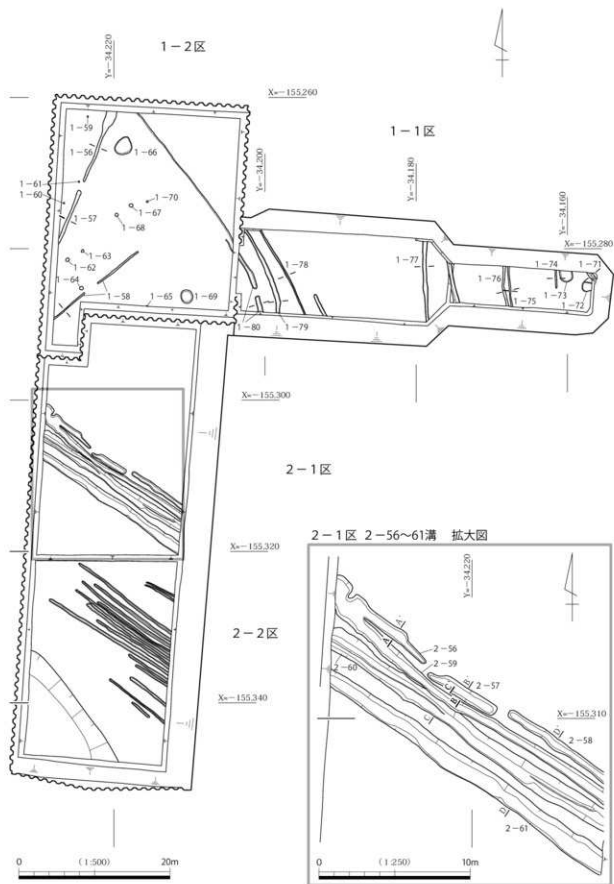


図19 第12 a面 遺構平面図

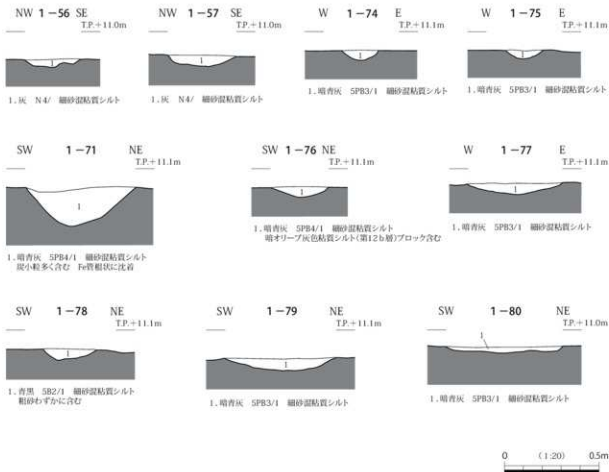


図20 第12a面 1区 溝 断面図

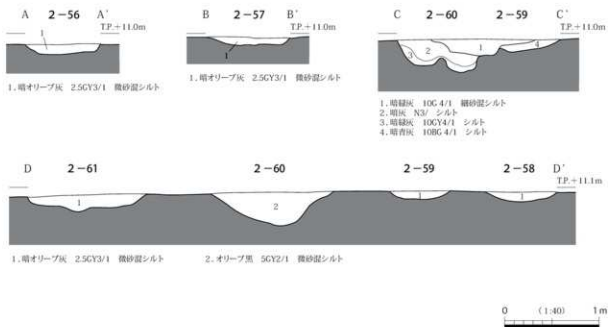


図21 第12a面 2区 溝 断面図

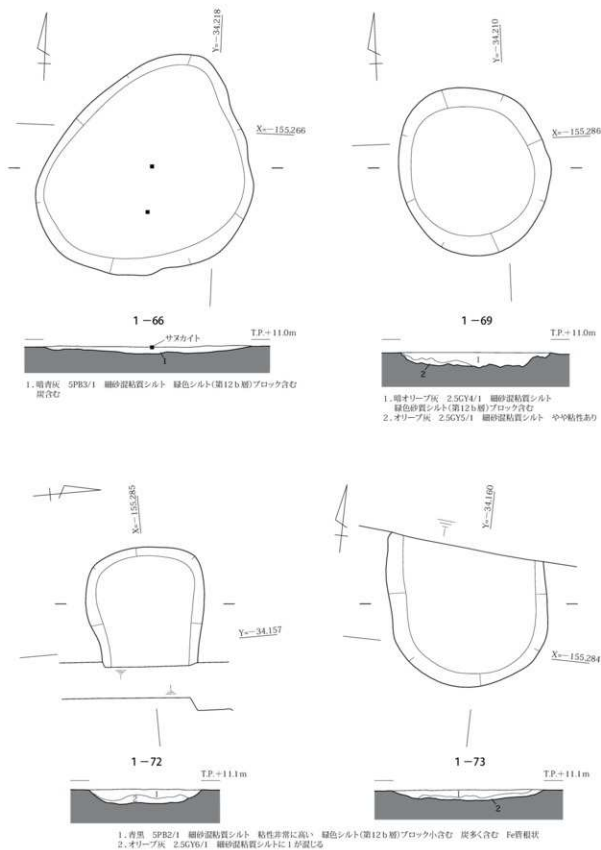


図22 第12 a面 1区 土坑 平・断面図

りシルトである。4条の溝はほぼ平行しているようにみえるが、2-56・59溝は若干湾曲しており、2-60溝に後出する。また、56・59溝は幅0.8～1.1m前後、深さ0.1m以下と浅く、これに比べて60・61溝は規模が大きく、幅約1.3mを測る。深さは60溝が0.35mと最も深い。埋土はオリープ黒色微砂混じりシルトで暗色が強く、埋土からは須恵器・土師器片、さらに縄文土器片が出土した。須恵器片には細片ではあるが、7世紀と考えられる須恵器杯身片が含まれている。56溝埋土から須恵器・土師器片が、61溝から須恵器・土師器・弥生土器片がそれぞれ出土した。

(2) 土坑

1-66・69・72・73土坑 (図22、図版8-6) 1-2区で66・69土坑を、1-1区東端で72・73土坑を検出した。66土坑は長径約2.5mのひずんだ円形を呈し、深さは0.1m未満の皿状に窪んだ土坑である。72・73土坑は調査区外に広がるため、全体の形状は不明であるが、深さ0.1m前後の皿状に窪んだ土坑である。いずれも埋土に炭化物を多く含む。69土坑は直径約1.6mの円形を呈する。深さ約0.15mを測る。底面はやや凹凸がみられた。66土坑、73土坑からはサヌカイト片 (図37-150・

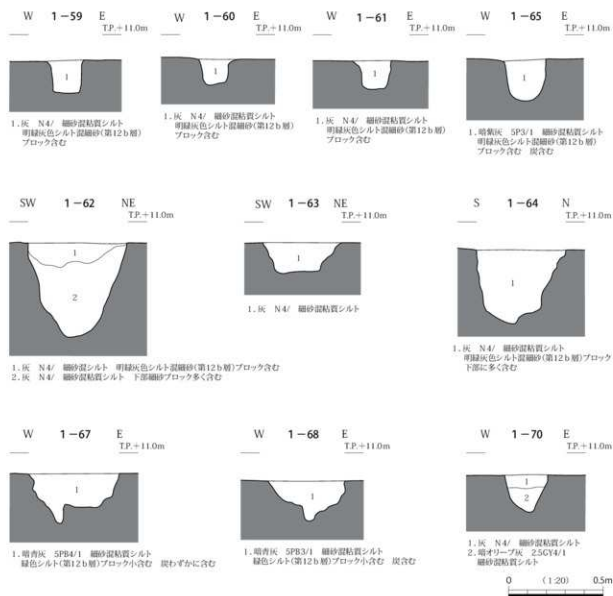


図23 第12a面 1区 ビット 断面図

151・152・154) が出土した。

(3) ビット

ビットは1-2区で10基検出した。ビットを検出したのは1-2区西側に限定されており、この範囲は第12 a層がほとんどなく、第12 b層が露出していた。後述する第12 b面では、同様にビットを複数検出しており、第12 b面に帰属する可能性も考えられる。検出したビットは建物等を構成するものはない。62～64・67・68ビットは比較的規模が大きいが、他は直径0.2m前後、深さは0.2m未満と小さい。埋土は灰色、暗紫灰色の細砂混じり粘質シルトで、第12 b層の小ブロックを含む。ビットからの遺物の出土はない。

1-62～64・67・68・70ビット (図23、図版8-8) 比較的、規模の大きなビットである。直径0.4～0.5mの円形を呈し、62ビット・64ビットは深さ0.4～0.5mと深い。埋土は灰色の細砂混じり粘質シルトである。他は深さ約0.15～0.2mを測る。67・68ビットは暗青灰色の細砂混じり粘質シルトを埋土とする。

検出した遺構からは遺物の出土は少なく、時期を特定することは困難であった。大部分は第11 a層の下面遺構と考えられ、8世紀を中心にその前後を含む時期と考えたい。また、縄文土器片やサヌカイトの剥片を含む遺構が散見しており、1区で検出した土坑は縄文時代の遺構である可能性が高い。

・第12 b面 (図24、図版8-7・9・10-1～6)

第12 a層を掘削して検出した遺構面である。遺構面の標高は2-2区南西端を除くと、T.P.+10.7～10.9mを測り、1-1区、2区中央が全体に高い。2-2区南西端は第12 a面同様、低くなっている。

遺構面では不定方向にのびる溝、大小の土坑・ビットなどを検出した。建物を構成するビットはなく、その性格は不明である。また、遺構からの遺物の出土も概して少ない。

その他、噴砂が確認できた(図版10-5・6) これは第14 b層が噴きあがったもので、第14 b面では更に顕著に確認できた。この噴砂は断面観察では第11 a層に達するものがあることから、第11 a層堆積以降の地震であることが分かる。

(1) 溝

1-131～133溝 (図25、図版8-7) 1-1区中央で検出した。南東-北西方向に直線的に平行してのびる。幅0.6～0.85m、深さ0.2m前後を測り、埋土は緑黒色細砂混じりシルトで、規模、埋土ともに類似する。132溝は調査区北側で131溝と二股に分かれている。133溝は当初、第12 a面で検出したが、溝の周囲は第12 b層が露出しており、平行する132溝は調査区東西断面での観察で、第12 a層に立ち上がりが確認できなかった。以上のことから、いずれの溝も第12 b面に帰属すると判断した。同じく1-1区で検出した南東-北西方向の1-163・158溝は156溝に先行する。

1-58・83・96・162溝 (図24、図版10-3) 1区で検出した。いずれも溝底部に連続したビット状の窪みをもつ溝である。1-96溝は南西-北東方向の溝で、第12 a面で検出した1-58溝に繋がる。58溝は第12 a層が遺存する部分では検出できなかったことから、96溝と同一遺構と判断し、ここで扱うこととする。1-1区で検出した1-162溝は南東-北西方向の溝で、その底部ではビット列を検出した。溝は幅2.5～3.0m前後を測り、深さは約0.1mを測る。溝底部で検出したビットは溝の軸方向に長い楕円形を呈するものが多く、直径0.2～0.5m、深さ約0.1mを測る。途中、乱れるところはあるが、直線的に並び、1-2区で検出した1-83溝とつながるものと考えられる。83溝は溝というよりビット列といった状況ではあるが、本来は溝を伴うものであったと考えられる。この2本の溝、1

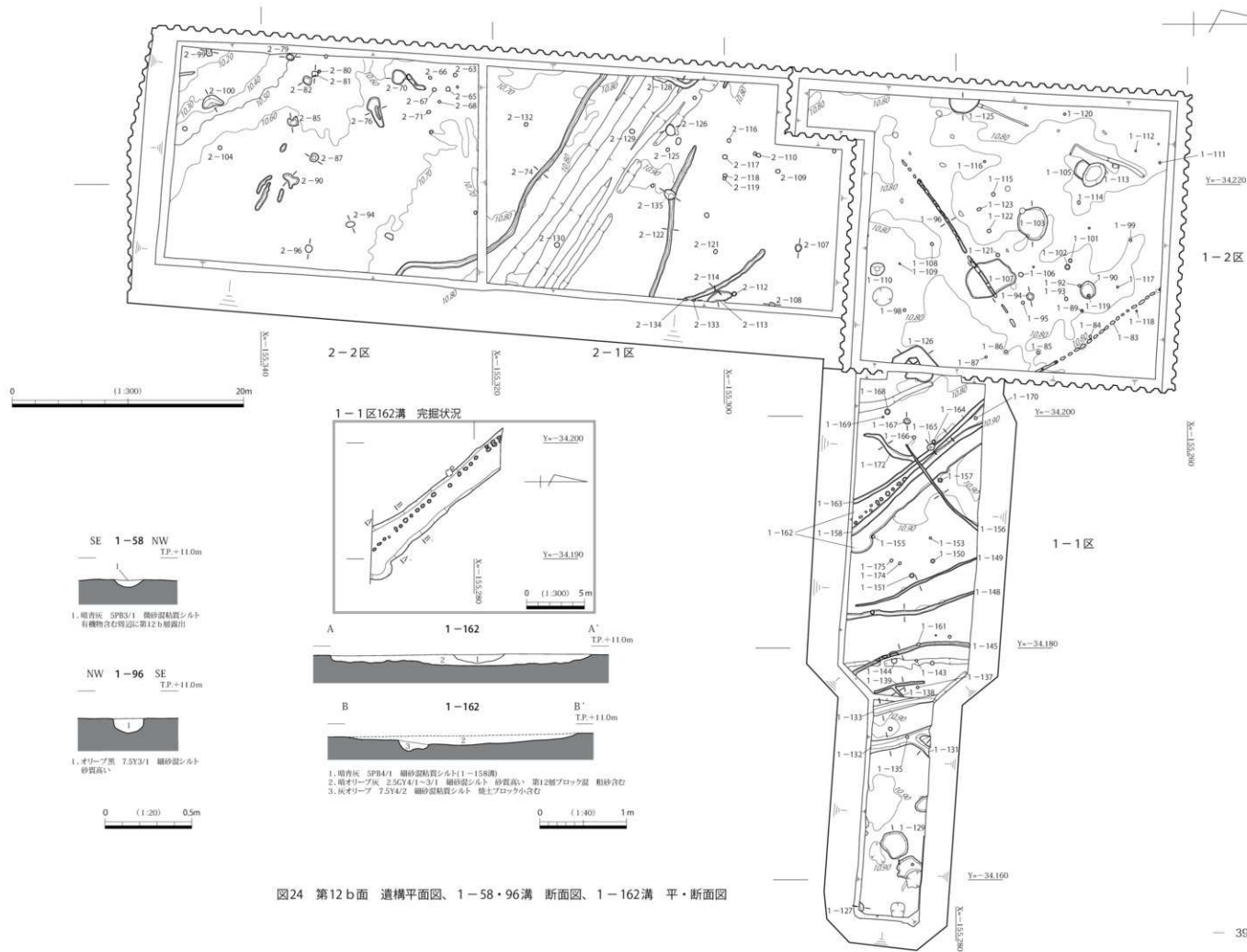


図24 第12b面 遺構平面図、1-58・96溝 断面図、1-162溝 平・断面図

ー83・162溝と1ー58・96溝はほぼ直交する方向にのびている。1ー83溝の埋土中から縄文土器片・土器片が、162溝からは縄文時代晩期突帯文土器が出土している（図35）。

1ー139・145・148・149・156溝（図25）1ー1区中央で検出した溝で直線というより、緩やかに蛇行する幅が狭く、浅い溝である。南東ー北西方向にのびる139・145・148・149溝、南西ー北東方向にのびる156溝がある。

2ー74・114・122・128溝（図26）2ー1区では、第12 a面 で検出したような同一方向を指向する規則正しい溝はみられない。いずれも蛇行しつつ緩やかに北西方向へのびる溝である。74溝は幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。114溝は幅約0.4m、深さ0.1m未満である。128溝は2ー1区西端で検出した溝で、調査区外にのびており詳細は不明である。幅は約0.45mと他の溝と変わらないが、深さは約0.25mと深い。

（2）土坑

土坑は各地区で検出した。そのうち、2ー2区南半では**2ー70・76・87・90・99・100土坑**（図29）のような不定形で深さ0.1mに満たない土坑が等高線に平行して位置している。これらの土坑は人為的な遺構というよりむしろ、地形の窪みと考えられる。また、1ー1・2区で検出した**1ー103・105・107・125・129土坑**（図28）なども深さ0.1mに満たず、浅い皿状を呈するもので、埋土は第12 a層に類似している。これらの土坑も地形の窪みといった自然地形の可能性が高い。

1ー90・113・110・126土坑（図28）1ー2区で検出した比較的大型の土坑である。90土坑は直径1.3×1.5mの楕円形を呈し、深さ0.1m前後、底部に凹凸が目立つ。埋土は第12 a層に類似し、炭を含む。113土坑は長軸2.4m、短軸1.6mの楕円形を呈し、深さ0.1mを測る。埋土に粗砂を多く含んでいる点で他の遺構埋土とは異なる。なお、土坑を縦断するように噴砂がみられた。110土坑は直径1.1mの円形を呈し、深さ約0.1mを測る。埋土は第12 a層より色調が薄く、やや砂質が高い。他の遺構埋土とは区別できるものであった。126土坑は1ー2区と1ー1区の境で検出した。平面形が特徴的で土坑周囲が幅0.9m前後、深さ0.1m以下の溝状に窪む。溝底部は凹凸が著しい。中央付近は高く、第12 b層が露出している。土坑周囲には炭が点在していた。埋土は青黒色細砂混じり粘質シルトで暗色が強く、炭化物を粒子状に非常に多く含み、焼土塊が出土した。

1ー127・167土坑（図27）1ー1区で検出した。127土坑は1ー1区東端で検出した土坑で、調査区外に広がるため、平面形は不明である。167土坑は直径約0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は上層がオリーブ黒色細砂混じり粘質シルト、下層には炭化物、焼土を含む。焼土塊が出土した126土坑からは約5 m東に位置している。

1ー165土坑（図27）1ー1区で検出した。直径約0.5m、深さ0.4mを測る円形の土坑である。断面形は上方が大きく開き、下方は直線的に落ちる。埋土の上層は暗青灰色細砂混じり粘質シルト、下層は暗青灰色細砂混じり粘質シルト、細砂混じりシルトである。

2ー126・135土坑（図29）2ー1区で検出した。長軸0.1m前後の楕円形の土坑である。126土坑は深さ約0.4mを測り、断面形は直線的に壁が立つものである。埋土は灰色シルトでブロック土を含む。135土坑は深さ0.5mを測る。埋土は暗灰色シルトで炭を含む。埋土中から土師器片が出土した。

2ー79・81・94・96土坑（図29）2ー2区で検出した。79土坑は長軸0.6mの楕円形を呈し、深さ約0.3mを測る。埋土は4層に細分でき、下層は微砂を含む。81土坑は1辺約0.4mの隅丸方形を呈し、深さ約0.2mを測る。埋土は灰色シルトである。94土坑は0.4×0.8mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土は灰色のシルトで2層に細分でき、上層のほうが薄い色調である。96土坑は直径約0.6mの円形を

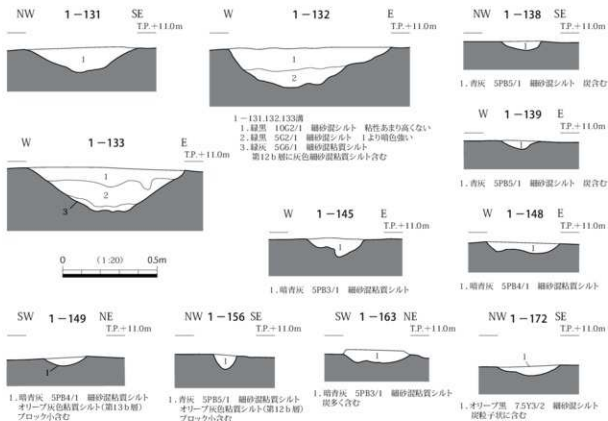


図25 第12b面 1区 溝 断面図

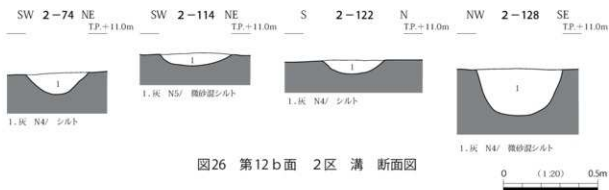


図26 第12b面 2区 溝 断面図

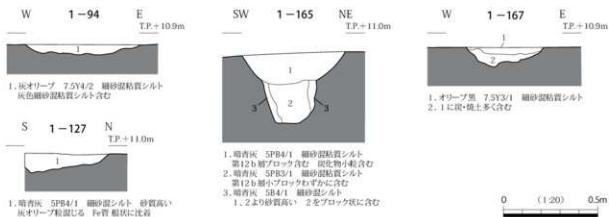
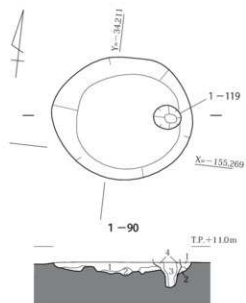
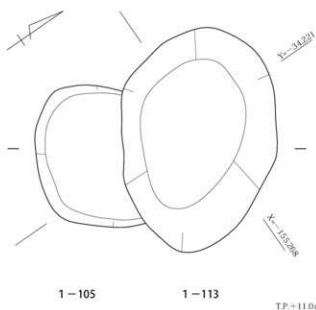


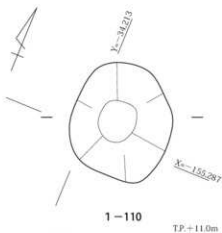
図27 第12b面 1区 土坑 断面図



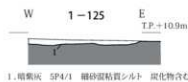
1. 暗栗灰 SP3/1 細～中粒凝結質シルト 炭含む Fe管痕状
2. オリーブ灰 2.GY5/1 砂質シルト(第12b層)に1が混じる 炭含む
3. 暗オリーブ灰 2.GY3/1 細砂凝結質シルト(1-119ピット)
4. 暗栗灰 SP4/1 細砂凝結質シルト
オリーブ灰色砂質シルト(第12b層)混じる(1-119ピット)



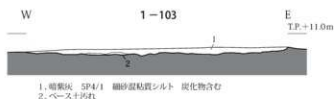
- 1-105 1-113
- TP.+11.0m
1. 暗栗灰 SP3/1 細砂凝結質シルト 細砂凝結質シルトブロック含む
 2. 第12b層に1含む 1より粗砂少ない
 3. 暗栗灰 SP3/1 細砂凝結質シルト やや砂質高い 炭多く含む (1-105)



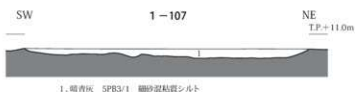
1. 紫灰 SP5/1 細砂質シルト やや砂質高い 緑色シルト(第12b層)ブロック含む 炭化物小粒含む Fe管痕状を含む



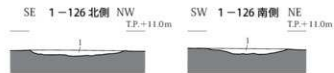
1. 暗栗灰 SP4/1 細砂凝結質シルト 炭化物含む



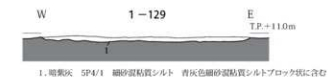
1. 暗栗灰 SP4/1 細砂凝結質シルト 炭化物含む
2. ベース土汚れ



1. 暗栗灰 SP3/1 細砂凝結質シルト



1. 青黒 SP2/1 細砂凝結質シルト 第12b層ブロック状に含む 炭化物粒子状に多く含む 底面凹凸あり



1. 暗栗灰 SP4/1 細砂凝結質シルト 青灰色細砂凝結質シルトブロック状に含む

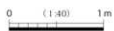


図28 第12b面 1区 土坑 平・断面図

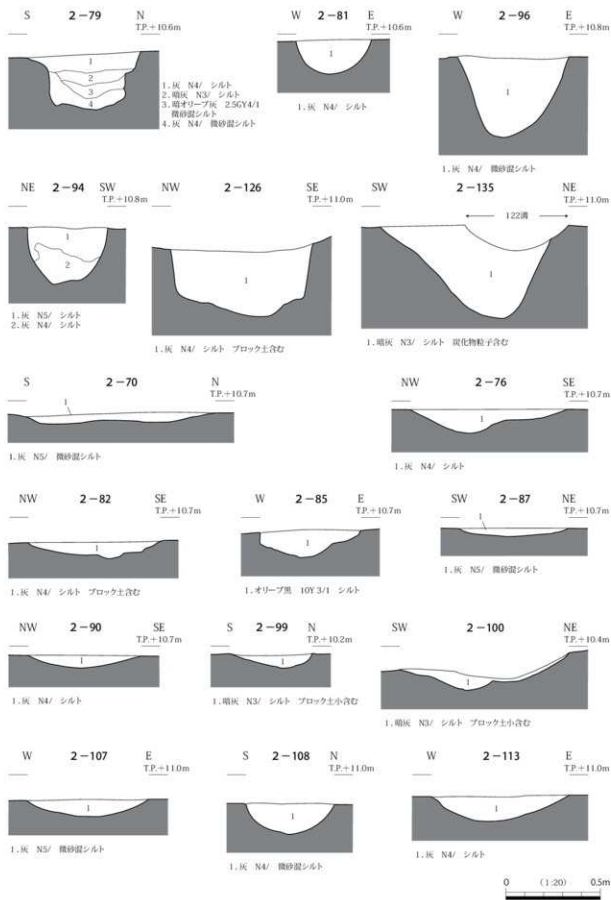


図29 第12 b面 2区 土坑 断面図

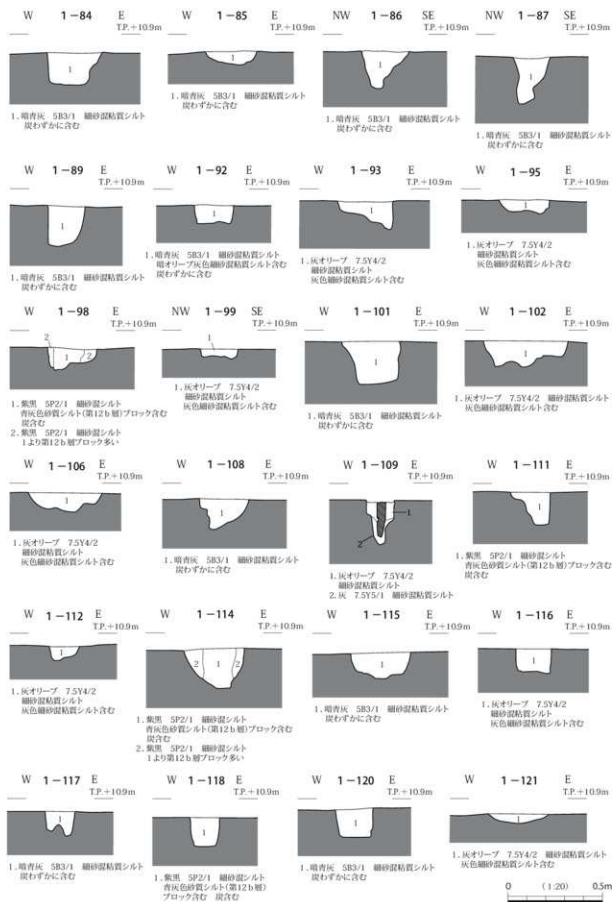


図30 第12b面 1区 ピット 断面図

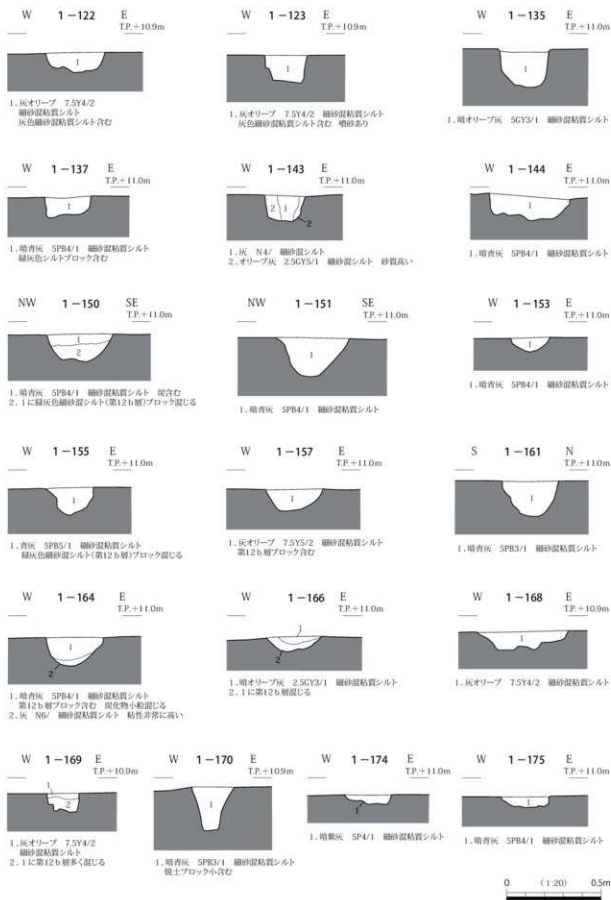


図31 第12b面 1区 ピット 断面図

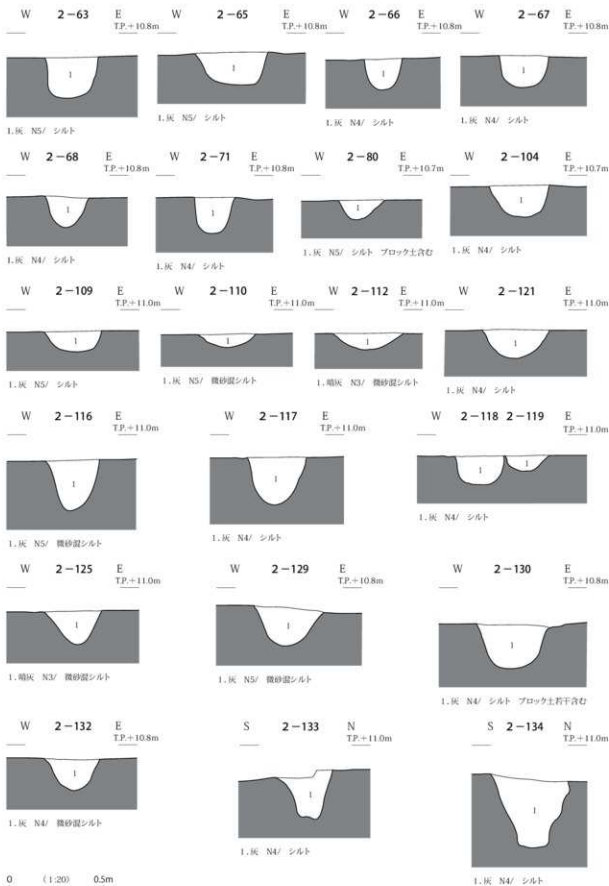


図32 第12b面 2区 ビット 断面図

呈し、深さ0.4mを測る。埋土は灰色微砂混じりシルトである。これらの土坑からは遺物の出土はみられなかった。

(3) ビット

ビットは1区、2区ともに検出した。図30～32に示したが、直径0.2～0.3m前後円形を呈し、深さ0.2m未満の単層のものがほとんどである。遺物の出土はない。検出状況は散漫であるが、1-2区では3H-2h、2-1区では3H-3j、2-2区では3I-3cに集中する傾向がみられる。建物などを構成するものは確認できなかった。2-1区で検出したビットは比較的規模が大きく、2-116・117・133・134ビットなど、深さ0.2mを超え、特に134ビットは直径約0.4m、深さ約0.4mと規模が大きい。

第12a面同様、検出した遺構は遺物の出土が少なく、時期の特定は困難である。遺構出土遺物は2-135から出土した土師器片以外は縄文時代晩期末、あるいは時期が特定できない土器片である。なお、この土器片は粗粒砂を含むもので、縄文土器の可能性が高い。検出遺構には少なくとも縄文時代晩期末のものが含まれていると判断できる。第12b層以下は縄文時代の地層であることから、遺構の上限は縄文時代晩期末と考えて矛盾しない。また、第12a面で検出したサヌカイト片を出土した1-66土坑などは周辺で第12b層が露出していたことから同時期の遺構と考えたい。第12a層の下限は今回の調査成果では判断が難しく、第11a層が古代を中心とする層であることから、それよりは遡るものである。縄文時代晩期末以後、古代にかけて、調査地では土砂の供給が極めて少なく、遺構面の更新がほとんどなされていない。わずかではあるが、第12a層からは須恵器片、弥生土器や石器も出土している。第12b面では縄文時代晩期以降、古墳時代後期ごろまでの複数時期の遺構が含まれていると考えられる。

第12a面及び、第12b面で検出した遺構は以上のように時期、性格等不明瞭なもので、集落縁辺部といったものであろうか。両面で検出した遺構を比較すると、第12a面では直線的な平行する溝が中心となっており、第12b面で検出した溝は蛇行するようなものが多く、その他複数のビット、土坑がみられる。このようにみても、第12b面の1-1区で検出した1-131～133溝は第12a面の溝と特徴が同じで、上層に帰属する可能性も考えられる。

第12a層は若干の凹凸を有していたと考えられるが、水平に堆積している第11a層によって攪乱されており、本来の凹凸は不明瞭となっている。第12a層は第14b面の凹凸をある程度、反映していると考えられるが、第12b面～第14b面の等高線(図24・42)をみると、第12a面の溝と等高線が平行していることがよく分かる。また、2-58～61の規模の大きい溝は傾斜の変換点付近に位置している。さらに1区を含めて溝は凹凸のうち、凸部分に位置していることが分かる。このように第12a面の溝は地形によって規制されるものといえる。

一方、第12b面で検出した溝にはこれといった規則性は見出せないが、底部にビット列を有する溝が直交する方向にのびており、特徴的な遺構といえる。

・第10a層～第12b層関連 出土遺物(図33～35、図版14～17)

図33は第10a層関連出土遺物である。第10層は第10-1a層、第10-2a層に分けられるが、1区では土層の掘り分けを行っておらず、第10a層として一括して掘削している。なお、第10a層から出土した遺物のうち、明らかに下層からの混入と判断された遺物は図34に示した。

図33-78～80は第10-1a面検出時に、81～87は第10-1・2a層から出土した土師器杯である。78～80は器壁が厚く、口縁部外面はヨコナデ、体部外面は摩滅のため不明瞭ではあるが、80は指オ

サエ痕が残る。80は口縁端部に面を有する。81～86は78～80に比して器壁が薄く、口縁部をヨコナデ、体部外面の指オサエ痕が明瞭に残るものである。特に81・82・86は口縁部のヨコナデが強く、端部は尖る。83は口縁部内面が沈線状に窪む。87は底部から体部が丸みをもって立ち上がり、口縁端部は丸く治める。

第10 a層からは、瓦器が数点出土するものの、これは上層の遺物が混じったものと考えられ、図化できないが、黒色土器A類が一定量出土することからも10世紀を中心とする時期が与えられる。

図34は第10 a層、第11 a層関連出土遺物である。特筆すべき遺物として、墨書土器、須恵器杯蓋転用碗、漆が付着した土器、製塩土器、瓦があげられる。88・90～95・98・103・104・107～109・114・117・120～123・129は第10-1・2 a層から、105・125は第11 a面検出時に、126は側溝から、他は第11 a層から出土した。

88～106は須恵器である。88～97は蓋である。94・95・97は頂部が平らで口縁部が屈曲するもので、88・89・90・93は頂部が丸みを帯び、口縁部は屈曲しない。96は口縁部にかえりを有するものである。88・89は墨書土器。いずれも須恵器杯蓋の外面に墨書が書かれる。88は非常に丁寧な「博」の字が書かれ、下部に文字は続かないが、上部は欠損しており不明である。89は墨書の内容は不明。90は須恵器杯蓋を碗に転用したものである。蓋の内面に墨の付着が認められ、内面は磨耗している。91・92はつまみである。98～100は杯身である。98は高台を有さないものである。99・100は断面四角形の高台を底部の端に貼り付ける。101は高台がつく短頸壺である。口径10.7cm、底径8.6cmを測り、器高は4.75cmと低い。扁平な体部に短い口縁部が直立する。図18に出土地を示した。102は壺底部である。高台を有する。内面に自然軸が付着する。103は高台付皿である。短い口縁部が屈曲するもので、高台はハの字状に内側に貼り付ける。口径25.8cm、底径16.6cmに復元でき、底径に比して、口径が大きい。色調は灰白色を呈する。東海系か。

104～108は内面に漆の付着が認められるものである。104～106は須恵器杯身、107・108は土師器杯である。104は底部片で、底部内面に、105・106は内面に漆の付着がみられる。106は器壁がやや厚手、焼成はやや軟質であり、平らで薄い底部から体部が直線的に上外方にのびる。107は底部片で内面に、108は体部内面に漆の付着が認められる。108は口縁端部をつまみあげる。

109～111は製塩土器である。109は口径8.4cmを測る。他はこれより口径は大きい。109・110は口縁端部を平らにするものである。内外面とも指オサエの痕跡残る。111は口縁部を折り返し、口縁部内面を強くなる。第10 a層、第11 a層からは計34点の製塩土器が出土した。図化していないが、図版14-281のように内面に細かい布目を有するものもある。

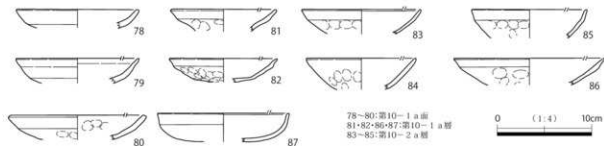


図33 第10 a層関連 出土遺物



圖34 第10 a層・第11 a層関連 出土遺物

112～125は土師器である。112～115はミニチュア土器で112は高杯、113～115は甕を模している。113は口縁部内面にハケメを施す。いずれも体部外面に明瞭な指オサエ痕が残る。116は小型の甕である。口縁部はヨコナデ、端部はつまみあげる。体部外面は縦方向のハケメ、内面はケズリ、口縁部内面及び体部外面に煤の付着が認められる。

117は蓋のつまみである。118～120は杯である。118は摩滅により調整は不明。丸みを帯びた体部を呈し、口縁端部を横につまみあげる。119は口縁部外面をヨコナデ、体部外面には指オサエ痕が明瞭に残る。120は口縁端部の肥厚が小さい。121～123・125は皿。121・122は口縁部が外反、上部で内湾するもので、口縁端部は内側に丸く肥厚する。内面に斜放射暗紋が認められる。123は底部片である。断面三角形の高台を有し、底部内面には螺旋状の暗紋を施す。摩滅により調整は不明瞭。125は口縁端部には面を有し、内側に肥厚する。124は鉢。外面は横方向に密にヘラミガキ、体部下半はケズリ、内面には二段の放射状の暗紋を、その間に螺旋状の暗紋を施す。口縁端部は面を有し、端面は沈線状に窪む。

以上の遺物は8世紀を中心とするもので、96・118・124など7世紀の遺物も含まれる。この他、図示していないが、瓦類が出土している。軒瓦の出土はない。図版16に出土瓦を掲載した。いずれも凹面に布目を有する平瓦片である。

126～130は古墳時代の須恵器である。126～128は杯蓋、129・130は杯身である。126は外面に自然釉が付着する。127・128・130は口径が大きく、127は体部と天井部の境を凹線て画する。6世紀後半。

131は弥生土器で鉢である。体部外面に麤状文を施し、3本1組の棒状浮文を貼り付ける。浮文には刻みを施す。弥生時代中期。

図35-132・133は第12 a層から出土した土器である。132は不明須恵器である。平面形は不明であるが隅丸方形の容器か。側面から底部周縁にかけてケズリ、他はナデである。全体に粗雑な印象である。133は弥生土器、壺底部である。平底。胎土には角閃石を含み、粗粒砂を多く含む。

図35-134～140は縄文時代晩期突帯文土器である。135は第12 a面2-60溝から、137・139は第12 b面1-162溝から出土した。136・138は第12 a層から、他は第11 a層から出土した。135は口縁端部、及び口縁部外面の突帯に刻みを配する。134・135は角閃石を含まず、非生駒西麓産である。136・137・139は口縁端部に突帯を有し、138・140は頸部と胴部の境に突帯を有するものである。長原式。139・140の突帯の刻みは大きくD字状を呈し、深い。頸部は板状工具によるナデ、胴部はケズリを施す。

・第10 a層・第11 a層関連 出土鉄製品・石製品 (図36、図版16)

141は第10-1 a面検出時に出土した鉄鎌である。図18に出土地点を示した。最大長19.2cm、最大幅11.3cm、刃部幅4 cmを測る。基部は先端に向かって幅がわずかに狭くなり、その先端を小さく折り返している。142は折損しているが石包丁か。片岩製。第11 a層から出土した。143・144は砥石である。143は第10-1 a層から、144は第11 a層から出土した。143は両端が欠損しているが幅1.7cmと小型。144は最大幅4 cmを測る。いずれも良く使いこまれている。

・第10 a層～第12 b面関連 出土石器 (図37、図版22)

図37は打製石器である。いずれもサヌカイト製である。145は第10 a層、146・148・149・153は第11 a層、147は第12 a面検出時に、150は第12 a面1-73土坑、151・152・154は第12 a面

1-66土坑から出土した。

145～148は石鐮である。145は凸基式。最大長3.1cm、幅1.35cmを測る。146は凹基式。最大長2.85cm、最大幅1.35cmを測る。147・148は大型の有茎石鐮である。147は最大長5.2cm、最大幅2.7cmを測る。148は最大長4.45cm、最大幅2.95cmを測る。148は剥離面を大きく残し、周縁部の加工を施しているため、147に比して形がいびつとなる。149は二次加工がある剥片である。折損しており、全体の形状は不明であるが、石匙か。周縁部の加工は片面のみである。

150～154は剥片である。いずれも素材としての利用が可能な剥片である。1-66土坑から出土し

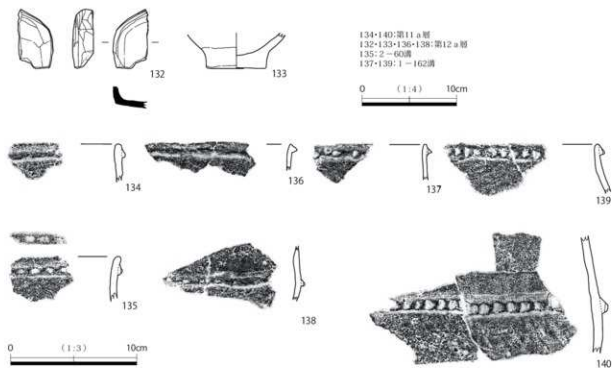


図35 第11 a層～第12 b層関連 出土遺物

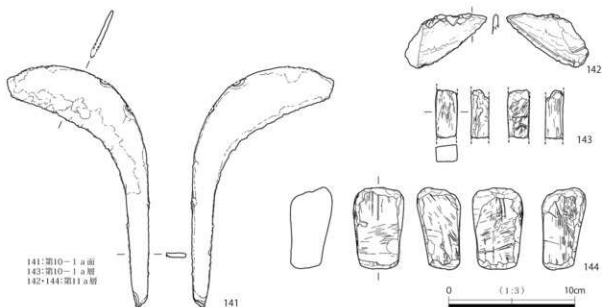
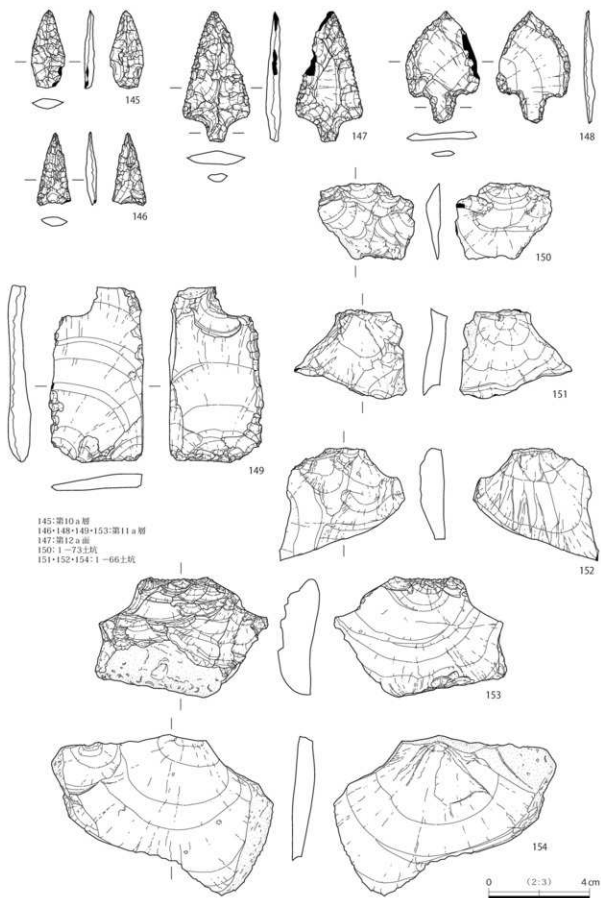


図36 第10 a層・第11 a層関連 出土鉄製品・石製品



145: 第10 a層
 146・148・149・153: 第11 a層
 147: 第12 a層
 150: 1-73土坑
 151・152・154: 1-66土坑

圖37 第10 a層~第12 b層関連 出土石器

た151・152・154は打面に風化面を残す。最も大きい154は最大長6.3cm、最大幅8.75cmを測る。

第10 a層、第11 a層からは細片ながら上層までと比べて多くの土器片が出土した。第11 a層には縄文時代晩期末～古墳時代の遺物も含まれているが、第12 a層から縄文時代晩期末の遺物や、須恵器や土師器片も出土していることから、これを下層の混入と考えたい。よって、第11 a層は8世紀を中心にその前後の時期が与えられる。また、第12 a層は全体的に遺物の出土が少なく、縄文時代晩期の遺物が最も安定してみられるが、須恵器片、土師器片、弥生土器や石器を含んでいることから、縄文時代晩期末～古墳時代までの時期幅をもって考えておきたい。

小結

第10 a面で検出した条里畦畔は第9-1 a面までのものと位置がずれており、畦畔の間隔にばらつきが生じるなど、違いが認められた。第11 a面では上層までと同様、状況は不明瞭であるものの、擬似畦畔、及び南北方向の溝を1条を検出した。続く第12 a面ではこれまでの条里遺構とは異なり、地形に規制された溝を検出した。このことから、第11 a面は条里型地割の施工時期を考える上で非常に重要であると言える。第12 a面の溝の時期を明確にする遺物の出土はないものの、第12 a面の2-60溝からは7世紀代と考えられる須恵器杯身片や古代の土師器片が出土しており、これらの遺構を第11 a層の下面遺構と捉え、7世紀以降、8世紀頃と現状では推測できる。第11 a面の2-29溝は当面の上面遺構である可能性が考えられ、溝内からは遺物の出土がなく時期を明確にしたいものの、今回検出した中では正方位を指向する最も古い遺構と考えられる。また、第11 a面の擬似畦畔は第10 a層の下面遺構であることから、10世紀には条里型地割に基づいた耕地区画がなされた可能性が考えられ、その後、踏襲され続けている。ただし、当調査区は方1町の坪内に取まってしまい、坪境の状況は不明である。連続する耕作土間の擬似遺構などを頼りにしての区画の復元であり、その時期も含めて、断定するのは難しい。近接地での調査が継続しており、今後坪境等の調査によって検討が必要などである。

第10 a層～第11 a層には、図化できた土器は少ないものの、墨書土器、転用硯、漆付着土器、製塩土器、瓦など一般的な集落では出土しないような遺物が含まれている。遺構としては直接これらの遺物と関連づけられるようなものは検出できなかったが、周辺には平野廃寺など古代寺院が位置しており、これら寺院との関連の中で捉えられるものであろう。

第12 b面では溝に加えて、ピットや土坑を検出したが、建物等は復元できなかった。また、遺構内及び層内からの遺物の出土も少なく、時期の特定はできなかったが、集落の縁辺といった様相を示す。第12 a層は下層の第14 b面の地形を踏襲するものであることは先に触れたが、調査区東西断面（図4）をみると、第14 b層の下層が調査区東側に向かって高くなっているようであり、調査区東側に遺構が広がる可能性は十分に考えられよう。

第3項 縄文時代の調査（第13 a面～第15 b面の調査）

第13 a面以下は縄文時代の遺構面である。

第12 a層以下、明瞭な土壌化層は第15 a層まで確認できない。第15 a層は調査区南端でわずかに確認されたのみで、他は厚い河川堆積物が調査区全体でみられる。この堆積物を第14 b層とした。第14 b層堆積後は細粒の堆積物が約0.5mにわたりみられる。この間には暗色帯を示す明瞭な土壌化層は確認できなかったが、鉄分の沈着が著しい暗緑灰色細砂混じりシルト層がみられた。この層は鉄分の影響が著しく、層境が不明瞭であるが、粒径が均一な第12 b層に比して乱れていたこと、1-2区の側溝内の同層付近で、ほぼ完形の縄文土器浅鉢（図39-155）がほぼ正置で出土したことから（図版10-7）、同層上面を第13 a面として調査を行った。第14 a層も第13 a層と類似した土層である。なお、第13 a層～第14 a層はほとんど遺物を含まず、先の浅鉢1点である。

・第13 a面（図38、図版10-7）

1-1区東半は調査終了面が他より高く、T.P. +10.7mである。よって、遺構面の調査は第12 b面までとなった。第13 a面は第14 b層堆積後の凹凸の影響を受け、T.P. +10.3m～10.7mと0.4m前後の起伏がある地形となっている。調査区南端が最も低い。また、第14 b層の噴砂が著しい。1-2区で特に明瞭で、南東-北西方向にのびる。なお、先述のように、噴砂は第11 a層にまで及んでいることから、第11 a層堆積後の地震であると考えられる。当該面では土坑、ピットを検出した。

1-176～178土坑（図40）1-2区中央付近で、土坑を3基検出した。土坑は深さ0.1m未満と非常に浅く、断面形は皿状を呈している。埋土には炭化物を粒子状に多く含んでいる。一方、2区で検出した**2-136～141ピット**（図40）はいずれも灰色のシルトを埋土としており、上層で検出したピットと類似した埋土であることから、第12 b面に帰属する可能性が高い。2-137ピットは直径0.55m、深さ0.2mを測り、規模が大きい。他は直径0.2m、深さ0.2m以下である。

第13 a層からの遺物の出土は極めて少なく、1-2区南側溝から縄文時代晩期の浅鉢の他は、土器片1点が出土したのみである。浅鉢はほぼ完形で、底部を下に正置している。周辺を精査したが、掘り込みは確認できない（図版10-7）。第13 a層が西に下降する付近に位置している。

図39-155は先述の縄文土器浅鉢である。口径21.3cm、器高8.4cmを測る。口頸部は長く、やや内湾して開き、四方に波頂部を有する波状口縁を呈する。平面形は波頂部が張り出す隅丸方形を呈し、体部は円形を呈する。内外面とも摩滅するが、精緻な横位の磨きを施す。滋賀里Ⅲ式。

・第14 a面（図41、図版10-8）

第14 a層は調査区全域では確認することができない。第14 b面の低い部分に堆積する土層であろう。1-1区西半で不定形の土坑を検出した。土坑の周辺では1-2区同様、南東-北西方向の噴砂が認められる。なお、第14 a層からの遺物の出土はない。

1-179土坑（図41）0.5×0.7mの楕円形を呈し、西側に溝状に張り出している。埋土は2層に細分でき、上層は灰色シルト、下層はオリーブ黒色である。埋土には炭化物の他に焼土塊を含んでおり、人為的な遺構であると考えられる。

第13 a層、第14 a層では、わずかながらに人為的な遺構を検出した。各層は有機物を多く含むような黒色帯は形成されておらず、遺構、遺物は非常に希薄ではあるが、一定、地表化した段階があったと理解したい。図39-155の浅鉢より縄文時代晩期中葉の時期が与えられる。

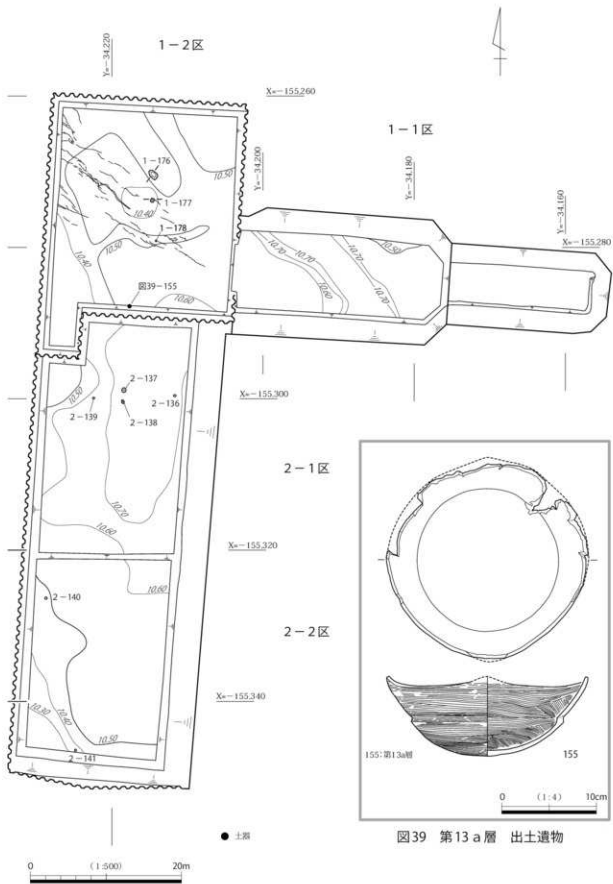


图39 第13a層 出土遺物

图38 第13a層 遺構平面図

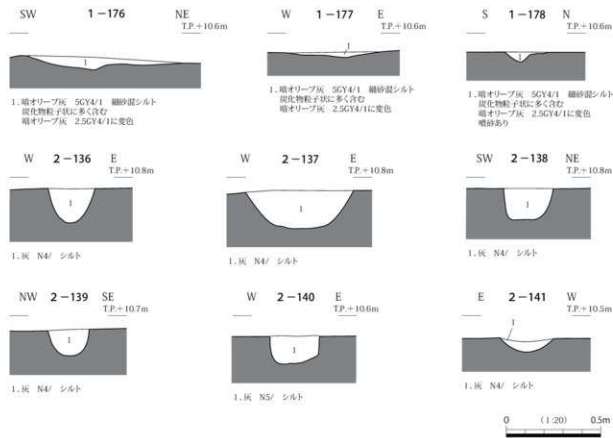


図40 第13a面 ビット・土坑 断面図

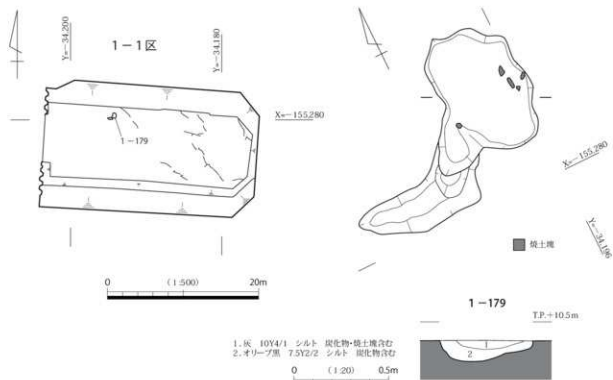


図41 第14a面 1-1区東半 遺構平面図、1-179土坑 平・断面図

・第14b面(図42)

河川堆積層である第14b層の上面である。遺構は検出できない。調査区はT.P.+10.1~10.5mと0.4m前後の起伏を有し、凹凸がみられた。2-2区南西側は調査区外に向かって下降しており、最も低い。2-1区南半T.P.+10.5m、1-2区中央T.P.+10.2m、1-1区東側T.P.+10.3mと南東-北西方向に周囲より少し高い凸部となる。第14b面では更に噴砂が顕著に確認できる。この噴砂は図42に示したように凸部分と同じように南東-北西方向にのび、それぞれの凸部縁辺に特に集中しているようである。

第14b層からは多くの土器、サヌカイト片が出土しており、図42にa~cの出土位置を示した。これは第14b層内の出土地点であり、第14b面とは一致しない。

・第15a面(図42、図版11)

第15a面では調査区南端、T.P.+9.2mで河川の左岸を検出した。岸は大きく抉られて階段状になっており、第15a層が遺存するのは2-2区南西隅のわずかな範囲のみであった。これより他では調査終了面のT.P.+8.0mまで河川堆積物で占められており、以下に続いている。この河川を2-142河川と呼称し、河川堆積物を第14b層として調査を行った。この堆積層は一時の河川を表しているのではなく、河川の埋没、移動の履歴を示すものである。ここで再度、第14b層についてまとめた。

第14b層は基本層序でも記したように3層に分けることができる。図4~6に模式的に示しているので参照されたい。下層には粗砂~細礫といった粗粒の掃流堆積物が累重している。これは古段階の河川堆積物と考えることができる。中層は下層より全体に細粒で、粗~中砂を主体とする掃流堆積物とシルトなどの細粒の氾濫堆積物からなっており、不明瞭ながらも、これをセットとする堆積単位が複数認められる。この堆積単位は調査区南北断面では北から南に、東西断面では東から西に重なっており、北東から南西方向に側方移動して、ポイントバーを形成している。こうした堆積状況から、河川は南端を攻撃面として蛇行するもので攻撃側部に移動しながら流れていたと考えられる。第14b面で凹凸がみられることは先述したが、これは、中層の堆積単位に対応するもので、規模は小さいながらこの凹凸はスウェイル、スクロールバーと考えられる。また、第14b面で顕著な噴砂は主に中層の粗粒な堆積物であり、堆積単位をある程度、反映しているであろう。ただし、この単位の抽出は、類似した砂層の重なりであり、土壌の発達も弱く、また浸食を繰り返しているので困難である。上層は調査区南端でみられる腐植物を多く含むもので、2-2区南西で確認できる。河川の最終堆積層である。

第14b層からは多くの縄文土器が出土した。なお、第14b層の細分層による掘り分けは行っておらず、出土遺物も第14b層出土遺物として取り上げている。遺物は縄文時代後期後葉~晩期中葉のものが主体となって出土しており、その他、細片ではあるが、早期~後期中葉の遺物も出土している。

遺物は完形に近いものもあり、図43に第14b層中の遺物出土状況図を示した。出土地点aは1-1区北側に位置し、T.P.+10.3m付近で縄文土器鉢(図51-226)がほぼ完形で出土した(図版11-5)。第14b面に近い高さでの出土である。出土地点bは1-2区南側に位置し、T.P.+9.2m付近で縄文土器浅鉢(図48-196)が出土した(図版11-4)。ほぼ完形に復元できる。出土地点cは1-2区中央付近に位置し、T.P.+9.2m付近で2個体の深鉢(図48-198・199)が出土した(図版11-3)。なお、198の深鉢はこの他、T.P.+8.7m付近で出土した破片と接合している。この地点cの状況は重要で、土器の周囲には0.6×0.8mの範囲で炭層が広がり(図版11-2)、焼土塊が約3×3mにわたって点在している。また、骨片も出土した。土器出土地点の周囲は細粒の堆積物と粗砂~細礫からなっ

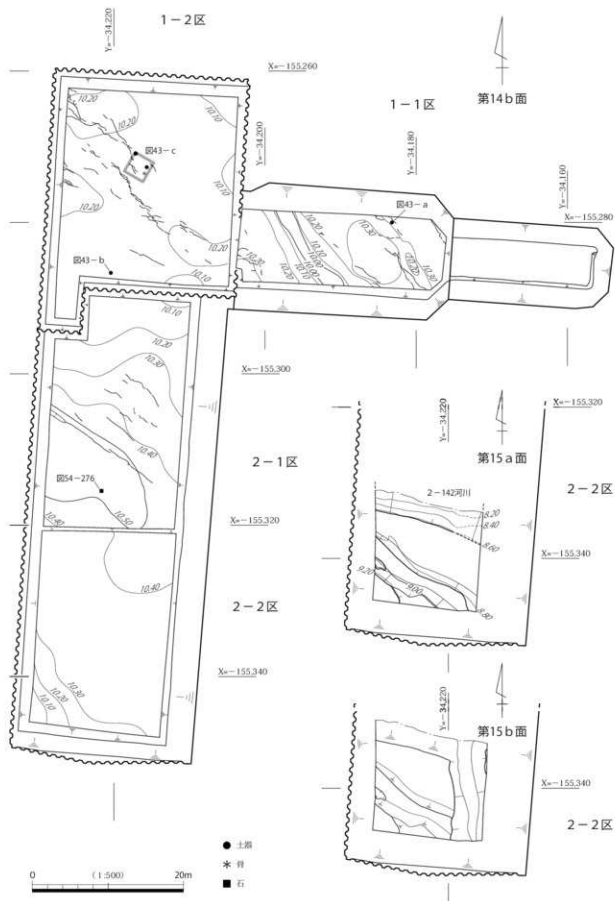


図42 第14b面・第15a面・第15b面 遺構平面図

おり、第14b層のうち、中層に相当し、出土レベルより下層との境目に近いことが分かる。少なくとも出土状況から、河川内を流されたものとは考えにくい。炭層や焼土が広がる状況からは、この場で使用していたと考えるのが最も自然であろう。土器は細粒の堆積物上に位置しており、中層段階のものと考えられるが、一定河川の堆積が安定した時には人々の活動が及んでいたものと考えられる。なお、出土地点bもcと同様、細粒の堆積物上である。地点cの深鉢は滋賀里Ⅰ式の特徴を有し、縄文時代後期末の時期が与えられ、中層堆積の1点として捉えることができる。また、第14b層からは滋賀里Ⅲ式の土器片も多く出土している。第14b層の堆積年代を明らかにするため、調査区南北断面（図5）の位置で土壌を採取、AMS法による放射性炭素年代測定を行った（第4章第2節参照）。その結果、中層の試料2、3は縄文時代晩期前葉～中葉の年代を示し、出土遺物と整合的である。地点cは中層の堆積層のうちでも北に位置しており、分析地点より古層といえる。掲載遺物の出土地をみると、縄文時代晩期中葉の遺物は2区に偏る傾向がみられ、1区ではほとんど出土していない。未掲載の破片の定量は行っていないが、図化可能な口縁部片などは抽出しており、全体的な傾向と捉えて問題はないであろう。このことは、河川が北東から南西へ移動している、という状況を裏付けるものである。よって2-142河川中層は滋賀里Ⅰ式から滋賀里Ⅲ式の時期が与えられ、先の出土地点cでみたように中層の堆積が一定安定した滋賀里Ⅰ式の段階には人々の活動の場ともなっていたと考えられる。上層は試料1の年代より、縄文時代晩期前葉～中葉の間には埋没し、放棄流路化したものと考えられる。なお、図48-198深鉢についても外面付着煤によるAMS法による放射性炭素年代測定を実施した。先の分析結果と合わせて詳細は第4章第2節を参照されたい。

第14b層からは宮瀧式、縄文時代後期後葉の遺物も一定量出土している。遺物は下層の粗流砂からも出土していることから、下層の堆積時期の一点となろうか。この下層の堆積物は第2項で述べたように、調査区東側では高くなっており、中層の各段階に対応する土壌化層が東側で確認される可能性も考えられる。今後東側の調査では中層、下層間の土壌化層の存在を念頭においた調査が必要となろう。

・第15b面（図42）

第15b面では、2-2区南端で南北方向に幅約5mの流路を検出した。第15a層以下、遺存するのは調査区南端のみで、2-142河川によって削られているため、詳細は不明である。遺物の出土はなく、時期の特定はできない。

・第16面以下

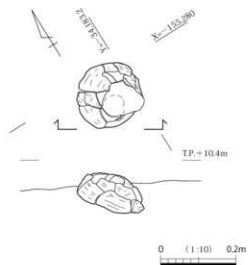
第16層以下は先述のとおり、2-2区南端のみで確認できる。炭化物を多量に含む層と含まない層が互層を成しており、第23層まで確認した。遺物の出土はみられない。第22面で動物の足跡を検出した。

・第14b層出土遺物（図44～53、図版17～21）

図44～54は第14b層から出土した縄文土器、及び石器・石製品である。第14b層からは790点を超える縄文土器と100点余のサマカイト片が出土した。出土した土器は口縁部、底部が残存するものを中心に抽出、また有文の土器について抽出して図化した。図化した縄文土器は120点である。サマカイト片は多く出土したが、ローリングを受けた剥片が多く、製品や二次加工のあるものは極めて少ない。

図44-156～163は浅鉢である。156は摩滅が著しく、調整は不明であるが、157～160はいずれも丹念に内外面を横方向に磨く。滋賀里Ⅲb式。156・159は頸部が長く外反し、内面は口縁部と頸部の境に抉りを入れ、口縁部外面直下に沈線をめぐらす。口縁部はやや厚みを増した断面方形を呈する。159は口径37.2cmに復元できる。157・160は頸部が長く外反して口縁部が屈曲して上方に立ち上がる。

1-1区 遺物出土地点a (図51-226)



1-1区 遺物出土地点b (図48-196)

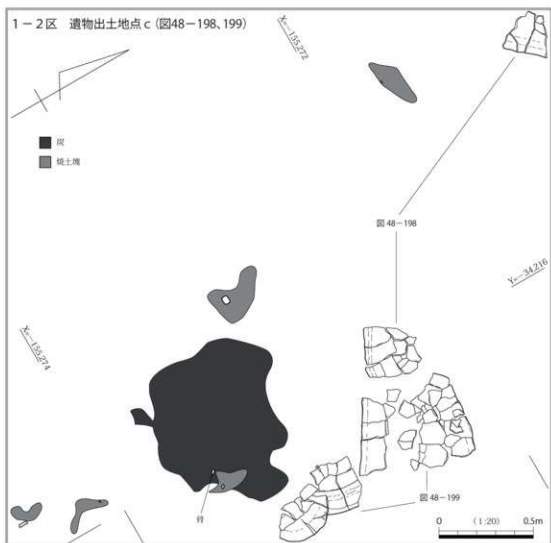
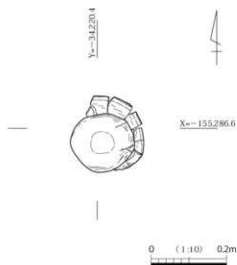


図43 第14b層中 遺物出土状況図 (a・b・c)

160は口縁部外面に沈線をめぐらす。口径41.8cmに復元できる。158は頸部がくの字形に短く屈曲する。口径19.6cmに復元できる。内外面に赤色顔料がわずかに付着している。161・162は椀形を呈する浅鉢である。口縁部は内湾し、内外面を横方向に磨く。161は欠損部に沈線が残る。163は口頸部が短く外反、口縁部は肥厚する。口径15.2cmに復元できる。頸部外面に赤色顔料の付着がみられる。滋賀里Ⅲ b式。

164は深鉢か。口頸部は内側に屈曲して外反し、内面は頸部と口縁部の境を沈線状に挟りを入れて界する。口縁端部には面を有し、口縁部は断面長方形を呈する。口頸部内外面はナデを施す。胴部内面の調整は、下半は板状工具によるナデ、上方は横方向に幅広のミガキである。胴部外面の調整は上半は横方向、下半は縦方向にミガキ、下半はミガキが粗く、ケズリが露出する。滋賀里Ⅲ b式か。165も内面に沈線状の挟りを入れるものである。外面には貝殻条痕を施す。

166はローリングが著しい。口縁部内面に押し沈線文を巡らす。沈線上部には縄文を施しているようだが、摩滅により定かではない。167は内外面ともに横方向に磨く。168は頸部が緩やかに内側に屈曲して外反する。ローリングにより調整は不明。

図45・46は深鉢である。いずれも口縁部が「く」の字に屈曲するものである。調整は外面が粗い貝殻条痕、内面はナデで工具の痕跡を残すものが多い。貝殻条痕は二枚貝によるものと考えられる。胴部との境を強くなるもの、口縁部外面を横方向に磨くものがある。169・172・178は波状口縁を呈し、頸部外面に強いナデを施す。169は胴部外面にケズリを施す。170・174・176・177・179・180も頸部に強いナデを施す。176は口径26cmに復元できる。177は他のものより口頸部の外反が強く、頸部がしまる。口径19.3cmに復元できる。179は口径29.9cmに復元でき、180に比して胴部には丸味を帯びる。180は口径39.2cmに復元できる。頸部は横方向に強いナデを施すが、約6cmの長さでナデの単位が確認できる。171～173・175は口縁部が肥厚するものである。口縁部は横方向にナデを施す。175は色調、胎土が特徴的で灰色を呈し、角閃石を含まない。171・176は外面に、170は内外面に炭化物の付着が著しい。いずれも、滋賀里Ⅲ式の特徴を有する。

図44～46は縄文時代晩期中葉の時期が与えられる。

図47～181～188は浅鉢である。摩滅により調整不明瞭なものもあるが、内外面にミガキを施すものである。185以外は有文である。滋賀里Ⅰ～Ⅱ式。181は外面に口縁と平行する沈線を3条めぐらす。182・183は波状口縁を呈するもので、口頸部は内湾し、端部には面を有する。182は口縁部内面に水平な沈線を1条めぐらす。外面は多条の沈線で施文し、凹点を配する。183は口頸部内面と体部の境に凹線をめぐらす。外面は多条の沈線で施文する。いずれも小片につき文様は不明だが、弧を描くようである。184は口径18.9cmと小型の浅鉢である。口頸部が長く外反し端部は丸く収める。口頸部外面に2条1組の平行沈線による山形文を配する。2片出土しているが、同一個体であろう。186・187は外面を多条の沈線で施文するが、細片で文様の詳細は不明。186は弧を描く3条の沈線を短い縦の線で結ぶ。188は椀形の浅鉢か。口縁に平行する7条以上の沈線をめぐらせ、凹点を4段に配する。185は無紋の浅鉢。内外面はミガキを施す。口頸部は短く、口縁部はわずかに肥厚する。口縁部外面に沈線状に挟りを入れて体部と界する。

図47～189～195・図48～197～199は深鉢である。口縁部がやや内側に屈して直立するものである。滋賀里Ⅰ式。

197～199は全体の形状が分かる個体で199はほぼ完形に復元できる。なお、198・199は図43の地点cから出土した遺物である。197は口径25.3cmに復元できる。口縁端部は面を有し、水平である。



图44 第14b層 出土遺物(1)

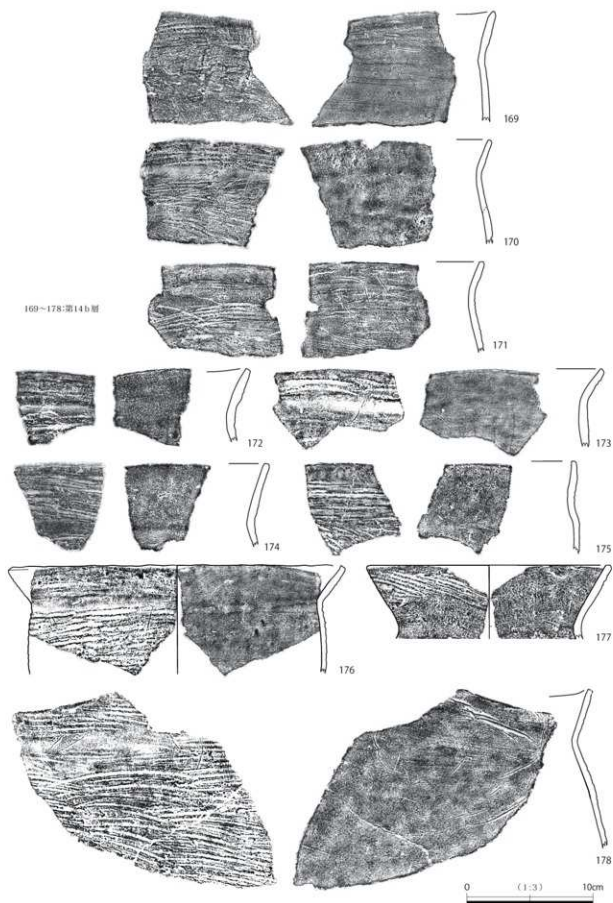


图45 第14b層 出土遺物(2)

胴部は内側に屈曲し、段を有する。外面は段より下部は斜めに、段より上部は横方向に貝殻条痕、口縁部は横方向にナデを施す。内面はナデである。外面には炭化物の付着が著しい。198は口径27.2cmに復元できる。口縁端部は面を有し、水平である。胴部は屈曲し、段を有する。口縁部、胴部の屈曲は197に比して弱い。口縁部の下半と同部の屈曲部上方にそれぞれ3条の沈線がめぐる。外面の調整は、胴部が貝殻条痕で口縁部はナデ、内面は板状工具によるナデ、頸部付近に指オサエ痕が残る。体部外面上半に炭化物の付着が著しい。この炭化物についてAMS法による放射性炭素年代測定を行った。詳細は第4章第2節を参照されたい。191も沈線が伴うものである。口縁部、胴部の屈曲は弱い。口縁部下半、胴部屈曲部上方に3条の沈線をめぐらす。摩滅により調整は不明瞭。内面には種子圧痕が残る。199はほぼ完形。口径39.2cm、底径4.6cm、器高38cmを測り、小さい底部から胴部が大きく開く。口縁部はやや外反し、端部には面を有する。胴部は内側に屈曲し、段を有するが沈線は伴わない。外面の調整は、胴部下半は縦方向に、中程は斜め方向に貝殻条痕を施す。屈曲部より上方は、口縁部の下部には横方向の貝殻条痕が残るが、その下はナデ消す。このナデによってこの範囲は窪んで、やや外湾気味となる。口縁部はナデである。内面は板状工具によるナデで、底部付近には条痕が残る。口縁部付近はナデで、縦長の指オサエ痕が残る。底部は凹底で外周はナデ、中央は未調整である。上部約2分の1の範囲に煤の付着が顕著に認められる。

189・190・192～194も同様の器形を有するものと考えられる。189は摩滅のため調整不明。190

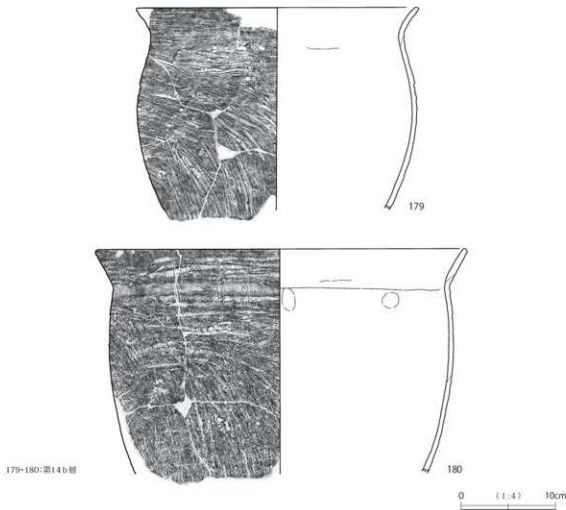


図46 第14b層 出土遺物(3)

は内外面に横方向の巻貝による条痕を施す。193はローリングを受け摩滅が著しい。192・194も摩滅が著しいが192は外面にわずかに条痕が確認できる。口縁部内面は強くなでて、窪む。口縁端部は平らである。

195は胴部片である。段を有し、外面は貝殻条痕を施し、段の下部はなで。内面はナデである。

図48-196は浅鉢である。図43の地点bから出土した。口径19.0cm、器高11.95cmを呈する。椀状の体部から口頸部が大きく内側に屈曲し、長い口頸部が上方外に外反してのびる。口縁部は肥厚する。外面の調整は下半がケズリ、上半は頸部にかけて貝殻条痕、口縁部は横方向にナデである。内面は板状工具によるナデで、底部内外面はナデである。色調は灰黄色を呈する。

図47・48は縄文時代後期末～晩期前葉の時期が与えられる。

図49-200・201は有文の口縁部片である。文様の詳細は不明であるが、200は口縁端部直下、外面に楕円形の刺突文を施す。201は口縁部外面に入組文を施す。いずれも他地域のものと考えられる。関東系か。

図49-202～206は巻貝による扇状圧痕を有する土器である。宮滝式。細片で深鉢、浅鉢の区別が困難な土器片もある。202は口縁部で、半円形の突起部分である。口縁部外面には1条の凹線をめぐらせ、突起部には扇状圧痕を配する。内面には2条の凹線がめぐる。203は頸部付近か。2条の凹線をめぐらせ、扇状圧痕を配する。204・206は深鉢の頸部片と考えられる。204は圧痕部分が欠損し、遺存するのはわずかであるが、3条一組の凹線を二段めぐらせ、それぞれに扇状圧痕を配する。圧痕は粘土塊を貼り付け施している。206も3条以上の凹線を2段にめぐらせ、それぞれに圧痕を配する。圧痕は逆V字状を呈し、扇状圧痕を上下逆に配したものである。205はほぼ全体が復元できる小型の浅鉢である。口径17.9cmに復元できる。口縁部には半円形の突起を4方に配すると考えられるが、突起部の先端が欠損している。突起部には扇状圧痕を配する。断面V字の凹線を口縁部に1条、頸部に2条めぐらせ、扇状圧痕跡をそれぞれに配する。扁平な体部はケズリ後かろくナデを施す。

図49-212は深鉢で、底部は欠損するものの、ほぼ全容が分かるものである。口径39.5cmを測る。巻貝による圧痕を有するものである。頸部は体部から緩やかに内側に屈曲し、口縁部は短く外反する。口縁部内面は頸部との境にV字状の凹線で袂り口縁部と界する。口縁端部には面を有し、断面四角形を呈する。口縁部は山形に盛りあがりのある緩やかな波状を呈する。波頂部は相対する4方に復元でき、巻貝による圧痕がみられる。他の巻貝圧痕が扇状を呈しているのに対し、横長の窪みといったものである。頸部には2条の凹線をめぐらせ、口縁部と同様、貝殻による縦長の圧痕を配する。外面の調整は、胴部は貝殻条痕、口頸部はナデである。内面は板状工具によるナデである。胎土には角閃石を含まず、灰黄色を呈する。西部瀬戸内地方・岩田第四類に類似しており、滋賀里式に併行する。

図49-207は口縁波頂部の基部で、縦位の沈線を施す。

図49-208～211、図50-213～225は凹線を有するものである。宮滝式。

208～211・213・217・224は口縁部である。208は口縁部外面に1条の凹線をめぐらす。凹線というより沈線に近い。209は波状口縁と考えられる。口縁端部には面を有する。口縁部下半に3条の凹線をめぐらす。外面は貝殻条痕、内面は条痕後ナデを施す。210は深鉢。口縁部が内側に屈曲して上方外にのび、胴部も屈曲する。口縁部には2条の凹線をめぐらせ、屈曲部にも2条以上の凹線をめぐらす。口縁部は器壁が薄い。211は口縁部が屈曲して外湾する。口縁部下半に2条の凹線をめぐらす。調整は外面がナデ、内面が条痕である。213は口縁部が内側に明瞭に屈曲する。残存している部分では口縁部

は短い、波状口縁と考えられる。磨滅が著しいが、外面に貝殻条痕が残る。217は内湾する口縁部で端部は丸くおさめる。腕状を呈するものか。口縁部直下に2条の凹線をめぐらす。224は口縁部が内側に屈曲し、やや外反して上方にのびる深鉢である。口縁部外面には端部直下に1条、口縁部下半に2条の凹線をめぐらす。胴部には3条の凹線をめぐらし、凹線付近で緩やかに屈曲している。凹線の内部には条痕と考えられる細かいスジが明瞭に残る。外面は口縁部下に横方向に貝殻条痕、下部はナデ、口縁部はナデである。内面は斜め方向に貝殻条痕、口縁部はナデで縦長の指オサエ痕が残る。

214～216・218～223・225は頸胴部片である。浅鉢、深鉢の区別は困難であるが、215・216・220～223は深鉢と考えられる。214は図上、上部が屈曲部となり、屈曲部外面に凹線が1条確認できる。下部は凹線で欠損している。外面は条痕のちナデ、内面は板状工具によるナデである。直径1cmの穿孔がある。穿孔は内外面より穿つ。補修孔か。215は上部が外に開き、外面に3条の凹線を施し、内外面は巻貝による貝殻条痕が明瞭である。凹線より上部はナデである。216は上部が凹線で欠損しており、少なくとも外面に2条の凹線がめぐる。内外面はナデである。218は2条の凹線が確認できる。219は上部がくの字に屈曲するもので、上部に2条の凹線がめぐる。磨滅により調整は不明である。220は外面の凹線部分で段を有するもので、上部に3条の凹線、下部に2条の凹線が確認できる。その間は貝殻条痕が残る。内面はナデ。221はローリングを受け、磨滅が著しい。2条の凹線が確認できる。222は器壁が薄い。外面に3条の凹線をめぐらせる。内面は条痕のちナデである。223は外面に3条の凹線をめぐらせる。内面はナデである。225は丸みを帯びた胴部片で、上部に凹線が2条確認できる。調整は、外面は下部が斜行、上部が横方向の貝殻条痕で、内面は板状工具によるナデである。

図49・50は縄文時代後期後葉の時期が与えられる。

図51は無文の土器である。

226～228は鉢である。226は口径16.5cm、器高8.8cmを測る。図43の地点aから出土した。内外面とも巻貝による条痕を施す。口縁部はナデを施す。227は口径6.4cmに復元できる小型の鉢である。口縁部は内湾する。内外面に巻貝による条痕を施す。228も小型の鉢か。口頸部がくの字に屈曲する。内外面の調整はナデである。

229～241は口縁部が遺存するものである。

229は磨滅しているが、調整はナデか。器種、時期ともに不明である。

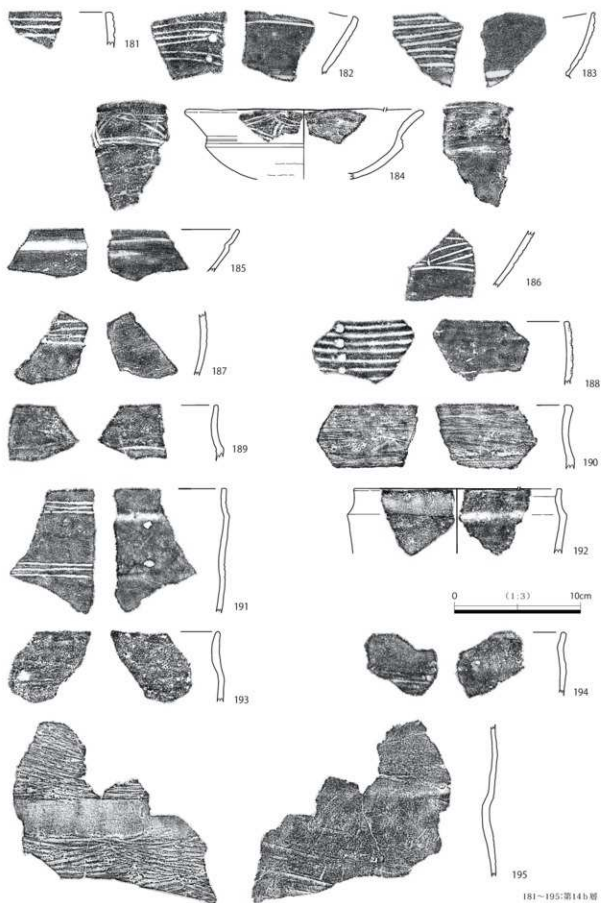
230・231は鉢。時期は不明。230の調整は外面が貝殻条痕で、内面は条痕のちナデである。231は器壁が薄く、口縁が大きく開く。口縁端部には面を有する。

232・233は長く直線的に外反する口縁部を呈する大型で広口の深鉢である。後期中葉～晩期中葉。232は内外面の調整に使用した原体が異なり、内面がより細かい。内面の調整は折り返して走行していることが分かる。233は口縁部がやや肥厚するものである。外面の調整は口縁部が横方向に、胴部が斜め方向に貝殻条痕を施す。内面は口縁部内面に横方向に条痕が残り、下半はナデである。

234・235・236は鉢か。口縁部はやや内湾する。234・235は外面の器壁のみ荒れる。236は口縁端部に丸みを帯びる。

237は深鉢である。口径30.8cmに復元できる。口縁部はやや内湾し全体に丸みを帯び、砲弾形を呈する。器壁は0.5～0.6cmと薄い。外面上部は横方向に、下部は斜め方向に巻貝による条痕を施す。内面は板状工具によるナデで平滑に仕上げる。

238～241は鉢か。238はやや内湾する口縁部を呈する。内外面の調整は丁寧なナデである。239



181~195:第14b層

图47 第14b層 出土遺物(4)

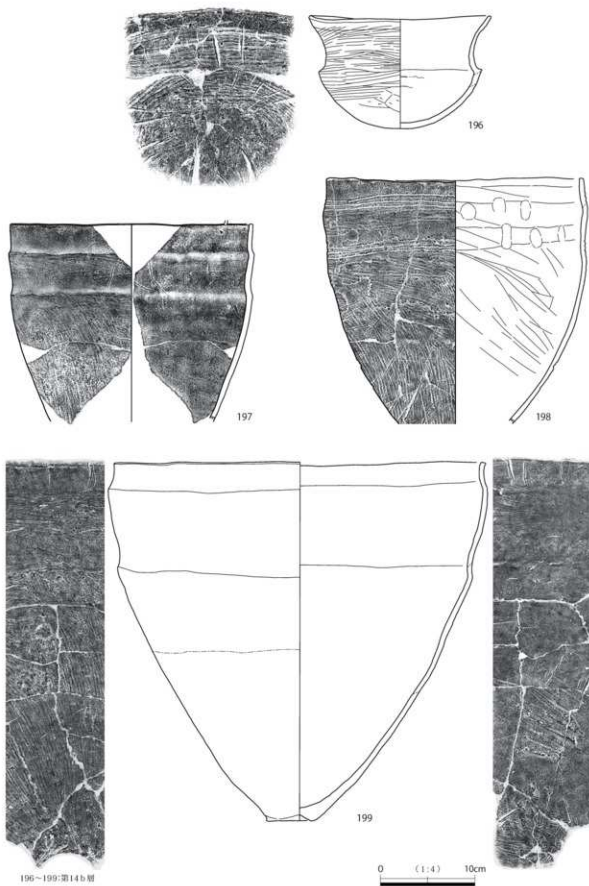


图48 第14b層 出土遺物(5)

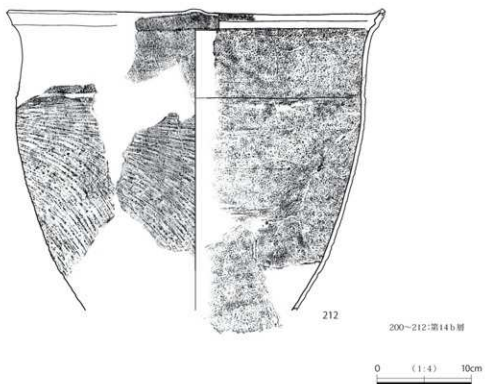
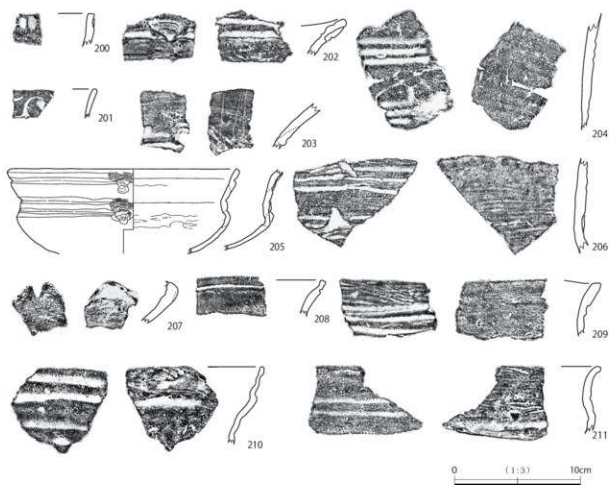


图49 第14b層 出土遺物(6)

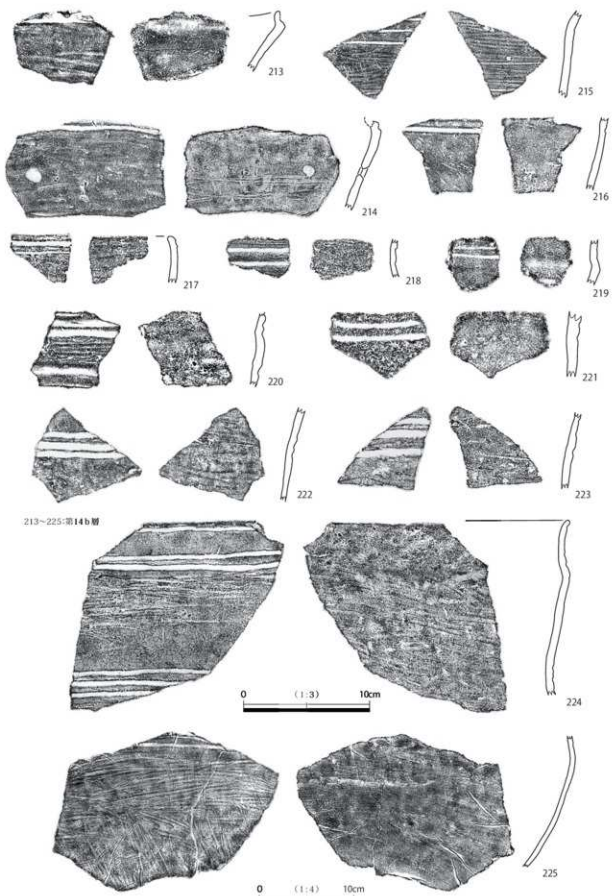


图50 第14b層 出土遺物(7)

は屈曲気味に内湾し、口縁端部が尖る。内外面は工具によるナデである。

240・241は直線的にのびる口縁部を呈する。240はローリングが著しい。241は口縁部直下の内面に沈線がめぐり、内外面工具によるナデを施す。

図51は無文の土器であり、時期の詳細は不明であるが後期中葉～晩期に収まるものと考えられる。

図52～242～250は底部片である。242は底径4.6cmの凹底である。底部外周、幅0.5cm程度は丁寧にナデ、中は未調整である。胴部外面は貝殻条痕、内面は板状工具によるナデである。後期中葉。243は0.28cmと小さい凹底である。底部周縁に豆粒大の圧痕が4箇所確認できる。胴部外面は貝殻条痕で、底部から2～3cm程度は条痕が及ばず、粗いケズリが確認できる。体部内面は板状工具によるナデで、工具の当たり痕が残る。内面には煤が付着する。後期中葉。245～248も凹底である。後期中葉であろう。245は底径4.05cmの凹底であるが、断面三角形に外に広がる。底部外周をなでる。246は底径4.1cmを測り、底部外周をなでる。247は底径5.8cmを測り、底部外周はなでる。胴部外面の調整はケズリで、内面は板状工具によるナデである。248は底径4.5cmを測り、胴部外面の調整は条痕のちナデ、内面は板状工具によるナデである。244は底径3.2cmと小さく平らな底部に体部が大きく広がる。

249、250は平底である。後期前葉以前。249は底径11.2cm、250は12.3cmと前者より大きい。胎土に粗粒砂を多混し、249は特に粗い。250は底部内面に幅の狭い工具によるナデを施す。

第14b層からは他に縄文時代早期から後期中葉の土器が出土している。ただし、これら土器はいずれも細片であり、ローリングを受けた個体も多い。

図53-251～256は後期中葉、図53-257～262は後期前葉の土器である。

251は深鉢口縁部である。口縁部に凸帯を貼り付け、凸帯の上下、及び下位に沈線をめぐらす。一乗寺K式。252は無文深鉢である。胴部内外面は貝殻条痕を施す。内面に種子圧痕跡が残る。一乗寺K式～元住吉山I式。253は深鉢口縁部である。外面は貝殻条痕、内面はナデで平滑に仕上げる。元住吉山I式。254は直線的な口縁部で、外面に沈線による区画文を施す。浅鉢あるいは注口土器か。北白川上層式3期～元住吉山I式。255は深鉢口縁部で3条の沈線内刺突文を施す。色調は灰黄色を呈する。256は体部片で多重沈線による施文を施し、沈線間には縄文がみられる。斜め方向の沈線の末端には刺突文を施す。色調は黄灰色を呈する。255、256は北白川上層式3期。

257は口縁部直下の外面に横位の沈線が2条めぐり、その間に縄文がみられる。258は2条の沈線を施すが、縄文はみられない。259～262は縄文が施される鉢である。259、260は口縁部外面に縄文を施す。260は口縁部と体部外面にも縄文を施し、頸部の縄文はなで消す。261は器壁が薄く、体部に羽状縄文を施す。262は肥厚した口縁部に縄文を施す。259は北白川上層式2・3期。他は北白川上層式1・2期。

図53-263～275は早期～後期初頭の土器でいずれもローリングが著しい。

263は口縁部を内側に肥厚させる。外面は植物質の材料による条痕を施す。色調は黄灰色を呈する。中津式。後期初頭。

264～268は垂下する沈線で施文された深鉢片である。264は沈線間に縄文がみられる。265は2条の斜め方向の沈線、縦方向に一条の沈線を施す。266はローリングが著しい。3条の沈線を施す。外面に種子の圧痕が認められる。267は沈線、蛇行沈線文を施す。色調は灰黄色を呈する。268は縄文を施し蛇行沈線により施文する。269は外面に縄文を施す。270は口縁部と胴部を隆帯で画すもので、口縁部は欠損するが、沈線による区画文が描かれている。隆帯を挟んで縄文の施文方向が異なっている。

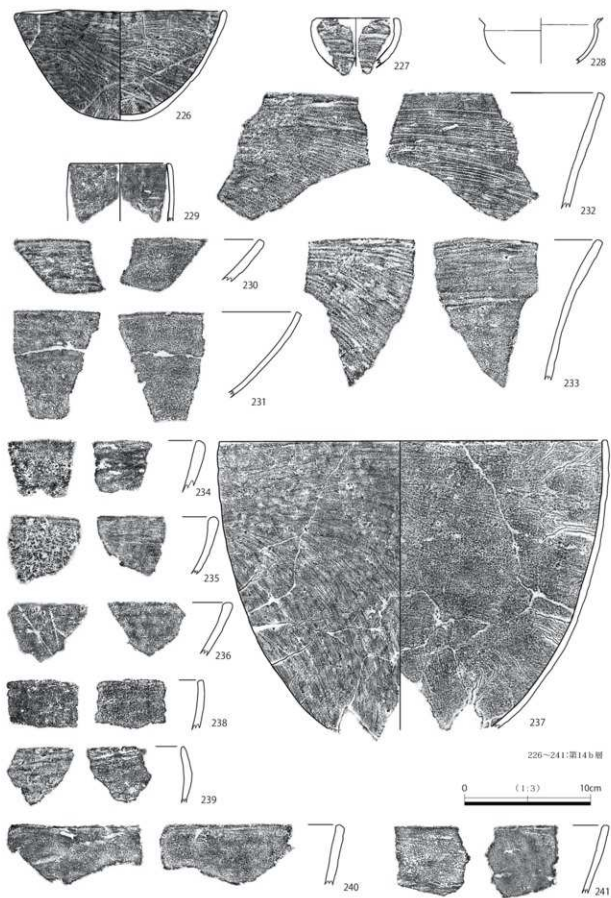


图51 第14b層 出土遺物(8)

胎土には粗粒砂を多く含む。271・272は沈線による区画文を有する深鉢口縁部である。264～272は北白川C式。中期末。

273は口縁部の下に突帯を貼り付ける深鉢。色調は灰白色を呈する。船元Ⅰ・Ⅱ式。中期中頭。

274は押型文土器である。早期。275は山形押型文か、早期の可能性ある。いずれも、胎土に角閃石を多量混しており、生駒西麓産である。

・第14b面・第14b層 出土石器・石製品 (図54・図版22)

図54は第14b面・第14b層から出土した石器・石製品である。第14b層からは103点を超えるサヌカイト片が出土したが、製品や二次加工のある剥片はほとんどなく摩滅したものが多く、図化したのは3点である。276は横長の剥片である。最大幅7.0cm、最大長3.1cm、最大厚1.1cmを測る。翼状剥片か。277は石匙である。裏面には自然面が大きく残る。最大長5.6cm、最大幅7.35cmを測る。278は楔形石器である。ローリングによる摩滅が著しい。相対する二片に潰れが認められる。最大幅3.1cm、最大長3.95cmを測る。279は石皿である。最大長27.2cm、最大幅14.5cm、最大厚9.8cmを測る。欠損しているが、中央が楕円形状に凹み、擦痕が確認できる。被熱した痕跡が裏面から側面にかけてみられる。

第14b層(2-142河川)からは縄文時代後期後葉～縄文時代晩期中葉の遺物が主体として出土しており、特に滋賀里Ⅰ～Ⅲ式が中心である。その他、縄文時代早期～後期中葉の土器も細片ではあるが含まれている。上流に位置する大泉遺跡では縄文時代早期～中期、後期、晩期の遺物が出土しており、丘陵縁辺から扇状地上に集落が営まれている。これとほぼ同じ時期の遺物が今回の河川では出土しており、この集落の遺物を含んでいると考えられる。多く出土したサヌカイトはローリングを受けるものが多く、同様に流されたものと考えられる。

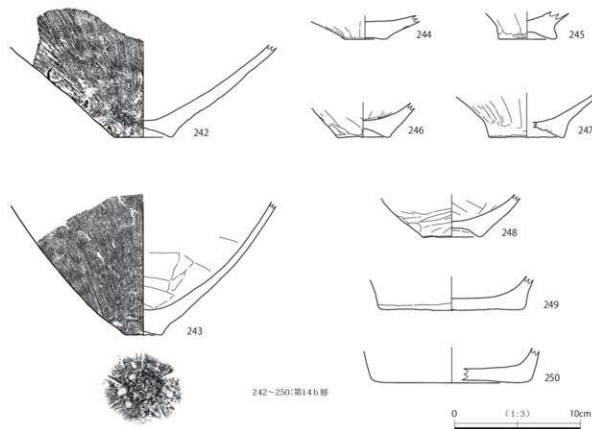


図52 第14b層 出土遺物(9)

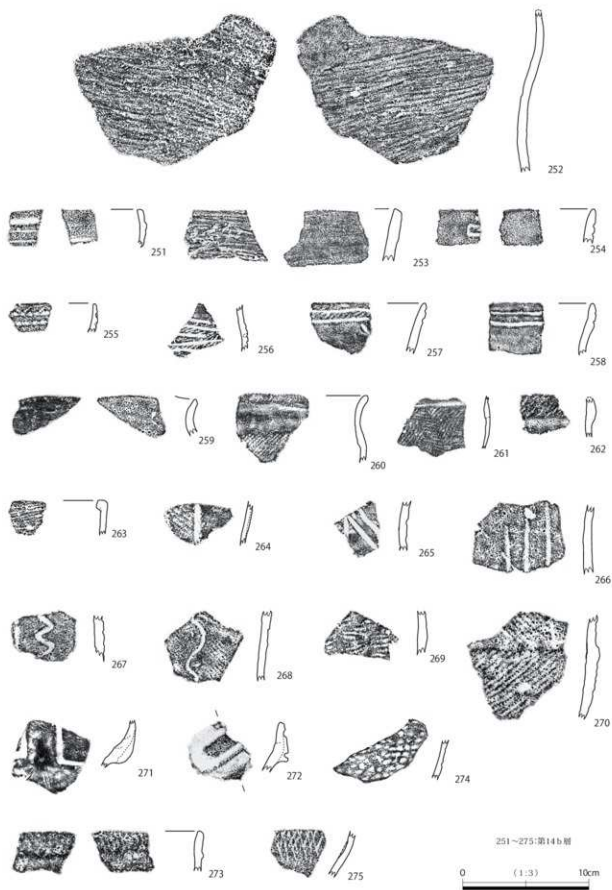


图53 第14b層 出土遺物 (10)

小結

第15 a面では、縄文時代後期後葉～縄文時代晩期中葉の河川を検出した。河川の中層は滋賀里Ⅰ～Ⅲ式の時期が与えられ、その間、土砂の堆積が安定している段階には人々の活動痕跡が認められた。河川埋没後、明瞭な黒色帯は形成されておらず、人為的な遺構は希薄ではあるが、焼土塊を含む土坑やほぼ完形の土器が出土しており、恒常的ではないものの、人々の活動が及んでいることが分かる。上流側の大泉遺跡では縄文時代早期以降、晩期にかけて集落が営まれており、関連が考えられる。

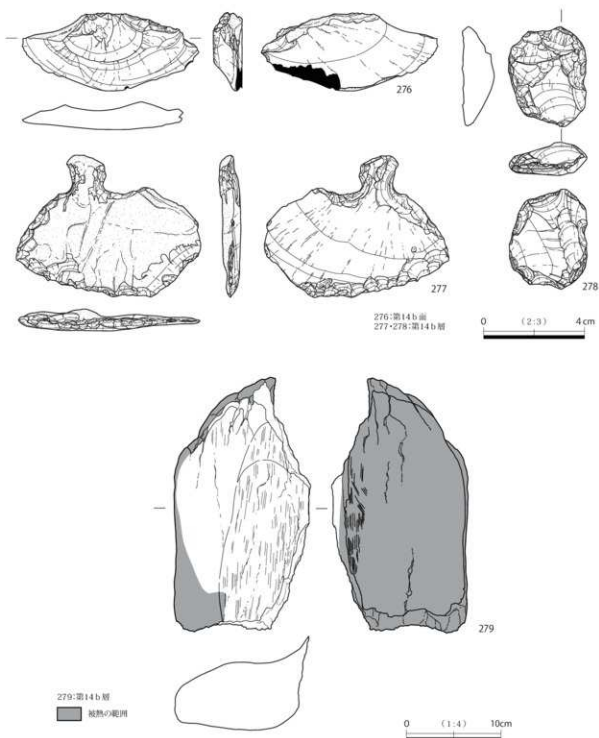


図54 第14 b面・14 b層 出土土器・石製品

第4章 自然科学分析

今回の調査に関連して、自然科学分析を実施したので、第1節、第2節で報告する。

第1節は中世の耕作面である第3-1a面及び、第4a面で検出した畠の栽培作物を明らかにするために、耕作土をサンプリング、水洗作業を行って得た種実の同定報告である。第3-1a面では調査区全域が畠として利用されていたのに対し、第4a面では水田、及び畠が混在する異なった状況がみられた。第4a面では水田部分の耕作土についてもサンプリングを行い、同様に種実同定を補完的に行った。サンプリング位置は図8・10に示している。第3-1a層は上部に灰色シルトをすじ状に含んでいるが、これも含めて採取している。また第3-2a層とは密な掘りわけが困難であったため、下層の土壌が若干含まれている可能性がある。

採取された種実は栽培作物のみではなく、周辺の植生を探る上でも良好な試料となった。栽培作物は第3-1a層ではイネ、オオムギ、コムギなどの穀類、ソバ、ダイコン属が、第4a層では畠からイネ、オオムギ、コムギなどの穀類、マメ科（アズキ類）、ナスが、水田からはイネ、オオムギが確認された。注目できる点は、イネの粳、ソバ、ナスを除いて、炭化した種実遺体が含まれている点である。恩智川下流域の東大阪市、八尾市にまたがる池島・福万寺遺跡では、当遺跡の第4a面とほぼ同時期である14～15世紀後半の畠（註2）について、大型植物遺体の同定が行われた（文献29）。オオムギ、コムギ、イネ、ウリ類、マメ類が確認され、ウリ類以外は当遺跡と同様炭化しており、畠で栽培された作物が火を受けた可能性と肥料等のため二次的に持ち込まれた可能性が指摘されている。また、15世紀末～16世紀中頃、18世紀の畠でも同様の状況を確認することができる（文献30）。今回の分析では第1節で指摘されるように、オオムギ粉が付着のものが炭化していること、栽培種以外の種類にも炭化した種実が確認されることから、耕作地で栽培植物が火を受けた可能性がより高いのではないだろうか。耕作地からは先端が炭化した木端などがままするが、今後、耕作地での火の使用について、どういったものがあるのかの検討も必要であろう。

第2節では第15a面で検出した2-142河川より検出した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。試料1は河川の上層、試料2、3は中層の堆積物中の材・葉、試料4は中層でも下位の層順から出土した滋賀里Ⅰ式の深鉢付着煤である。河川堆積層の実年代を明らかにするとともに、土器型式と実年代の対応を図ることを目的とするものである。試料の採取地点は図5に試料1～3を示した。また、図48-198の深鉢付着煤が試料4となる。

試料1～4の値は縄文時代後期末～晩期中葉の暦年代を示し、2-142河川（上～下層）は縄文時代後期末～晩期の河川であることが分かった。第3章で詳細は記述したが、2-142河川中層は出土遺物より、滋賀里Ⅰ式～滋賀里Ⅲ式の時期が与えられ、この間北東から南西方向に側方に移動している。滋賀里Ⅰ式深鉢付着煤である試料4はその中でももっとも古い年代を示しており、河川の堆積状況と一致するとともに、滋賀里Ⅰ式の暦年代資料として意味あるものとなった。また、上層の試料1の年代より、河川2-142は縄文時代晩期中葉の間には埋没し、放棄流路化したものと考えられる。今回は河川下層に対応する炭素年代測定は行っていない。今後の良好な試料が望まれる。

（註2）この畠を検出した遺構面の年代について、池島地区・福万寺地区の中世～近世の層序対応を再検討した井上は15世紀中頃～後半としている（文献3）。

第1節 大型植物遺体同定分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

調査地点の位置および遺構図を図8・10に示す。試料は、2-1区の第3-1a面の畝と第4a面の畝と水田の堆積物(畝は畝部分)から水洗選別により得られた大型植物遺体試料4点である。各試料の詳細を以下に示す。

2-1区の第3-1a面の畝(分析試料番号1,3,4,5)、第4a面の畝(分析試料番号7,9)、水田(分析試料番号11,12)に分けて水洗選別済試料が存在する。水洗選別は大府府文化財センターが実施し、試料には複数の分類群、個数が確認される。本分析では、分析試料番号1,3,7,9は優先度高とし、全ての分類群の抽出同定を実施する。分析試料番号4,5,11,12は、優先度低とし、木本、栽培種、新たに確認された分類群の抽出同定を実施する。なお、分析試料番号4,9,11には複数の試料が存在するため、便宜上枝番を付している。各試料の詳細は、結果とともに表1・2に示す。

2. 分析方法

試料を篩別後、双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な大型植物遺体を拾い出す。大型植物遺体の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等を参考に実施し、状態別(完形、破片(半分以下)、炭化)の個数を数えて結果を一覧表と図で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間には、ハイフォンで結んで表示する。大型植物遺体以外に確認された遺物は、一覧表の下部にまとめて表示する。分析後は、大型植物遺体を約70%のエタノール溶液を入れた容器中で保存する。

3. 結果

(1) 大型植物遺体の出土状況

結果を図55、表1・2に示す。裸子植物2分類群(針葉樹のクロマツ、マツ属複雑管束亜属)2個の短枝・葉と、被子植物68分類群(広葉樹のカジノキ、フサザクラ、サカキ、ケイチゴ属、アカメガシワ、センダン、キブシ、タニウツギ属、草本のオモダカ属、オモダカ科、ヒルムシロ属、イトトリゲモ、サガミトリゲモ、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、イボクサ、イネ、オオムギ、コムギ、スズメノヒエ属、イネ科、アゼスゲ類、ヌカスゲ類、スゲ属、テンツキ属、ホタルイ近似種、イヌホタルイ近似種、ホタルイ属、カヤツリグサ属(2型)、カヤツリグサ科、カラムシ属、ギシギシ属、イヌタデ近似種、ミゾソバ、ヤナギタデ近似種、ポントクタデ近似種、タデ属、ソバ、スベリヒユ、ハコベ類、ナデシコ科、アカザ科、ヒユ属、タガラシ、キンボウゲ属、ダイコン属、アブラナ科、キジムシロ類、マメ科(アズキ類、野生種2型)、クサネム、カタバミ属、トウダイグサ、エノキグサ、スミレ属、カラスワリ、ツボクサ近似種、アカネ科、キュウリグサ属、イヌコウジュ近似種、イヌコウジュ属-シソ属、トウバナ属、ナス、ヒシモドキ、タカサブロウ、ヤブタバコ)1183個の種実の、合計1185個が抽出同定された。94個は同定ができなかったが、同一分類群と考えられる84個をA、3個をBとしている。

その他に、水生シダ類のサンショウモの大胞子嚢と考えられる1個と、車軸藻類のシャジクモ科(2型)の卵胞子が7個、炭化した木の芽、炭化材、蘚苔類の茎・葉、菌類の菌核、昆虫類、巻貝類などが

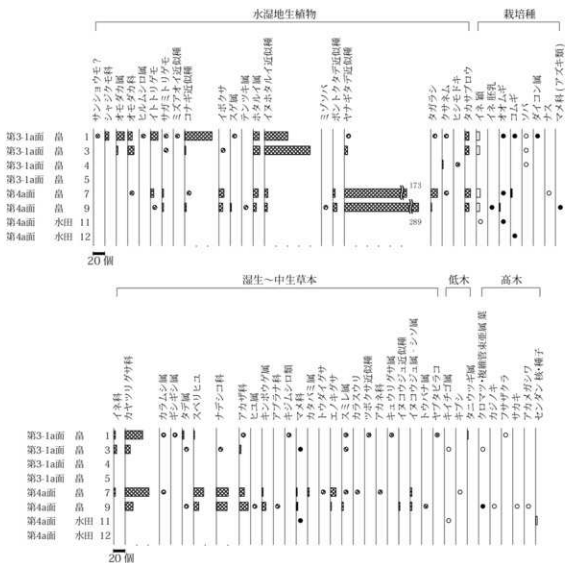
表1 大型植物遺体同定結果 (1)

分類群	部位	状態	1	3	4	5	7	9	11	12	備 考		
			1	1	1	2	-	1	2	3		1	2
			第3-1a 面				第4a 面					裏面	
木本													
クロマツ	短枝・葉	破片	炭化	-	-	-	-	1	-	-			
マツ属植物葉実帯属	短枝・葉	破片	-	-	-	-	-	-	-	-			
カシノキ	核	完形	-	1	-	-	-	-	1	-			
フサヤカラ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-			
サカキ	種子	破片	-	-	-	-	-	-	1	-			
キイチゴ属	核	完形	-	1	-	-	-	-	-	-			
アカメギシワ	種子	破片	-	-	-	-	-	-	1	-			
センダングサ	核	破片	-	-	-	-	-	-	-	2			
	種子	破片	-	-	-	-	-	-	-	1			
キブシ	種子	完形	-	-	-	-	1	-	-	-			
タニウツギ属	種子	破片	-	2	-	-	-	-	-	-			
草本													
オモダカ属	果実	完形	-	14	1	-	-	-	-	-			
		破片	-	-	2	-	-	-	-	-			
オモダカ科	種子	完形	-	8	11	-	-	1	-	-			
ヒルムシロ属	果実	完形	1	-	-	-	-	-	-	-			
イトトリゲモ	種子	完形	2	6	-	-	-	-	1	-			
		破片	-	5	-	-	6	-	-	-			
サガミトリゲモ	種子	完形	-	1	1	-	-	-	1	-			
		破片	-	-	-	-	3	-	2	-			
ミスアオイ近似種	種子	完形	-	1	-	-	-	-	-	-			
コナネ近似種	種子	完形	-	48	2	-	1	-	3	-			
イボクサ	種子	完形	-	1	-	-	7	-	5	-			
		破片	-	-	-	-	2	-	2	-			
イネ	穎 (基部)	破片	-	-	2	-	3	-	1	1			
	穎	破片	1	5	4	-	4	-	5	-			
	胚乳 (基部)	破片	-	-	-	-	-	-	1	-			
オオムギ	穎・胚乳	破片	炭化	-	-	-	1	-	1	1	9-3:長さ4.9mm, 幅2.3mm, 厚さ1.6mm		
		破片	炭化	-	-	-	-	-	-	1	残存長3.5mm, 幅2.5mm, 厚さ2.2mm		
オオムギ?	胚乳	完形	炭化	1	-	-	-	-	-	-			
コムギ	胚乳	完形	炭化	-	2	-	-	-	-	-			
コムギ	胚乳	完形	炭化	1	-	-	3	-	-	1	12:長さ4.1mm, 幅2.8mm, 厚さ1.8mm		
スズメノヒエ属	果実	完形	-	1	-	-	-	-	-	-			
イネ科	果実	完形	炭化	1	-	-	-	-	-	-			
	果実	完形	-	2	3	-	2	-	2	-	同種		
		破片	-	1	-	-	1	-	-	-			
アゼスヤ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	1	-			
ヌカスゲ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	1	-			
スヤ属 (3面型)	果実	完形	-	1	-	-	-	-	-	-			
ナンツクキ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	1	-			
ホタルイ近似種	果実	完形	-	2	-	-	-	-	-	-			
イヌホタルイ近似種	果実	完形	-	38	78	-	6	-	5	-			
		破片	-	3	2	-	-	-	-	-			
ホタルイ属	果実	完形	-	4	6	-	8	-	5	-			
		破片	-	5	6	-	1	-	1	-			
カヤツリグサ属	果実	完形	-	1	1	-	2	-	1	-			
カヤツリグサ属 (表面突起)	果実	完形	-	2	-	-	-	-	-	-			
カヤツリグサ科 (2面型)	果実	完形	2	22	6	-	38	1	-	12			
		破片	-	4	2	-	2	-	-	-			
カラムシ属	果実	完形	-	1	-	-	1	-	-	-			
ギンギン属	果実	完形	-	1	-	-	-	-	-	-			
イヌタデ近似種	果実	完形	-	1	-	-	-	-	1	-			
ミゾノハ	果実	完形	-	-	-	-	-	-	1	-			
ヤナギタデ近似種	果実	完形	-	1	4	-	72	-	-	135			
		破片	-	-	2	-	101	3	-	151			
ボントクタデ近似種	果実	完形	-	-	-	-	4	-	4	-			
		破片	-	-	-	-	-	-	3	-			
タデ属 (2面平頭)	果実	破片	-	3	-	-	-	-	-	-			
ソバ	果実	破片	-	1	1	-	-	-	-	-	1/3片未満		
スベリヒユ	種子	完形	-	2	-	-	10	1	-	8			
		破片	-	-	-	-	8	-	-	-			
ハコベ属	種子	完形	-	-	-	-	1	-	1	2			
ナデシコ科	種子	完形	-	1	-	-	20	-	15	-			
アカアザミ	種子	完形	-	3	-	-	6	-	16	-			
		破片	-	1	-	-	3	-	-	-			
ヒユ属	種子	完形	-	-	-	-	-	-	1	-			
タガラシ	果実	完形	-	1	-	-	4	-	2	-			
		破片	-	-	-	-	8	-	-	-			

表2 大型植物遺体同定結果 (2)

分類群	部位	状態	1	3	4	5	7	9	11	12	備 考		
			1	1	1	2	-	1	2	3		1	2
			第3-1a 面					第4a 面					
高					水田								
キンボウグ属	果実	完形	-	-	-	-	2	-	5	-	-		
		破片	-	-	-	-	-	-	2	-	-		
キンボウグ属?	果実	完形	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
ダイコン属	種子	完形	炭化	-	1	-	-	-	-	-	長さ2.7mm, 径2.5mm		
アブラナ科	種子	完形	-	-	-	-	-	-	1	-	-		
キジムシロ類 (雑草科上)	核	完形	-	1	-	-	-	-	-	-	現存長3.9mm, 幅3.4mm, 半分厚1.8mm		
マメ科 (アズキ類)	種子	破片	炭化	-	-	-	-	-	1	-	-		
マメ科 (アズキ類)?	種子	破片	炭化	-	2	-	-	-	-	-	-		
マメ科 (野生種: 楳門体)	種子	完形	炭化	-	1	-	-	-	1	-	長さ1.5mm, 径1.2mm, 鞘長0.7mm, 鞘幅0.2mm		
マメ科 (野生種: 腎形)	種子	完形	炭化	-	-	-	2	-	2	1	-		
マメ科?	種子	完形	炭化	-	-	-	-	-	3	-	長さ2.0mm, 幅1.2mm, 鞘径0.5mm		
		破片	炭化	-	-	-	-	-	8	-	-		
クサキム	果実	破片	1	-	2	-	1	-	-	-	-		
カタハミ属	種子	完形	-	-	-	-	3	-	-	-	-		
トウダイグサ	種子	破片	-	-	-	-	1	-	-	-	-		
エノキグサ	種子	完形	-	-	-	-	2	-	2	-	-		
		破片	-	-	-	-	8	-	-	-	-		
スミレ属	種子	完形	1	1	-	-	1	-	2	-	-		
		破片	-	-	-	-	-	-	1	-	-		
カラスウリ	種子	破片	-	-	-	-	1	-	-	-	-		
ツボクサ近縁種	果実	完形	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
アカネ科	核	完形	-	-	-	-	1	-	-	-	-		
キュウリクサ属	果実	完形	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
イヌコウジュ近縁種	果実	完形	-	-	-	-	-	-	2	-	径1.0mm, 1.1mm		
イヌコウジュ属・シツ属	果実	完形	-	-	-	-	1	-	1	-	径1.1mm		
		破片	-	-	-	-	2	-	2	-	-		
トウバナ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	1	-	-		
ナス	種子	完形	-	-	-	-	1	-	-	-	長さ2.9mm, 幅3.4mm, 厚さ0.6mm		
ヒシモトキ	果実	完形	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
タカサブドウ	果実	完形	1	4	7	-	9	-	3	-	-		
		破片	-	2	-	-	1	-	4	-	-		
ヤブタビラコ	果実	完形	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
シダ類													
サンショウモ?	大胞子類?	完形	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
車輪藻類													
シャジクモ科 A (小型)	卵胞子	完形	-	5	-	-	-	-	-	-	-		
シャジクモ科 B (大型)	卵胞子	完形	-	2	-	-	-	-	-	-	-		
不明													
A	完形	-	2	-	-	-	39	-	31	-	-		
B	完形	3	-	-	-	-	11	2	4	-	-		
他	完形	-	1	1	-	-	-	-	-	-	交差		
合計													
草本			-	3	2	-	-	1	1	-	3	計14個	
草本			10	200	159	9	-	372	15	4	432	計1229個	
合計 (草本+草本)			10	203	161	9	-	373	16	4	435	計1243個	
シダ類・車輪藻類			-	8	-	-	-	-	-	-	19	計8個	
不明			3	3	1	-	-	50	2	-	35	計94個	
その他													
炭化材	炭化		-	+	+	-	-	+	+	+	+	-	
芽	炭化		-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	
薪炭類の茎・葉			-	-	+	-	-	-	-	-	+	-	
葉核			-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	
昆虫類			-	+	+	-	-	+	+	+	+	-	
香豆類			-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	
分析優先度・方法			1*			2*		1*			2*		

注) *1:優先度高。全ての分類群を抽出同定。*2:優先度低。草本、栽培種。新たに確認された分類群を抽出同定。



棒グラフのうち、網掛けは非炭化、黒塗りが炭化個体を示す。○●は2個未満を示す。
 なお、分析試料 4.5, 11, 12 については、主に栽培種と木本を対象としている。

図55 大型植物遺体群集

確認された。

大型植物遺体の出土個数は、第3-1a面の畝(分析試料番号1, 3, 4, 5)が379個、第4a面の畝(分析試料番号7, 9)が806個、水田(分析試料番号11, 12)が8個である。栽培種は、イネの穎の破片が26個(第3-1a面の畝、第4a面の畝、水田)、炭化した胚乳が1個(第4a面の畝)、オオムギの炭化した穎・胚乳が4個(第4a面の畝、水田)、炭化した胚乳が1個(第3-1a面の畝)、コムギの炭化した胚乳が5個(第3-1a面の畝、第4a面の畝、水田)、ソバの果皮片が3個(第3-1a面の畝)、ダイコン属の炭化した種子が1個(第3-1a面の畝)、ナスの種子が1個(第4a面の畝)、マメ科(アズキ類)の炭化した種子が1個(第4a面の畝)の、計43個が確認された。以下に、試料別出土状況述べる。

〈第3-1a面 畝〉

・分析試料番号1

栽培種は、イネの穎が6個、オオムギが1個、コムギが1個、ソバが1個、ダイコン属が1個確認された。

栽培種を除いた分類群は、木本3個、草本188個から成り、圧倒的な草本主体の組成を示す。草本は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が多く、サンショウモ?、シャジクモ科、オモダカ属、オモダカ科、ヒルムシロ属、イトトリゲモ、サガミトリゲモ、ミズアオイ近似種、コナギ近似種、スゲ属、ホタルイ属、ホタルイ近似種、イヌホタルイ近似種、ヤナギタデ近似種、タガラシ、クサネム、タカサブロウなどの水湿地生植物が全体の約3/4を占める。イヌホタルイ近似種を含むホタルイ属が最多(52個)で、コナギ近似種が次ぐ(48個)。その他に、イネ科(炭化個体を含む)、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、カラムシ属、ギシギシ属、タデ属、スベリヒユ、アカザ科、キジムシロ類、スマレ属、ツボクサ近似種、キュウリグサ属、ヤブタバコなどの湿った場所～やや乾いた場所に生育する分類群が確認された。木本は、落葉高木のフサザクラ、落葉低木のタニウツギ属が確認された。

・分析試料番号3

栽培種は、イネの類が6個、ソバが1個確認された。栽培種を除いた分類群は、木本2個、草本154個から成り、分析試料番号1の組成に似る。水湿地生植物が全体の8割以上を占め、オモダカ属、オモダカ科、サガミトリゲモ、コナギ近似種、イボクサ、ホタルイ属、イヌホタルイ近似種、ヤナギタデ近似種、タカサブロウなどが確認された。分析試料番号1と同様にイヌホタルイ近似種を含むホタルイ属が最多(92個)であるが、コナギ近似種が少ない点が異なる。湿生～中生植物は、スズメノヒエ属、イネ科、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、イヌタデ近似種、ナデシコ科、アカザ科、マメ科(炭化)、スマレ属が確認され、分類群数、個数ともに分析試料番号1よりも少ない。木本は、常緑高木のマツ属複雑管束亜属、常緑または落葉低木のキイチゴ属が確認された。

・分析試料番号4

栽培種は、ソバの果皮片が1個確認された。その他に、湿生草本のクサネムが2個、水生植物のヒシモドキが1個確認された。

・分析試料番号5

栽培種や木本は確認されなかった。

〈第4a 面 畠〉

・分析試料番号7

栽培種は、イネの類が7個、オオムギが1個、コムギが3個、ナスが1個確認された。栽培種を除いた分類群は、木本2個、草本353個から成り、第3-1a面と同様に圧倒的な草本主体の組成を示すが、スベリヒユやナデシコ科、アカザ科などの乾いた場所にも生育する分類群がやや多い点が異なる。水湿地生植物は、オモダカ科、イトトリゲモ、サガミトリゲモ、コナギ近似種、イボクサ、ホタルイ属、イヌホタルイ近似種、ポントクタデ近似種、ヤナギタデ近似種、タガラシ、クサネム、タカサブロウなどが確認され、湿った場所に生育するヤナギタデ近似種が最多(173個)である。湿生～中生植物は、イネ科、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、カラムシ属、スベリヒユ、ハコベ類、ナデシコ科、アカザ科、キンボウグ属、マメ科(炭化)、カタバミ属、トウダイグサ、エノキグサ、スマレ属、カラスウリ、アカネ科、イヌコウジュ属 - シソ属が確認された。木本は、落葉低木のキブシが確認された。

・分析試料番号9

栽培種は、イネの類が6個、胚乳が1個、オオムギが2個、マメ科(アズキ類)が確認された。栽培種を除いた分類群は、木本4個、草本791個から成り、分析試料番号7の組成に似る。水湿地生植物は、イトトリゲモ、サガミトリゲモ、コナギ近似種、イボクサ、アゼスゲ類、ヌカスゲ類、テンツキ属、ホ

タルイ属、イヌホタルイ近似種、ミソソバ、ポントクタデ近似種、ヤナギタデ近似種、タガラシ、タカサブロウなどが確認され、ヤナギタデ近似種が最多（289個）である。湿生～中生植物は、イネ科、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、イヌタデ近似種、スベリヒユ、ハコベ類、ナデシコ科、アカザ科、ヒユ属、キンボウゲ属、アブラナ科、マメ科（炭化）、エノキグサ、スミレ属、イヌコウジュ近似種、イヌコウジュ属 - シソ属、トウバナ属などが確認された。木本は、常緑高木のクロマツ（炭化）、サカキ、落葉高木のカジノキ、アカメガシワが確認された。

〈第4a 面 水田〉

・分析試料番号11

栽培種は、イネの穎が1個と、炭化したオオムギの胚乳が1個確認された。木本は、常緑または落葉低木のキイチゴ属が1個と、落葉高木のセンダングが3個確認された。その他に、マメ科の炭化種子が1個確認された。

・分析試料番号12

栽培種は、コムギの炭化胚乳が1個確認された。

(2) 主な分類群の記載

大型植物遺体各分類群の写真を写真1に示し、主な分類群の形態的特徴等を以下に述べる。なお、栽培種と、栽培種と野生種の判別に種実の大きさが関わる分類群は、デジタルノギスで種実の長さ、幅、厚さを計測し、結果を表1・2に示す。

・クロマツ (*Pinus thunbergii* Parlatores) マツ科マツ属複雑維管束亜属

短枝・葉は灰黒褐色、炭化個体は黒色を呈す。残存長3.0mm（完形ならば長さ3～4cm）、径1.5mm程度の針形。短枝から2針葉が伸び、先端部は鋭く尖る。葉横断面は半円形で、中心部に2個の維管束がある。炭化個体の葉横断面観察の結果、4～10個の樹脂道が葉肉内に点在する状況が確認された。なお、横断面を確認していない葉を複雑維管束亜属（subgen. *Diploxylon*）としている。

・コナギ近似種 (*Monochoria cf. vaginalis* (Burm.f.) Presl var. *plantaginea* (Roxb.) Solms Laub.) ミズアオイ科ミズアオイ属

種子は淡灰褐色、長さ0.8～1.0mm、径0.6mmの楕円体。種皮は薄く透き通り、柔らかい。表面には8～10本程度の太い縦隆条と、その間に細い横隆条が密に配列する。なお、長さ1.2～1.5mmとコナギよりも長い個体をミズアオイ近似種 (*M. cf. korsakowii* Regel et Maack) としている。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎（果）は淡～灰褐色、胚乳は炭化しており黒色を呈す扁平な長楕円体。胚乳は、完形ならば長さ3.0～5.5mm、幅1.5～2.5mm、厚さ0.8～2.0mm程度。出土胚乳は、基部の破片で一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。残存長、幅は1.2mmを測る。胚乳表面はやや平滑で、2～3本の縦隆条がある。

胚乳1個を包む穎は、完形ならば、長さは6～7.5mm、幅は3～4mm、厚さは2～3mmで基部に大きさ1mm程度の斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや扁平な長楕円形の稲粉を構成する。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が縦列する。出土穎は破片で、残存長は3mmを測る。

・オオムギ (*Hordeum vulgare* L.) イネ科オオムギ属

穎（果）・胚乳は、炭化しており黒色、やや扁平な紡錘状長楕円体で両端は尖る。状態が良好な個体の計測値は、長さ4.9mm、幅2.3mm、厚さ1.6mm（分析試料番号9）、残存長3.5mm、幅2.5mm、厚さ2.2mm（分

析試料番号1)を測る。腹面正中線上にやや深く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面は粗面で微細な縦筋がある。表面に穎の破片が付着する個体が多くみられる。穎は薄く、表面は粗面で微細な縦筋が配列する。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳は炭化しており黒色、オオムギよりも丸みを帯びた楕円体を呈す。状態が良好な個体の計測値は、長さは長さ4.1mm、幅2.8mm、厚さ1.8mm(分析試料番号12)を測る。腹面正中線上にやや深く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で、微細な粒状模様がある。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実は褐〜黒褐色、長さ1.7〜2.3mm、径1.5〜1.0mmの片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り、基部は切形で刺針状の花被片が伸びる。背面正中線上には鈍稜。果皮表面は光沢があり、不規則な波状横皺模様が発達する。花被片が果実と同長の個体をホタルイ近似種 (*Scirpus cf. juncooides* Roxb.)、果実より短い個体をイヌホタルイ近似種 (*Scirpus cf. juncooides* Roxb. var. *ohwianus* (T.Koyama) T.Koyama) としている。

・ヤナギタデ近似種 (*Polygonum cf. hydropiper* L.) タデ科タデ属

果実は黒褐色、長さ2.5〜3.2mm、径1.7〜2.3mmの広卵体。頂部はやや尖り、2花柱が残る個体のみられる。基部は切形で灰褐色の萼片が残存する。背面正中線上には鈍稜がある。表面には明瞭な網目模様があり、やや粗面。灰褐色で表面に腺点が散在する花被が残存する個体のみられる。

・ソバ (*Fagopyrum esculentum* Moench) ? タデ科ソバ属

果皮は灰褐色。完形ならば、径4〜6mmの稜が鋭く尖る三稜状広卵体で基部に萼がある。果皮片は稜に沿って割れた1/3片未満で、残存長5.0mm、残存幅3.9mmを測る。果皮は薄く表面は粗面で、浅く細い横筋がある。

・ダイコン属 (*Raphanus*) アブラナ科

種子は炭化しており黒色、長さ2.7mm、径2.5mmのやや扁平な直方体状倒卵体で、カブなどの多くの栽培種を含むアブラナ属 (*Brassica*) や、野生種の種子よりも大型である。一側面には1個の浅い縦溝があり、焼き膨れて幅広となる。基部は切形で、種皮表面には楕円形の凹みによる網目模様がある。中国より渡来したとされる栽培種のダイコン (*R. sativus* var. *hortensis* Backer) や、野生化して沿海地に生育するハマダイコン (*R. sativus* L. var. *raphanistroides* Makino) などのダイコン属に由来する可能性が高い。

・マメ科 (Leguminosae)

種子は炭化しており黒色。少なくとも3種が確認され、栽培種の可能性が高いアズキ類と、野生種の可能性が高い2分類群(楕円体、腎形)とに分けている。アズキ類 (*Vigna* subgen. *Ceratotropis* (Piper) Verdc.) とした個体は、子葉の合わせ目に沿って割れた破片で、残存長3.9mm、幅3.4mm、半分厚1.8mmを測る。完形ならばやや扁平な直方体状楕円体で、子葉合わせ目上にある長楕円形の臍を欠損する。半断面はやや平滑で、胚軸跡の溝が確認される。北大基準(吉崎, 1992)の「アズキグループ(幼根が臍の終わり程から急に立ち上がり、胚珠中央に向けて伸びる)」に該当する初生葉を欠損するが、その痕跡が確認される。種皮は薄く、表面は平滑。

野生種と考えられる分類群は、長さ1.5mm、径1.2mmの楕円体で、子葉合わせ目上の種皮と同じ高さの位置に長さ0.7mm、幅0.2mmの楕円形の臍があり、種皮表面は粗面の個体と、長さ2.0mm、幅1.2mmの

偏平な腎形で、腹面中央部は湾入し、長径0.5mmの長楕円形の臍があり、縁が隆起する個体がみられる。

・イヌコウジュ近似種 (*Mosla cf. punctulata* (J.F.Gmel.) Nakai) シソ科イヌコウジュ属

果実は灰褐色、径1.0～1.1mmの倒広卵体。基部は舌状にわずかに突出し、着点部は不明瞭。果皮は厚く硬く、表面には深く大きく不規則な網目模様がある。

・イヌコウジュ属 (*Mosla*) - シソ属 (*Perilla*) シソ科

果実は淡～灰褐色、径1.1mmの倒広卵体。果実基部は舌状に突出し、着点部は不明瞭。果皮はやや厚く硬く、表面にはイヌコウジュよりも浅く大きく不規則な網目模様がある。野生種のイヌコウジュ属の大きさと思われるが、栽培種のエゴマ、シソを含むシソ属の果実の大きさの変異も連続的である。本分析では、着点部や網目模様、笠原(1982)の基準(長さ1.4～1.5mm、幅1.1～1.2mmをシソ、長さ2.0～2.8mm、幅1.8～2.5mmをエゴマ)や、中山ほか(2000)の計測値を参考に、イヌコウジュ属・シソ属としている。

・ナス (*Solanum melongena* L.) ナス科ナス属

種子は灰黄褐色、長さ2.9mm、幅3.4mm、厚さ0.6mmの偏平で歪な腎臓形。基部はやや肥厚し、くびれた部分に臍がある。種皮表面には微細な星型状網目模様が臍から同心円状に発達する。

・ヒシモドキ (*Trapella sinensis* Oliver) ヒシモドキ科ヒシモドキ属

果実は灰褐色、長さ14.5mm、最大径3.0mmの狭倒皮針～円柱体で、縁にわずかに翼があり、基部は細くなる。頂部には、宿存萼の附属体が発達した長さ2～2.5cmの糸状の長い突起が5本または3本あるが、出土果実には1本、長さ2cm程度の残存が確認された。糸状突起の先端は内側に湾曲する。果皮表面は粗面で、数本の縦稜が発達する。

4. 考察

中世後期とされる第4a面の畝、水田と第3-1a面の畝より得られた大型植物遺体群には、栽培種のイネ、オオムギ、コムギ、ソバ、ダイコン属、マメ科(アズキ類)、ナスが確認された。

イネ、オオムギ、コムギなどの穀類は、第4a面の畝、水田、第3-1a面の畝から確認され、マメ科(アズキ類)、ナスは第4a面の畝から、ソバ、ダイコン属は第3-1a面の畝から確認された。これらの栽培種の種実遺体は、当時の耕作域で栽培されていた、あるいは植物質食料として利用された残渣が肥糞等として耕作土中に持ち込まれた可能性がある。栽培種のうち、イネの穎とソバ、ナスを除く種類は炭化しており、オオムギには穎付着個体も確認されることから、加工前の穎(粃)のついた生の状態で火を受けた残滓と考えられる。ただし、耕作地内で炭化したのか、別の場所で炭化した種実が廃棄されたのかについては、現段階で判断することはできないが、栽培種以外の種類にも炭化した種実が確認されることを考えると耕作地で栽培植物が何らかの目的で火を受けた可能性が高いように思われる。この点については、発掘調査所見と併せて検討することが望まれる。なお、このような中世の耕作土における炭化した栽培種実の産出は、池島・福万寺遺跡の畝遺構でも確認されている(大阪府文化財センター、2008)。そこでは、畝で栽培された作物が火を受けた可能性と、肥料等のため二次的に持ち込まれた可能性が指摘されている。今回の結果も含め、中世の耕作地のあり方を考える上で興味深い結果といえる。

栽培種を除いた分類群は、第4a面の畝、第3-1a面の畝ともに、木本が極めて少なく、圧倒的な草本主体の組成を示す。開発が進んだ草地化の影響と示唆される。木本は、第4a面の水田からキイチゴ属、センダン、畝からクロマツ、カジノキ、サカキ、アカメガシワ、キブシ、第3-1a面の畝からマツ属複

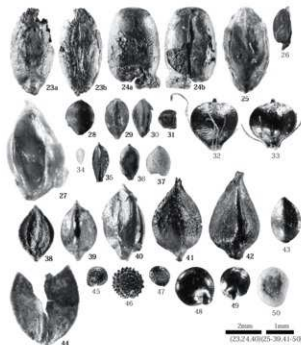
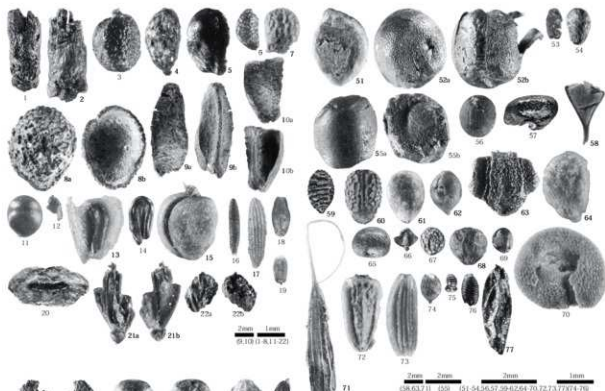
維管束亜属、フサザクラ、タニウツギ属などの、林縁や伐採地などの明るい場所に生育する樹種が確認された。当時の遺跡周辺域の森林の林縁部などに生育していたと考えられる。

草本は、人里植物に属する分類群が多く、沈水性のシヤジクモ科、イトトリゲモ、サガミトリゲモ、浮葉性のヒルムシロ属、ヒシモドキ、サンショウモ (?), 抽水～湿生性のオモダカ属 (科)、イボクサ、ミズアオイ (近似種)、コナギ (近似種)、テンツキ属、ホタルイ (近似種)、イヌホタルイ (近似種)、ホタルイ属、湿生のアゼスゲ類、ヌカスゲ類、スゲ属、ミゾソバ、ボントクタデ (近似種)、ヤナギタデ (近似種)、タガラシ、クサネムなどの水湿地生植物や、イネ科、カヤツリグサ科、カラムシ属、ギシギシ属、イヌタデ (近似種)、タデ属、スベリヒユ、ハコベ類、ナデシコ科、アカザ科、ヒユ属、キンボウゲ属、アブラナ科、キジムシロ類、マメ科、カタバミ属、トウダイグサ、エノキグサ、スマレ属、カラスウリ、ツボクサ近似種、アカネ科、キュウリグサ属、イヌコウジュ近似種、イヌコウジュ属 - シソ属、トウバナ属、ヤブタバコなどの湿生～中生植物が確認された。当時の調査区周辺域は、明るく開けた草地環境であったことが推定される。また、水深が浅い (1～2 m 以内) 水湿地が周辺に存在した可能性が推定される。出土遺構が耕作地であることを踏まえると、やや乾いた場所にも生育可能な中生植物は畠雑草として、水湿地生植物は水田雑草に由来する可能性が高く、調査地点の耕作地の土地利用履歴を反映している可能性も充分考えられる。

第4a 面の畠では、湿生のヤナギタデ (近似種) の多産が顕著で、スベリヒユやナデシコ科、アカザ科などの乾いた場所にも生育する分類群が比較的多い。一方、第3-1a 面の畠では、ヤナギタデ (近似種) や中生植物は少なく、沈水～浮葉～抽水性の水生植物が多くなり、イヌホタルイ (近似種) やコナギ (近似種) が多産する。このような組成の違いは、各時期の耕作地形成期の水文の条件の違いや、耕作地の利用履歴の違いを反映している可能性がある。

引用文献

- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 笠原安夫, 1982, 鳥浜貝塚の植物種実の検出とエゴマ・シソ種実タール状態について, 鳥浜貝塚1980年度発掘調査概報・研究の成果一編文前期を主とする低湿地遺跡の調査2-1, 福井県教育委員会, 65-87.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑, 東北大学出版会, 642p.
- 財団法人 大阪府文化財センター, 2008, 東大阪市・八尾市所在 池島・福万寺遺跡6 (福万寺II 地区05-1調査区) 一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書一, 206p.
- 吉崎昌一, 1992, 古代雑穀の検出, 月刊考古学ジャーナル, No.355, 2-14.



1. クロマツ葉枝・莖(第4面高5.9)
 2. ヌツク尾葉葉面葉短枝・莖(第3-1面高5.3)
 3. カジノキ核(第4面高5.9)
 4. フサザクラ種子(第3-1面高5.1)
 5. サカキ種子(第4面高5.9)
 6. キイチゴ属核(第3-1面高5.3)
 7. キイチゴ属核(第4面高5.11)
 8. 7カメシラ種子(第4面高5.9)
 9. センダン核(第4面高5.11)
 10. センダン核(第4面高5.11)
 11. キブシ種子(第4面高5.7)
 12. タニツツギ種子(第3-1面高5.1)
 13. オモダカ属果実(第3-1面高5.1)
 14. オモダカ科種子(第3-1面高5.3)
 15. ヒルムシロ属果実(第3-1面高5.1)
 16. イトリゲモ種子(第3-1面高5.1)
 17. サガミトリゲモ種子(第3-1面高5.1)
 18. ミズアオイ近縁種種子(第3-1面高5.1)
 19. コナギ近縁種種子(第3-1面高5.1)
 20. イボクサ種子(第4面高5.7)

21. イネ類胚(第3-4面高5.7)
 22. イネ胚乳(胚) (第4面高5.9)
 23. オオムギ類-胚乳(第4面高5.9)
 24. コムギ胚乳(第4面高5.12)
 25. スズメノヒエ属果実(第3-1面高5.3)
 26. イネ科果実(第4面高5.7)
 27. イネ科果実(第3-1面高5.1)
 28. アズキ類果実(第4面高5.9)
 29. スカスガ類果実(第4面高5.9)
 30. スダ属(白面)果実(第3-1面高5.1)
 31. アナンツキ属果実(第4面高5.9)
 32. ホタルイ近縁種果実(第3-1面高5.1)
 33. イヌホタルイ近縁種果実(第3-1面高5.3)
 34. カヤツリガサ科(表面突起)果実(第3-1面高5.1)
 35. カヤツリガサ属果実(第4面高5.7)
 36. カヤツリガサ科(白面)果実(第4面高5.7)
 37. クラムシ属果実(第4面高5.7)
 38. シンギン属果実(第3-1面高5.1)
 39. イヌタデ近縁種果実(第4面高5.9)
 40. ミソノハ属果実(第4面高5.9)
 41. ヤナギタデ近縁種果実(第4面高5.9)
 42. ホントクダ近縁種果実(第4面高5.7)
 43. タケ属(白面)果実(第3-1面高5.1)
 44. ノハ属(第3-1面高5.1)
 45. スベリヒコ種子(第4面高5.7)
 46. ハコベ類種子(第4面高5.9)
 47. ナデシコ科種子(第4面高5.9)
 48. アザミ科種子(第4面高5.9)
 49. ヒコ属種子(第4面高5.9)
 50. タラシ安果(第4面高5.7)
 51. キンボク属果実(第4面高5.9)
 52. ダイコン属種子(第3-1面高5.1)
 53. アブラナ科種子(第4面高5.9)
 54. キムシ科(繭繭糸科)上核(第3-1面高5.1)
 55. マメ科(アズキ)種子(第3-1面高5.1)
 56. マメ科(野牛)種; 樹門(種子) (第3-1面高5.1)
 57. マメ科(野牛)種; 腎形種子(第4面高5.9)
 58. クサネ木果実(第3-1面高5.4)
 59. カタバミ属種子(第4面高5.7)
 60. トウダイグサ種子(第4面高5.7)
 61. エネケラ種子(第4面高5.7)
 62. スミシ属種子(第4面高5.9)
 63. カスミ草種子(第4面高5.7)
 64. ツボクサ近縁種果実(第3-1面高5.1)
 65. アネ科(第4面高5.7)
 66. キュウリガサ属果実(第3-1面高5.1)
 67. イヌコウジュ近縁種果実(第4面高5.9)
 68. イヌコウジュ属 - シノ属果実(第4面高5.9)
 69. トウバナ属果実(第4面高5.9)
 70. ナス属種子(第4面高5.7)
 71. ヒメトモ木果実(第3-1面高5.4)
 72. タカサヅロウ果実(第4面高5.7)
 73. ヤブタバコ科果実(第3-1面高5.1)
 74. サンショウモ?大腸子? (第3-1面高5.1)
 75. シジクモ科A(小)卵形種子(第3-1面高5.1)
 76. シジクモ科B(大)卵形種子(第3-1面高5.1)
 77. 不明A(第4面高5.7)

写真1 大型植物遺体

第2節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtaditdzé・Ineza Jorjoliiani・中村賢太郎

1. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表3のとおりである。

試料は、縄文時代の河川から採取された植物遺体3点と土器に付着した炭化物1点である。AMS サンプル1 (PLD-23764) は、第14b層 (河川の上層) から採取されたブドウ属の枝材あるいは幹材で、最終形成年輪～5年目までの年輪を測定した。AMS サンプル2 (PLD-23765) と AMS サンプル3 (PLD-23766) は、第14b層 (河川の中層) から採取された葉である。土器付着炭化物 (PLD-23767) は、遺物番号672 (実測図番号20) の縄文時代後期末滋賀里I式の深鉢胴部外面に付着した炭化物である (掲載番号図48-198)。土器は河川中層の下部 (T.P.+9.2m) 付近から出土した。なお、河川中層は調査区内を北東から南西に向かって側方に移動して堆積していると考えられ、試料の堆積順序は、古い方から順に、土器、AMS サンプル3、AMS サンプル2、AMS サンプル1である。

^{14}C 年代測定試料は、調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

なお、土器付着炭化物は、起源物質を推定するために、炭素安定同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、窒素安定同位体比 ($\delta^{15}\text{N}$)、炭素窒素比 (C/N) を測定した。起源物質推定用試料は、酸・アルカリ・酸処理後の ^{14}C 年代測定試料の一部を分取した。測定では、EA (ガス化前処理装置) である Flash EA1112 (Thermo Fisher Scientific 社製) で炭素含有量および窒素含有量を測定し、C/N を算出した。また、EA で分離した CO_2 と N_2 を質量分析計 DELTA V (Thermo Fisher Scientific 社製) に導入し、炭素安定同位体比 ($\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$) と窒素安定同位体比 ($\delta^{15}\text{N}_{\text{Air}}$) を測定した。

2. 結果

表4に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図56と57に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めてい

表3 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-23764	調査区: 2区 層位: 第14b層 試料 No.AMS サンプル1 位置: 縄文の河川, 上層	種類: 生の材 (ブドウ属, 枝あるいは幹) 試料の性状: 最終形成年輪～5年輪 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-23765	調査区: 2区 層位: 第14b層 試料 No.AMS サンプル2 位置: 縄文の河川, 中層	種類: 生の葉 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-23766	調査区: 2区 層位: 第14b層 試料 No.AMS サンプル3 位置: 縄文の河川, 中層	種類: 生の葉 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-23767	調査区: 1,2区 グリッド: 3H, 2h 層位: 第14b層 遺物番号: 672 実測図番号 20 掲載番号: 図48-198 位置: 縄文の河川, 中層の下部 (T.P.+9.2m) 付近	種類: 土器付着炭化物 型式: 滋賀里I式 深鉢・深鉢 付着部位: 胴部外面 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理 (アセトン) 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

表4 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年年代範囲	2 σ 暦年年代範囲
PLD-23764 試料 NoAMS サンプル 1	-28.78 \pm 0.25	2872 \pm 21	2870 \pm 20	1111BC (5.7%) 1102BC 1084BC (12.1%) 1064BC 1057BC (50.5%) 1007BC	1126BC (94.9%) 976BC 952BC (0.5%) 948BC
PLD-23765 試料 NoAMS サンプル 2	-31.65 \pm 0.23	2907 \pm 23	2905 \pm 25	1129BC (68.2%) 1045BC	1208BC (0.7%) 1203BC 1195BC (16.1%) 1141BC 1135BC (78.5%) 1011BC
PLD-23766 試料 NoAMS サンプル 3	-31.13 \pm 0.23	2899 \pm 23	2900 \pm 25	1125BC (68.2%) 1041BC	1193BC (9.9%) 1142BC 1133BC (85.5%) 1007BC
PLD-23767 遺物番号: 672実測回番号: 20 掲載番号: 図48-198	-27.03 \pm 0.23	3013 \pm 23	3015 \pm 25	1313BC (51.9%) 1256BC 1237BC (16.3%) 1215BC	1381BC (14.9%) 1335BC 1323BC (79.0%) 1193BC 1142BC (1.5%) 1133BC

©CalPal 1.7 (Beck, Renssen 2010). Reservoir data from Renssen et al. (2009).

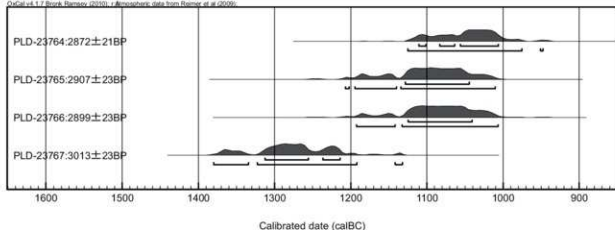


図56 暦年較正結果の分布

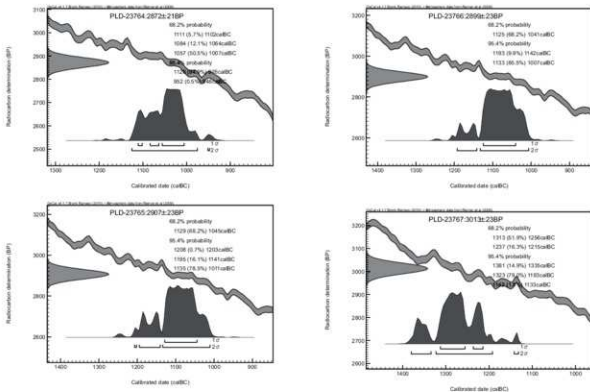


図57 暦年較正結果

ない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ: IntCal09) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

また、表 5 に炭素安定同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、窒素安定同位体比 ($\delta^{15}\text{N}$)、炭素含有量、窒素含有量、炭素窒素比 (C/N) を示した。

3. 考察

以下、 2σ 暦年代範囲 (確率 95.4%) に着目して、結果を整理する。測定結果と縄文土器編年との対応関係については、小林 (2008, 2009)、工藤 (2012)、中村 (2008) を参照した。

AMS サンプル 1 (PLD-23764) の材は 1126-976 cal BC (94.9%) および 952-948 cal BC (0.5%) で、縄文時代晩期前葉～中葉に相当する暦年代範囲を示した。

AMS サンプル 2 (PLD-23765) の葉は、1208-1203 cal BC (0.7%)、1195-1141 cal BC (16.1%)、1135-1011 cal BC (78.5%) で縄文時代晩期前葉～中葉に相当する暦年代範囲を示した。

AMS サンプル 3 (PLD-23766) の葉は、1193-1142 cal BC (9.9%) および 1133-1007 cal BC (85.5%) で、縄文時代晩期前葉～中葉に相当する暦年代範囲を示した。

縄文時代後期末滋賀里 I 式の深鉢胴部の外面付着炭化物 (PLD-23767) は、1381-1335 cal BC (14.9%)、1323-1193 cal BC (79.0%)、1142-1133 cal BC (1.5%) の暦年代範囲を示した。土器付着炭化物の暦年代範囲は、従来知られている縄文時代後期末～晩期初頭の土器に伴う試料の暦年代と整合的である。なお、付着炭化物は $\delta^{13}\text{C}$ が -26.8% と低く、C/N が 22.4 と比較的高い点から、陸産物由来 (主に C3 植物) と推定される。したがって、付着炭化物の年代に関して、海洋リザーバ効果の影響を考慮する必要はないと考えられる。

今回の測定では、層序が最も下位の土器が最も古い年代を示した。AMS サンプル 1～3 は、 ^{14}C 年代では互いの新旧が表れない程度の時間幅の中で堆積したと考えられる。

参考文献

赤澤 威・南川雅男 (1989) 炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元、田中 琢・佐原 眞編「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」: 132-143、クハプロ。

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates, Radiocarbon, 51(1), 337-360.

表5 土器附着炭化物の炭素・窒素安定同位体比と炭素窒素比

試料番号	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$	$\delta^{15}\text{N}_{\text{Air}}$	炭素含有量	窒素含有量	C/N
	(‰)	(‰)	(%)	(%)	
PLD-23767 遺物番号:672実測図番号:20 掲載番号:図48-198	-26.8	10.5	66.4	3.45	22.4

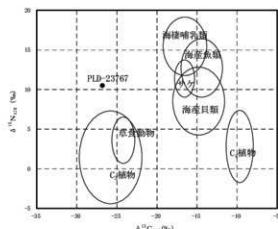


図58 炭素・窒素安定同位体比
(吉田・西田 (2009) に基づいて作製)

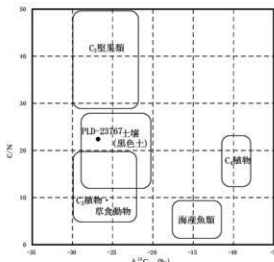


図59 炭素安定同位体比とC/N比の関係
(吉田・西田 (2009) に基づいて作製)

小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代、縄文時代の考古学2 歴史のものさし、257-269、同成社。

小林謙一 (2009) 近畿地方以東の地域への拡散、新石器時代のはじまり第4巻弥生農耕のはじまりとその年代、55-82、雄山閣。

工藤雄一郎 (2012) 後水期の考古編年と¹⁴C年代、旧石器・縄文時代の環境文化史：高精度放射性炭素年代測定と考古学、212-229、新泉社。

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」：3-20、日本第四紀学会。

中村豊 (2008) 西日本磨研土器 (滋賀里1~3式土器)、小林達雄編「総覧縄文土器」：782-789、アム・プロモーション。

岡田憲一 (2008) 凹線文系土器 (宮滝式・元住吉山II式土器)、小林達雄編「総覧縄文土器」：650-657、アム・プロモーション。
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

坂本 稔 (2007) 安定同位体比に基づく土器附着物の分析、国立歴史民俗博物館研究報告、137、305-315。

Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002) Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44(2), 549-557.

米田 穰 (2008) 丸根遺跡出土土器附着炭化物の同位体分析、豊田市郷土資料館編「丸根遺跡・丸根城跡」：261-263、豊田市教育委員会。

吉田邦夫・宮崎ゆみ子 (2007) 煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器附着炭化物の由来についての研究、平成16-18年度科学研究補助金基礎研究B (課題番号16300290) 研究報告書研究代表者西田泰民「日本における稲作以前の主食植物の研究」、85-95。

吉田邦夫・西田泰民 (2009) 考古学が探る火炎土器、新潟県立歴史博物館編「火焔土器の国 新潟」：87-99、新潟日報事業社。

第5章 まとめ

今回の調査は法善寺多目的遊水地建設に伴うもので、現在も隣接地で調査が行われている。調査では縄文時代～中世にかけて複数の遺構面が確認された。ここでは、今回の調査成果を堆積状況から3段階に分けて考えるとともに、今後の課題をまとめたい。

第1段階は縄文時代で、調査区は2mを超える厚い河川堆積物で埋没し、その後、細粒の堆積物が繰り返しもたらされる不安定な段階である。第2段階は縄文時代晩期末～古代にかけて、土砂の供給が非常に少なく、安定した環境が復元できる。第3段階は古代末～中世にかけて、比較的土砂の供給が多く、耕作面が更新される段階である。

第1段階では、縄文時代後期後葉～晩期中葉にかけての河川の左岸を検出した。河川は左岸を検出した調査区南端で蛇行し、北流するものと考えられる。調査区東側の生駒山地には花崗岩の露頭が認められる。それに対し、河川堆積層中には、堆積岩である砂岩やチャートが含まれていることから、検出した河川は旧大和川の分流路である可能性が高いことが指摘できる。下層は掘削深度が満たず、不明な部分もあるが、第14b層からは宮滝式の土器も出土しており、後期後葉よりは遡らないと考えられる。中層は後期末から晩期中葉にかけて、調査区南端を攻撃面として北東から南西方向に側方移動しながら流れ、その後晩期中葉の間には放棄流路化している。このように、河川の埋積が時間幅をもっていること、埋積の単位があることが分かり、遺物の出土状況から、安定した段階には人の活動が及んでいることが明らかとなった。今回の調査区では左岸の一部を検出したのみであるが、今後、右岸の状況も明らかになることが期待される。また、東側扇状地に向かって第14b層の各段階に対応する土壌化層が確認できる可能性も十分に考えられよう。

同時期の周辺の遺跡をみると、上流側、大泉遺跡が目立つ。調査地から約800m南東の扇状地上には縄文時代早期以降、集落が営まれていたと考えられる。集落は丘陵縁部から徐々に扇状地縁辺に向かって拡大しているようで、特に旧170号付近の調査では滋賀里Ⅰ式～Ⅲ式の土器が多数出土しており、周辺に縄文時代後期末～晩期中葉を中心とする集落が展開すると考えられる（文献11・17・20）。今回の河川から出土している土器類は縄文時代早期から晩期中葉のものであり、前期を含まない。大泉遺跡の縄文集落とほぼ同じような内容といえる。滋賀里Ⅰ式の段階には当調査区内でも土器を持ち込み、煮炊きをした痕跡が確認でき、河川が安定した段階には大泉遺跡縄文集落のキャンプサイトのような場所であったのではないだろうか。

一方、大泉遺跡より約1.5キロ北に位置する恩智遺跡では「天王の杜」南部付近、T.P. + 14.5m～18.0mの扇状地上で滋賀里Ⅲ式から滋賀里Ⅳ式、船橋・長原式と晩期中葉から末まで、連続して集落が営まれており、東西100m、南北50m程度の居住域が推定されている（文献34・38）。大泉遺跡では滋賀里Ⅳ式の遺物の出土が現在のところ少なく、中心時期にずれがみられることから、大泉遺跡から恩智遺跡に集落の主体が移動していることも考えられよう。

河川の埋没後も細粒の堆積物がもたらされるが、いわゆる暗色帯は形成されておらず、第13a層、第14a層の状況は明確にはできなかった。人為的な痕跡は希薄であり、集落の中心は扇状地上であったと考えられる。

第2段階、縄文時代晩期末頃には土砂の供給が少なく、安定した段階となる。第12a面、第12b面

では、遺構、遺物ともに散漫な状況ではあったが、縄文時代晩期～古代のピットや土坑、溝などがみられ、集落の縁辺部といった様相がみられた。地形的に東側に向かって高くなっており、それぞれの時期の集落は調査区より東側に位置するものと考えられる。調査区では噴砂が多く確認でき、地下水が高く、軟弱な地盤であったことが考えられ、集落中心部の立地にはあまり適さなかったのであろうか。しかしながら、縄文時代晩期末の遺物が散見することは重要で、集落域が低地部付近に広がっていることを示唆するものであろう。

出土遺物に注目すると、弥生時代全般、及び古墳時代前半の遺物が極めて少ないことが特筆できる。遺構面が削平されたにしても、上層からも当該期の遺物の出土は少ない。縄文時代の河川が埋没した後には、大和川は位置を変え、近辺を北流していると考えられるのだが、それを供給源とするような氾濫堆積層も確認できなかった。弥生時代～古墳時代にかけての低地部での状況は、河川の動向も含めて大きな課題といえる。

その他、墨書土器、須恵器蓋転用甕、製塩土器、漆付着土器、瓦など古代の遺物には特筆すべきものがあった。いずれも一般的な集落からはあまり出土しないものと考えられ、調査区東側に推定される三宅寺（平野廃寺）に関連するものであろう。

第3段階は第2段階に比して土壌の更新が頻繁に行われ、b層の遺存状況は悪いものの複数の耕作面が確認できた。

当調査区周辺一帯は条里型地割をよく残す地域である。古代の行政区画では大県郡大里郷に属する。「信貴山寺資財帳写」(『平安遺文』第10巻)に「大県郡山上二条」と記されるが、現地比定が困難で、大県郡の条里地番、坪地番の詳細については解明されていない(文献7)。高安郡との境界は神宮寺にあり、神宮寺の墓地から西の方へ一直線にのびる道がこれにあたる。高安郡の条里は恩智に小字名が残っており、坪地番が南東隅からはじまり南西隅で終わる千鳥式が復元されているが、復元された条里区画がこの道と一町ほど北にずれることが指摘される(文献35)。

調査区周辺をみると、現状では東高野街道から恩智川まで4町分、恩智川の西側は川沿いに1町分はよく残るが、玉柳川周辺は乱れが目立つ(図版1-1)。なお、現在の恩智川は遺跡の西側を北流するが、もともとは調査区の南側で東方向に屈曲し、2町分東側を北流し、再度西に屈曲しており、当調査区の周辺を囲うように流れていた。本来であればこのように良好に現存する地割について、周辺条里との関連など考察すべきところではあるが、今回は調査で確認した条里遺構についてまとめることとした。

当調査区は、図1でみるように、方1町の坪内に納まり、坪境は確認することはできなかった。調査では第4a面、第9a面で、南北方向の7本の畦畔が10mを前後する間隔で位置していることから、1町を東西に10等分する長地型であることが明らかとなった。第3-1a面では畦畔が検出できなかった部分もあるが、第4a面と同様の区画が想定できよう。第10a面でも南北方向の畦畔を検出したが、その間隔にはばらつきが認められた。しかしながら南北方向に長い地割りであることは変わらない。第10a面は第9a層の下面遺構と考え、11世紀～12世紀前半の時期が与えられ、少なくとも条里水田が11世紀頃まで遡ることが分かった。

ここで問題となるのは第11a面の状況である。第12a面から第11a面にかけて景観が大きく変わったことは第3章でも指摘してきたが、第12a面では少なくとも正方位を指向する遺構はみられず、地形に即した溝が特徴づけられる。一方、第11a面では南北方向を指向する溝を1条検出しており、第10a層の疑似畦畔と考えられる高まりを不明瞭ではあるが確認した。このことから第11a面が最古の

糸里型水田面である可能性が考えられる。時期については、第12 a 面を8世紀を中心とする時期と考えており、2-1区の第12 a 面で検出した斜め方向に走る2-60溝からは7世紀代の遺物を含む古代の土器片が出土しており、これを遡ることはない。第11 a 面で検出した疑似遺構は第10 a 層の下面遺構であることから、10世紀頃の時期が与えられる。南北溝である2-29溝は、第11 a 面の上面遺構である可能性が高いが、10世紀頃まで糸里水田が遡る可能性を指摘しておきたい。ただし、今回の調査区内では坪境を含まず、検出した遺構は坪内を区画する畦畔、あるいは疑似畦畔や、畦畔痕跡といったものであり、時期を含め断定するには時期尚早といえる。糸里施工時期を明らかにすることは当遺跡の大きな課題の一つであり、今後、特に坪境周辺での調査による検証が不可欠といえる。

中世の耕作地に関しては、第4 a 面で水田と畠が検出された。水田と畠が混在する状況は、第4章でも述べたが、思智川下流域、東大阪市、八尾市に所在する池島・福万寺遺跡の状況と類似している。池島1期地区の報告では「混作」もしくは「二毛作」、もしくは「田畑輪換」であったのかが問われるところ（文献27）、とされているが、15世紀を中心とする同時期に広範囲で同じような状況がみられる点は興味深い。福万寺Ⅱ期地区05-1調査区では、畠が検出された遺構面の中で畝や畝間、水田畦畔が検出されない範囲の詳細な検討を行っている。軟X線写真による分析から畠作土の構造が認められるとし、臨時的な水田の畠化を支持するとしており（文献29）、福万寺Ⅱ期地区07-1調査区でも、用水不足などが原因で、本来水田として使われていた場所を畠に切り替えたと推測している（文献30）。今回の調査では畦畔の水口なども確認できることから、水田と畠が同時に機能していた可能性が高いと考えている。第4 a 面が全体として、西に緩やかに傾斜しており、高い部分が畠として利用された可能性も含め、今後の隣接の調査成果も含めての検討が必要であろう。また、畠遺構は耕作土が連続した場合、畝間溝などが検出できない。今回の調査では第8 a 面も畠として利用されている可能性が高いと考えるが、それが全域であったのか否かは判断できなかった。第4 a 面は洪水砂で覆われた遺構面であることから、畠遺構が明確に検出されたが、それ以前にも水田、畠の両方が混在していた可能性も考えられるのではないだろうか。畠をどのように認識するか、先述の軟X線写真による構造分析なども有効であろう。

続く第3-1 a 面では全域が畠となっており、水田から畠へ土地利用が変化している状況が窺われた。今後、畠の栽培作物がどのようなものであるか、今回実施したような大型植物遺体分析、加えて花粉分析などが求められよう。

その後、第2面では図7に復元したように、氾濫堆積物を芯とした島畠が築かれ、島畠が拡大していく状況が窺われる。この状況も池島・福万寺遺跡と同様であり、周辺一帯に島畠が広がっていた景観が復元できる。

調査区周辺では、これまで丘陵部や扇状地上では、狭小な調査区ながらも多くの調査が実施され、大きな成果をみることができる。対して、扇状地縁辺から低地部では、堆積層が厚いこともあり、不明な部分が多いのが現状といえる。上記のように多くの課題を示すに終始したが、今回の調査区を含めた法善寺多目的遊水地建設予定範囲は扇状地から低地部に位置しており、低地部を含めた環境復元ができるものとして今後の調査に期待したい。

引用・主要参考文献

1. 泉 拓良 1981 「後期の土器 近畿地方の土器」『縄文文化の研究 第4巻 縄文土器Ⅱ』
2. 泉 拓良 1989 「西日本磨研土器様式」『縄文土器大観 第4巻』
3. 井上智博 2010 「池島・福万寺遺跡における中世～近世の層序対応」『大阪文化財研究』第37号(財)大阪府文化財センター
4. 瓜生堂遺跡調査会 1980 『思智遺跡1』
5. 江浦 洋 1992 「条里型水田をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要Ⅶ』財団法人 大阪文化財センター
6. 大阪府教育委員会 2005 『大県部条里遺跡確認調査概要—思智川(法善寺)多目的遊水地予定地の調査—』
7. 大阪府史編集専門委員会 1990 『大阪府史 第2巻 古代編Ⅱ』
8. 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006 『河内湖周辺に定着した渡来人—5世紀の渡来人の足跡—』
9. 大阪府立近つ飛鳥博物館 2007 『河内古代寺院巡礼』
10. 柏原市教育委員会 1983 「大県遺跡」『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1982年度』
11. 柏原市教育委員会 1984 「大県遺跡」『大県・大県南遺跡—下水道管渠埋設工事に伴う—』
12. 柏原市教育委員会 1985 「大県遺跡」『大県・大県南遺跡—下水道管渠埋設工事に伴う—』
13. 柏原市教育委員会 1985 「大県遺跡」『柏原市所在遺跡発掘調査概要—原山・田辺・大県遺跡—1984年度』
14. 柏原市教育委員会 1985 『大県南遺跡—山下寺跡寺域の調査—』
15. 柏原市教育委員会 1986 『大県・大県南遺跡—下水道管渠埋設工事に伴う—』
16. 柏原市教育委員会 1987 「大県遺跡」『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1986年度』
17. 柏原市教育委員会 1988 「大県遺跡」『柏原市遺跡群発掘調査概報—大県遺跡・玉手山遺跡・田辺遺跡—1987年度』
18. 柏原市教育委員会 1988 「大県遺跡」『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 —1987年度—』
19. 柏原市教育委員会 1988 『大県遺跡—堅下小学校屋内運動場に伴う—1985年度』
20. 柏原市教育委員会 1994 「平野・大県遺跡」『柏原市所在遺跡発掘調査概報』
21. 柏原市教育委員会 1995 「大県南遺跡」『柏原市遺跡群発掘調査概報』
22. 柏原市教育委員会 1996 『大県の鉄』
23. 柏原市教育委員会 1998 「山ノ井遺跡」『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1997年度』
24. 古代の土器研究会編 1992 『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』
25. 小林謙一 2008 「縄文時代の歴年代」『歴史のものさし』同成社
26. 財団法人 大阪府文化財センター 2005 『船橋遺跡Ⅱ』
27. 財団法人 大阪府文化財センター 2007 『池島・福万寺遺跡3』
29. 財団法人 大阪府文化財センター 2008 『池島・福万寺遺跡6』
30. 財団法人 大阪府文化財センター 2011 『池島・福万寺遺跡10』
31. 財団法人 大阪府文化財調査研究センター 2000 『向出遺跡』
32. 財団法人 八尾市文化財調査研究会 1997 「神宮寺遺跡 第1次調査」『財団法人 八尾市文化財調査研究会報告57』
33. 財団法人 八尾市文化財調査研究会 2003 「思智遺跡第11次調査(QJ2001-11)」『財団法人 八尾市文化財調査研究会報告75』
34. 財団法人 八尾市文化財調査研究会 2007 「思智遺跡第18次調査」『財団法人 八尾市文化財調査研究会報告98』
35. 棚橋利光 1982 「八尾の条里制」『八尾市紀要』第6号 八尾市教育委員会 八尾市市史編さん室
36. 中世土器研究会編 1995 「概説 中世の土器・陶磁器』
37. 中 九兵衛 2007 「古文書から見た大和川付け替え運動」『大和川付け替え300年—その歴史と意義を考える—』大和川水系ミュージアムネットワーク編
38. 八尾市教育委員会 1987 「思智遺跡の調査」『八尾市文化財調査報告14 八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書1』
39. 八尾市教育委員会2008 『八尾市文化財調査報告57 平成19年度国庫補助事業 八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書』
40. 家根祥多 1981 「晩期の土器 近畿地方の土器」『縄文文化の研究 第4巻 縄文土器Ⅱ』

表6 出土遺物集計表

瓦	瓦器		須 器				土 師 器				學生 土器	石器	金属器	木製品	種子	その他	合計													
	瓦 器 土器	瓦器 13c~ 14c	11c~ 12c	8c	7c	6c	5c	不明	中世	古代 後期								古代 前期	古 土 器	不明										
第2a層以上	11	9	3	2	23	25	0	2	0	0	1	0	0	0	1	0	1	10	1	262										
第2a層	0	6	1	0	11	1	0	0	2	0	0	1	0	3	22	0	1	0	9	3	109									
第2b層	0	6	16	2	247	1	2	0	3	0	1	0	0	0	132	0	2	1	154	1	0	2	3	577						
第2c層	0	6	5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	771			
第2d層	0	6	32	3	345	1	0	2	3	0	0	0	0	2	188	0	1	0	171	0	0	0	0	4	0	3	4	771		
第2e層	0	1	25	3	208	0	0	2	1	0	0	0	0	4	117	1	17	0	114	0	1	0	1	0	3	1	466			
第2f層	2	2	7	7	26	1	0	0	0	0	0	0	0	1	29	2	0	0	33	0	0	0	0	2	0	3	1	115		
第3a層	0	0	0	25	4	1	5	14	0	0	2	0	0	31	4	60	1	0	234	0	1	0	0	0	1	0	4	1	387	
第10a層	6	0	0	2	2	1	13	0	0	34	6	7	1	265	0	13	57	1	1050	25	1	10	1	0	0	3	8	1508		
第11a層	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	22	5	12	1	207	0	0	34	2	703	9	8	65	18	0	0	6	4	1100
第12a層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	8	0	0	2	2	68	0	1	81	6	0	0	0	1	170	
第12b層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
第13a層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
第13b層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
第14a層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第14b層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合 計	27	31	89	45	993	32	8	36	9	1	61	11	20	2	549	567	76	116	6	2742	36	13	948	144	9	1	65	29	6666	

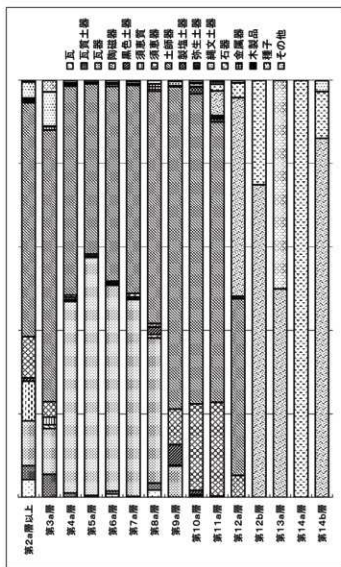


図60 出土遺物種別グラフ

圖 版



1 調査区遠景 (北から)



2



3



4



5

2 1-1区西半 東西断面 (北東から)
4 2-2区 島島検出状況 (東から)

3 1-1区 島島断面 (北から)
5 第1b層上面 2-1区 土坑検出状況 (北から)



1 1-1区 南壁断面 島島の拡張(北東から)
3 2-2区 西壁断面 第4 a層~第9 a層(東から)

2 1-2区 南壁断面 第2-4 a層~第6 a層(北から)
4 1-2区 南壁断面 第7 a層~第12 b層(北西から)



5 2-2区 南壁断面(北から)
7 2-2区 西壁断面 第13 a層~第15 a層(東から)

6 1-2区 南壁断面 第12 b層~第13 a層(北西から)
8 2-2区 西壁断面 第14 b層~第18 a層(東から)



1 第3-1a面 1-2区 全景 (東から)



2 第3-1a面 1-1区 全景 (北西から)



1 第3-1a面 2-1区 全景 (東から)



2 第3-1a面 2-1区 曇検出状況 (北から)



3 第3-1a面 2-2区 全景 (南から)



4 第3-3a面 2-1区 検出状況 (南東から)



5 第3-3a面 2-2区 全景 (東から)



1 第4a面 1-2区 全景 (北西から)



2 第4a面 2-2区 全景 (南西から)



1 第4a面 2-1区 全景(東から)



2 第4a面 1-1区西半 全景(東から)



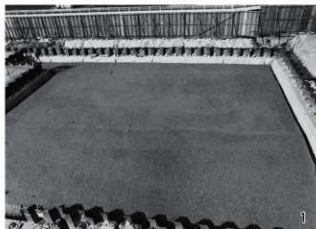
3 第4a面 2-1区 2-13水口完掘状況(北から)



4 第4a面 2-1区 2-10畦畔検出状況(南から)



5 第4a面 2-2区 2-8畦畔と南壁断面の相関(北から)



1 第8a面 1-2区 全景(東から)



2 第8a面 1-2区 瓦器検出土状況(南から)



3 第9-1a面 2-2区 全景(東から)



4 第9-1a面 2-1区 全景(東から)



5 第10-1a面 1-2区 全景(東から)



6 第10-1a面 1-2区 鉄鑪出土状況(東から)



7 第10-1a面 2-2区 全景(東から)



8 第10-1a面 2-1区 全景(東から)



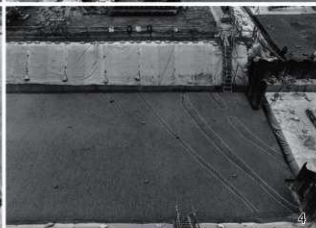
1 第12 a 面 2-1区 全景 (東から)



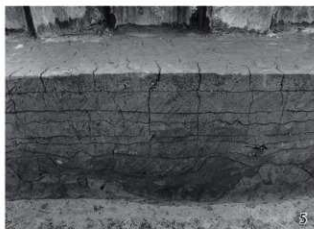
2 第12 a 面 1-2区 全景 (北東から)



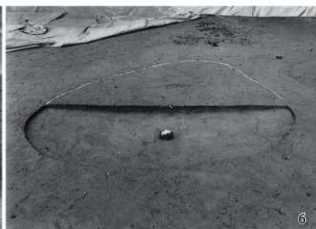
3 第12 a 面 1-1区東半 全景 (東から)



4 第12 a 面 1-1区西半 全景 (北から)



5 第12 a 面 2-1区 2-60 溝断面 (東から)



6 第12 a 面 1-2区 1-66 土坑断面 (南から)



7 第12 b 面 1-1区 1-133 溝断面 (南から)



8 第12 a 面 1-2区 1-64 ピット断面 (東から)



1 第12 b面 1-2区 全景 (東から)



2 第12 b面 1-1区西半 全景 (北東から)



1 第12b面 2-2区 全景(東から)



2 第12b面 2-1区 全景(東から)



3 第12b面 1-2区 1-83溝検出状況(北西から)



4 第12b面 1-2区 1-109ピット断面(南から)



5 第12b面 1-2区 噴砂検出状況(南東から)



6 1-2区 噴砂断面(東から)



7 第13a面 1-2区 縄文土器出土状況(西から)



8 第14a面 1-1区 1-179土坑(北から)

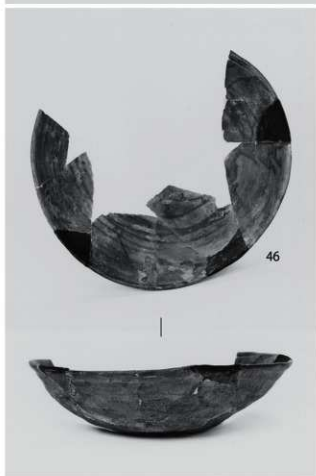
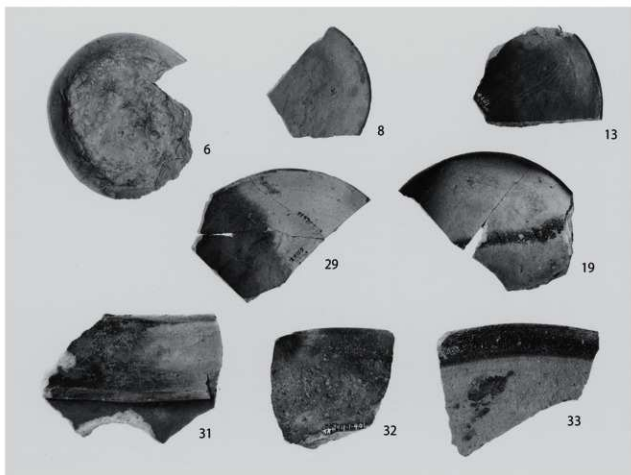


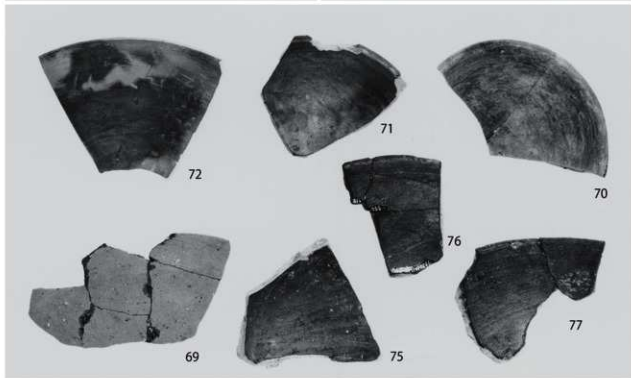
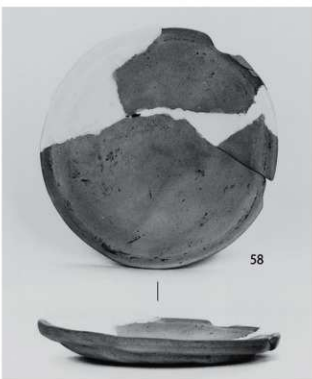
1 第 15 a 面 2-2 区 2-142 河川左岸全景 (東から)

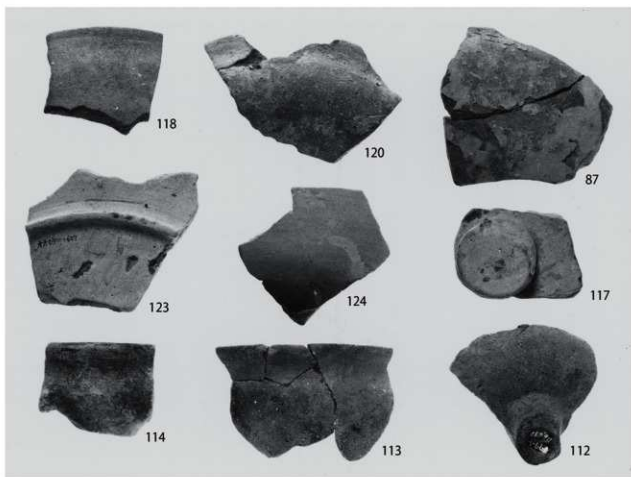
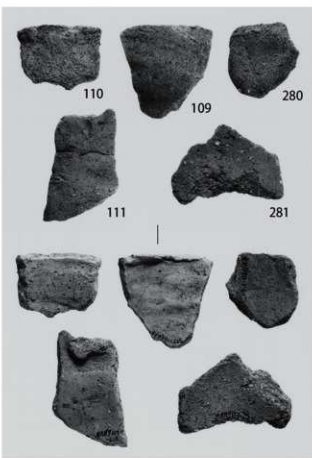
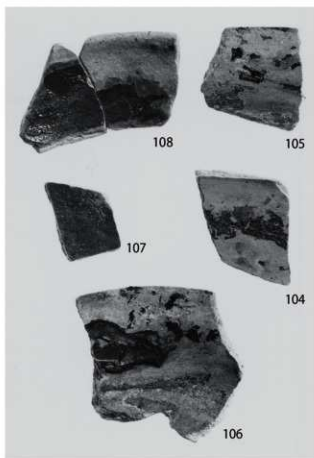


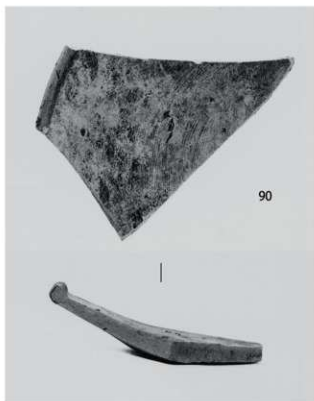
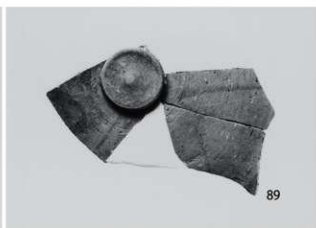
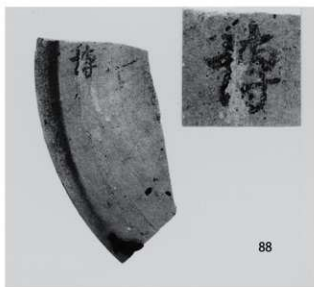
2 第 14 b 層中 1-2 区 焼土・炭化物検出状況 (北東から)
4 第 14 b 層中 1-2 区 縄文土器出土状況 (北から)

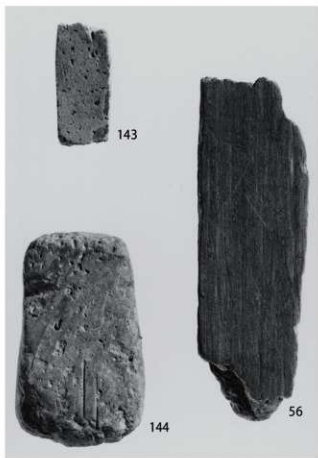
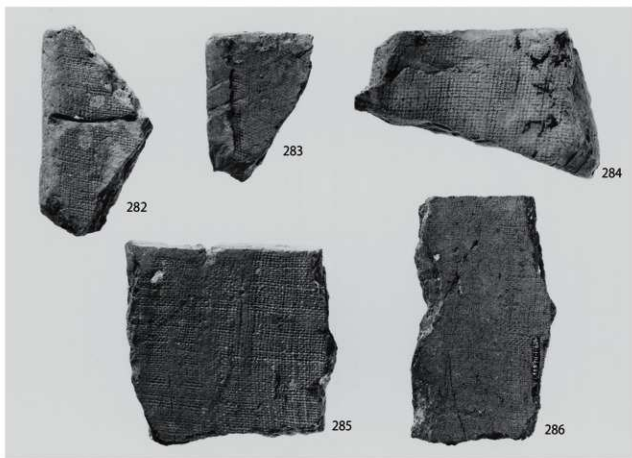
3 第 14 b 層中 1-2 区 縄文土器出土状況 (西から)
5 第 14 b 面 1-1 区 縄文土器出土状況 (南西から)

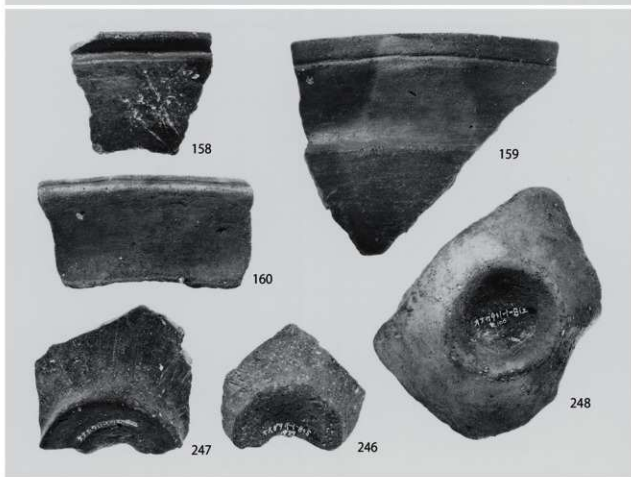
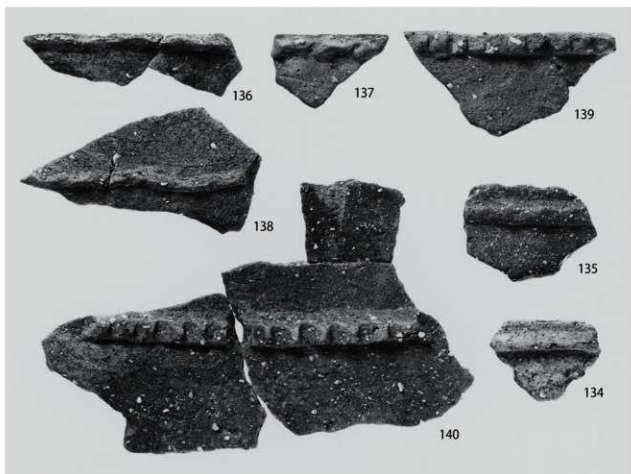




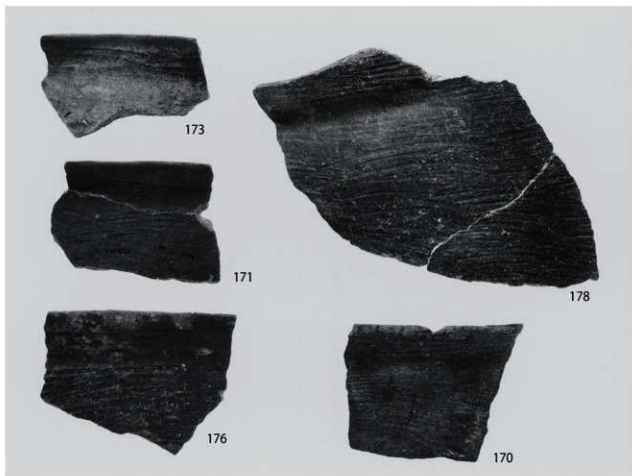


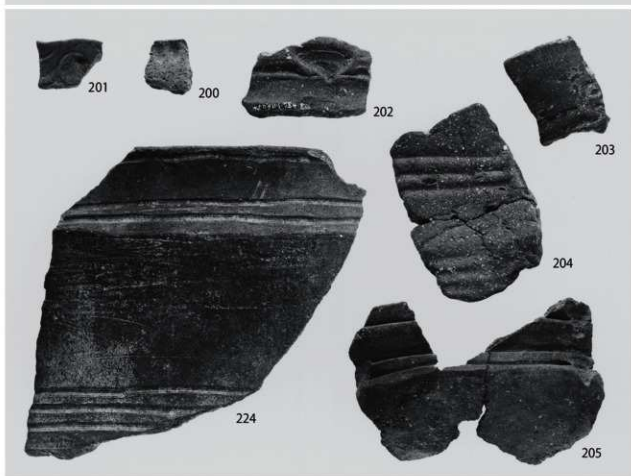
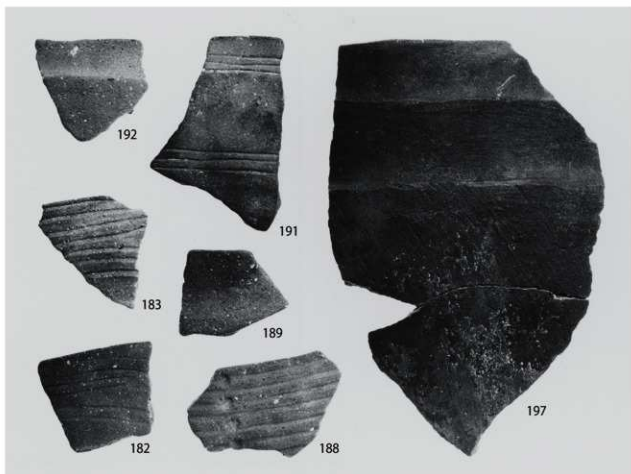


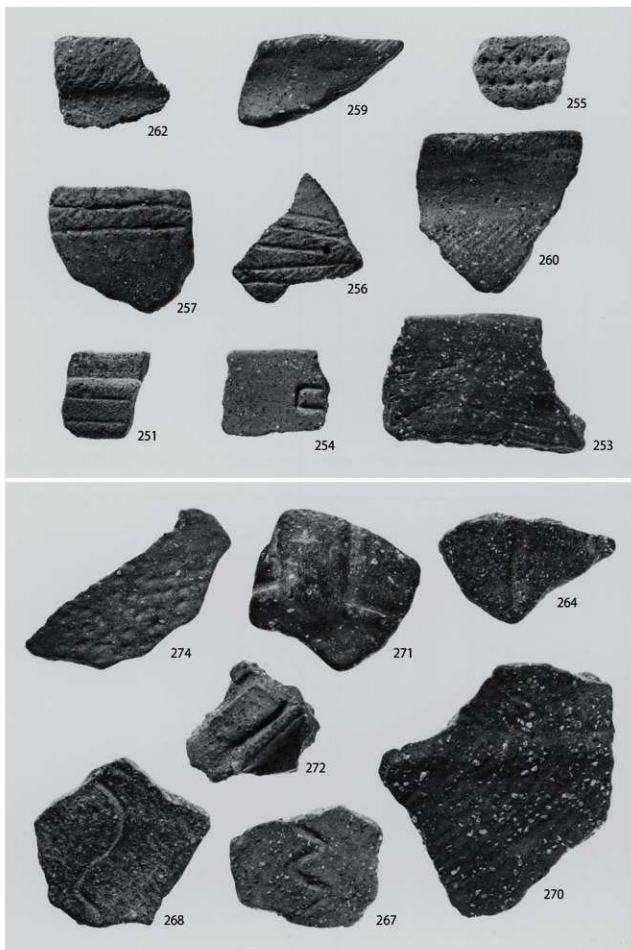


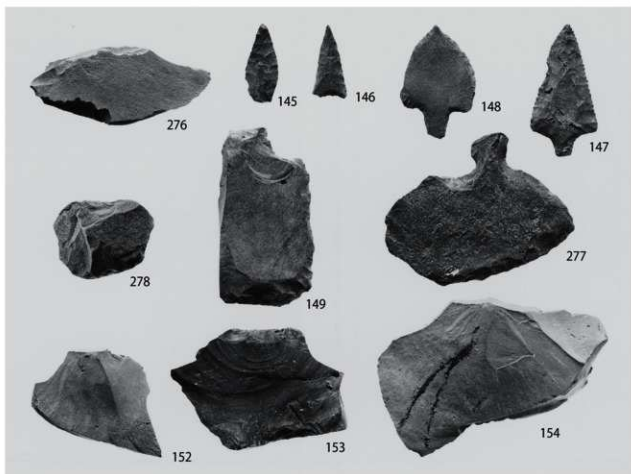












報 告 書 抄 録

ふりがな	おおがたぐんじょうりいせき							
書名	大県郡条里遺跡							
副書名	寝屋川水系改良事業（一級河川思智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第241集							
編著者名	西村歩、駒井正明、島崎久恵（編）							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 ℡072(299)8791							
発行年月日	2013年10月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
おおがたぐんじょうりいせき 大県郡条里 遺跡	おおさかひがし 大阪府柏原市 ほうげんじょうりいせき 法善寺4丁目 らない 地内	27221	69	34° 35′ 58″	135° 37′ 37″	20110601～ 20121130	1980㎡	思智川法善寺 多目的遊水地
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大県郡条里 遺跡	生産	古代～中世	条里畦畔・畝	陶磁器・瓦質土器・瓦器・土師器・須恵器・黒色土器・鉄製品・石製品		古代末から中世にかけて条里型地割に基づく水田及び畝を抽出		
	集落	縄文時代晩期～古代	溝・土坑・ピット	須恵器・土師器・墨書土器・瓦・転用硯・漆付着土器・製塩土器・鉄製品・弥生土器・縄文土器・打製石器・サヌカイト剥片		縄文時代晩期末～古代の集落縁辺部の状況		
		縄文時代後期～晩期中葉	河川の左岸	縄文土器・打製石器・サヌカイト剥片		河川は田和川の分流路の可能性がある		
要約	<p>今回の調査では縄文時代後期後葉～晩期中葉の河川を検出した。河川からは、宮滝式、澄賀Ⅰ式～Ⅲ式の土器に代って、早期押型文土器や中期、後期の土器が出土した。河川は晩期中葉には埋没、放棄流路化していたと考えられる。なお、この河川は田和川の分流路である可能性が考えられる。</p> <p>その後、縄文時代晩期末には土砂の供給が安定し、古代までの土坑や溝、ピットなどの遺構を検出した。遺構は複数の時期のものを含んでおり、散漫な状況で集落の縁辺といった様相を示す。なお、特筆すべき遺物として、「博」と墨書された須恵器杯蓋があげられる。</p> <p>古代～中世は複数の耕作面を検出した。耕作地は条里に規制されたいわゆる条里型水田で、南北方向に長い長地型の区画が11世紀ごろより踏襲されていることが分かった。最古の条里型水田面は10世紀に遡る可能性もあり、今後の坪環での調査での検討が必要である。</p>							

公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第241集

大 泉 郡 条 里 遺 跡

寝屋川水系改良事業（一級河川思智川法善寺多目的遊水地）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2013 年10月 31日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 / 株式会社 明 新 社

奈良市南京終町3丁目464番地